国道210号バイパス（木の上工区）
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ガランジ遺跡
稙田市遺跡
稙田条里遺跡

1997年3月

大分県教育委員会

序　　文

大分市稙田地区は、市中心部に近いにもかかわらず農村景観を色濃く残す地区です。この地区を東西に貫く国道210号線バイパス工事に先立って調査されたのがこの報告書に記された３遺跡であります。現在の集落、あるいは水田の下で数百年、数千年の間ひっそりと埋もれていた遺跡が、発掘調査を経て歴史史料として我々の共通の財産となったのです。この地域がどのようにして、どのような経緯で現在の農村景観を呈するようになったのか、我々は遺跡の記録保存を行い、それを考えるきっかけを得たわけであります。

この報告書が今後十分に活用され、地域の歴史の掘り起こしに繋がれば喜ばしい限りであります。最後になりましたが、調査にご協力していただいた多くの方々に対しまして、衷心より御礼申し上げます。

平成９年３月31日

大分県教育委員会
教育長　田　中　恒　治

例　　言

1．本書は平成2年度から同5年度にかけて調査された大分市稙田地区に所在するガランジ遺跡、稙田市遺跡、稙田条里遺跡の三遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は大分土木事務所がおこなう一般国道210号線バイパス（木の上工区）建設工事に先立って行われたものである。

3．遺構の実測は調査員が行い、遺物の実測は調査員のほか志満史郎、末吉香代(以上大分県文化課嘱託）が行った。遺構写真の撮影は、各遺跡の担当者がおこない、遺物写真は藤田大祐（フジタフォトサービス）が撮影した。

4．本書の執筆は第4章を綿貫俊一、第5章を吉田寛、他を小柳和宏（以上大分県文化課）が行った。付章については各項に執筆者を記している。

5．本書の編集は小柳和宏が行った。

本 文 目 次

第１章　はじめに
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の経過 …… 1
　３．調査団の構成 …… 2
第２章　遺跡の立地と環境
　１．地理的環境 …… 3
　２．歴史的環境 …… 3
第３章　調査の概要
　１．調査区の設定 …… 5
　２．遺構の分布 …… 5
第４章　ガランジ遺跡の調査
　１．調査の概要 …… 6
　２．遺構と出土遺物 …… 7
　３．小　　結 …… 10
第５章　稙田市遺跡の調査
　１．既往の調査と調査の概要 …… 13
　２．発掘調査の成果 …… 17
　３．ま　と　め …… 33
第６章　稙田条里遺跡の調査
　１．調査概要 …… 38
　２．遺構と遺物 …… 39
　３．小　　結 …… 63
第７章　まとめ
　稙田地区の開発史 …… 65

付　　章
　付章１．稙田条里遺跡の水田開発に関する考察 …… 73
　付章２．「賀来・城遺跡」の中世土器 …… 77
　付章３．プラント・オパール分析による埋没水田の可能性の検討 …… 98

付　　図
　水路系統、小字切り図（1：10,000）

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　調査地点 …… 5
第３図　調査団位置図 …… 6
第４図　ａ区遺構配置図 …… 6
第５図　溝１実測図 …… 8
第６図　溝１土層断面図 …… 9
第７図　住居跡実測図 …… 9
第８図　ｂ区遺構配置図 …… 10
第９図　溝２土層断面図 …… 10
第10図　住居跡出土土器 …… 11
第11図　ガランジ遺跡遺構出土遺物 …… 12
第12図　稙田市遺跡周辺地形図 …… 14
第13図　稙田市遺跡全体図 …… 15～16
第14図　1991年度調査区全体図 …… 17
第15図　SK１実測図 …… 17
第16図　SK１出土遺物 …… 17
第17図　SH１実測図 …… 18
第18図　SH１出土遺物 …… 19
第19図　SD２土層断面図 …… 20
第20図　SD２出土銅銭 …… 20
第21図　SD１出土遺物① …… 20
第22図　SD１出土遺物② …… 21
第23図　SD１出土遺物③ …… 22
第24図　SD１出土遺物④ …… 24
第25図　SD１出土遺物⑤ …… 25
第26図　SD１出土遺物⑥ …… 25
第27図　SD１出土遺物⑦ …… 26
第28図　1992年度調査区 …… 27
第29図　SA１・SB１実測図 …… 27
第30図　SB２・SB３実測図 …… 28
第31図　1992年度調査区出土遺物 …… 30
第32図　1990年度調査区 …… 31
第33図　SD６土層断面図 …… 31
第34図　SD６出土遺物 …… 31
第35図　SX１・SX２出土遺物 …… 32
第36図　その他の遺物① …… 32
第37図　その他の遺物② …… 32

第38図　国道210号線バイパス建設に伴う稙田市遺跡の時期別遺構 …… 34
第39図　弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構 …… 35
第40図　古墳時代中期の遺構 …… 35
第41図　中世の遺構 …… 36
第42図　近世の遺構 …… 36
第43図　調査区位置図（その１） …… 38
第44図　調査区位置図（その２） …… 39
第45図　Ｂ区溝１実測図 …… 39
第46図　Ｂ区溝１出土遺物 …… 39
第47図　Ｂ区溝２、３実測図 …… 40
第48図　Ｄ区遺構配置図 …… 40
第49図　溝１、２、３実測図 …… 41
第50図　Ｄ区溝４と長方形土坑実測図 …… 41
第51図　Ｄ区溝１出土土器実測図(1) …… 42
第52図　Ｄ区溝１出土土器実測図(2) …… 43
第53図　Ｄ区溝１出土土器実測図(3) …… 44
第54図　Ｄ区溝１出土土器実測図(4) …… 45
第55図　Ｄ区溝１出土土器実測図(5) …… 46
第56図　Ｄ区溝１出土土器実測図(6) …… 47
第57図　Ｄ区溝１出土土器実測図(7) …… 48
第58図　Ｄ区溝１出土土器実測図(8) …… 49
第59図　Ｄ区溝１出土石器、鉄器 …… 49
第60図　Ｄ区溝２、４出土土器実測図(1) …… 50
第61図　Ｄ区溝２、４出土土器実測図(2) …… 51
第62図　Ｄ区長方形土坑出土土器実測図 …… 52
第63図　Ｄ区第１号住居跡実測図 …… 53
第64図　Ｄ区第２号住居跡実測図 …… 54
第65図　Ｄ区第３号住居跡実測図 …… 54
第66図　Ｄ区第４号住居跡実測図 …… 55
第67図　Ｄ区住居跡出土遺物実測図(1) …… 55
第68図　Ｄ区住居跡出土遺物実測図(2) …… 56
第69図　Ｄ区出土土器 …… 57
第70図　E、F区遺構配置図 …… 57
第71図　E、F区水田層出土土器 …… 58
第72図　Ｆ区畦畔の状況 …… 59
第73図　Ｆ区南壁土層断面図 …… 60
第74図　Ｈ区遺構配置図 …… 61
第75図　Ｈ区溝１、２、３実測図 …… 61
第76図　H区溝１、２、３、４出土遺物実測、拓本図 …… 62
第77図　Ｈ区第４号溝実測図 …… 63
第78図　Ｈ区第５号溝実測図 …… 63
第79図　稙田条里遺跡の古墳時代水田の広がり …… 64

第80図　大分川下流域の微地形分類図（千田氏原図）…… 65
第81図　出田氏による条里の復元 …… 67
第82図　七瀬川流域の水路図 …… 68

〈付章1〉

図1　プラント・オパール定量分析手順 …… 73
図2　Ｄ－１区土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量 …… 74
図3　Ｆ区土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量 …… 75
図4　Ｄ－１区土壌のプラント・オパール密度から推定したイネ …… 75
図5　Ｆ区土壌のプラント・オパール密度から推定したイネ …… 75

〈付章２〉

第１図　賀来・城遺跡位置図 …… 78
第２図　賀来・城遺跡周辺地割図 …… 80
第３図　賀来・城遺跡発掘区設定及び主要遺構分布図 …… 81
第４図　主要遺構分布図 …… 82
第５図　中世の溝状遺構図 …… 82
第６図　弥生・古墳・古代の遺物 …… 84
第７図　土師質土器① …… 86
第８図　土師質土器② …… 87
第９図　土師質土器③小皿 …… 88
第10図　土師質土器 坏 法量グラフ …… 89
第11図　土師質土器 小皿 法量グラフ …… 90
第12図　青磁・白磁 …… 90
第13図　土師質土器法量組成 …… 91
第14図　12世紀における大分平野の小皿変化の方向性 …… 95

〈付章３〉

図1　プラント・オパール定量分析手順 …… 98
図2　賀来・城遺跡土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量 …… 99

表　目　次

第１表　江戸時代の各村高変遷表 …… 3
第２表　遺跡一覧表 …… 4
第３表　1992年度調査区遺構一覧 …… 29

〈付章１〉
表１　植物体中の珪化機動細胞密度 …… 76

〈付章２〉
第１表　土師質土器－坏－の属性観察表 …… 92
第２表　土師質土器－小皿－の属性観察表 …… 93

〈付章３〉
表１　植物体中の珪化機動細胞密度 …… 98

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

野津原方面から大分市に抜ける国道210号線は、大分市の西に広がる稙田の平野部の裾を通って大分市に入る。稙田地区は道路幅が狭く、周辺部の団地造成による人口増とあいまって、慢性的な交通渋滞を起こしていた。そこで、大分県大分土木事務所では、平成２年度から国道210号線のバイパス工事を行なうこととなった。そこで、大分県文化課では、国道210号線と国道442号線の分岐する大分市木の上から、大分市大字玉沢の七瀬川の橋梁部分までの長さ約２㌔について、平成２年度から試掘調査に入ることになった。この地区は従来「稙田条里」、「玉沢条里」と呼ばれている周知の遺跡であるが、狭義の埋蔵文化財についてはほとんど知られていなかった。

試掘調査は、遺跡の存在が予想される部分に重機による試掘トレンチ（幅約２ｍ）を設定し、基本的に表土を除去する方法で行い、一部についてはかなり深くまで掘削を行なった。

その結果、以下に調査の経過を詳述する３個所で遺構が検出され、本調査を実施することになった。

２．調査の経過

ガランジ遺跡

平成２年10月に表土剥ぎ開始。引き続き、遺構の検出、掘下げを行い、11月下旬に調査終了。

稙田市遺跡

稙田市遺跡は３か年にわたって調査された。

（平成２年度）

平成２年12月に表土剥ぎ開始。平成３年１月上旬に遺構検出を完了した。引き続き、遺構の掘下げを開始し、３月下旬までに完掘した。

（平成３年度）

平成４年１月下旬に表土剥ぎ開始。２月より、遺構の掘下げ作業を開始する。３月上旬に完掘・実測等の現地作業を完了する。

（平成５年度）

調査対象地のうち、南側の一部を５月19日、重機により表土剥ぎを行なう。５月25日より、遺構の掘り下げ作業を開始する。５月28日、完掘し写真を撮る。

残りの調査区に９月13日、重機を入れて表土剥ぎ開始。９月17日、遺構検出写真。20日より遺構掘り下げ開始。10月６日、全体写真を撮影し、調査終了。

稙田条里遺跡

平成５年４月12日、稙田条里遺跡のＨ区から調査に入った。重機により、基本的に地山面（遺構検出面）まで掘削を行ない遺構の確認に努めたが、Ｈ区の西側では、水田層が広がり、柱穴や住居跡などの遺構はまったく検出されなかった。

４月23日には、Ｈ区の調査と平行してＦ区の表土剥ぎも開始した。４月27日には、試掘調査によって溝と考えられていた遺構が、水田畦畔の可能性が高いことが分かり、水田遺構の検出に力を注ぐ。土層断面にも畦畔状の盛り上がりを確認。

５月に入ると、雨の日が多くなり、水汲み出し作業が多くなる。５月13日、大分短期大学佐々木章先生、Ｆ区の土層断面より、プラントオパール分析のための資料を採取。

６月３日、佐々木先生、再び来跡され、資料を採取。６月７日、Ｆ区の遺物出土写真を撮る。Ｈ地区は、６、７月と横の水路からの漏水と雨水の侵入で、月の半分くらいは作業ができなかった。

8月17日、E区の表土剥ぎに入る。9月2日にはD区の表土剥ぎも開始する。いずれも水田層の存在が推測できる部分。9月3日、台風13号の襲来で調査区がすべて水没する。9月6、7日にはJ区（もっとも東側の地点）の試掘調査を行なうが、遺構なし。9月10日、D区にはほとんど水田層が広がらないことがわかる。

10月に入ると、D区の溝掘り下げが続く。11月2日から5日まで、B区の表土剥ぎを行なう。B区は溝が2条検出されたのみ。11月30日、遺構の実測を行い調査終了。11月26日からは、D区の北側部分の表土剥ぎを開始。

12月1日にはD区において住居跡2棟確認。

3．調査団の構成

調査団の構成は以下の通りである。

事業主体　大分県教育委員会

調査指導

後藤宗俊（別府大学教授）

佐々木章（大分短期大学助教授）

調査員

渋谷忠章（大分県教育委員会文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

高橋　徹（　〃　埋蔵文化財第2係主査）

小柳和宏（　〃　埋蔵文化財第2係主任）

綿貫俊一（　〃　）

吉田　寛（　〃　）

第2章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

遺跡は大分市の南の郊外に開ける平野部にある。北と西を木の上の丘陵により、南は霊山などの山々により、東は七瀬川により画された南北0.5㌔、東西2㌔ほどの標高17㍍～12㍍mの平野である。平野は桑本のあたりで屈曲し「く」字状になる。その屈曲点を境にして上流側は「稙田地区」、下流側は「宗方地区」と呼称されている。

現在七瀬川は南の霊山の麓側を流れているが、平野部には旧河道を確認することが出来る。二十年程前に七瀬川の堤防が高く築かれるまではしばしば氾濫を起こしており、特に桑本はしばしば水に浸かった。現在、旧河道は図80のように確認されている。それによると、やはり平野の南側を流れることが多く、口戸のところで大きく北流することがあったことを示している。この部分には条里地割りが認められず、河道の移動に伴うものである可能性もあろう。

2．歴史的環境

この平野部は、大分川下流域ではかなり安定した広い平野である。江戸時代には上流側から口戸村、木の上村、市村、桑本村、粟野村、雄城村、下宗方村、上宗方村があった。それぞれの村の石高は表の通りである。各々の村の中心部は、現在市街化されてきて乱れてきてはいるが、集落の核となる部分があり完全な集村形態を示していた。そして、その村の入り口（境界）には江戸時代前期から中期にかけて六地蔵石幢が立てられていた。これらの村の中心部が何を基盤に成立したかは具体的に知れる資料はないが、多くは「○○屋敷」の地名を残すことから、中世のある段階から「屋敷」などを中核として集村化をとげ、ムラーノラーヤマといった三重構造を確立していった地域であったことが推測できる。今回の発掘調査はまさにその「ノラ」の部分を長さ約2㌔にわたって掘り抜くものである。

中世、この地は藤原頼長領、後に後院領となる稙田荘の成立によって形成されたもので、本来は開発領主と推測される大神氏（稙田氏）の開発になるものであった。後に稙田氏は地頭として各名の経営にあたる。ただし、鎌倉時代中期以降は守護大友氏の干渉を受け、稙田惣領家は実質的に大友系となる。そして、戦国時代にはその稙田氏も滅亡し、この稙田荘は大友家臣の給地として分与されることになる。

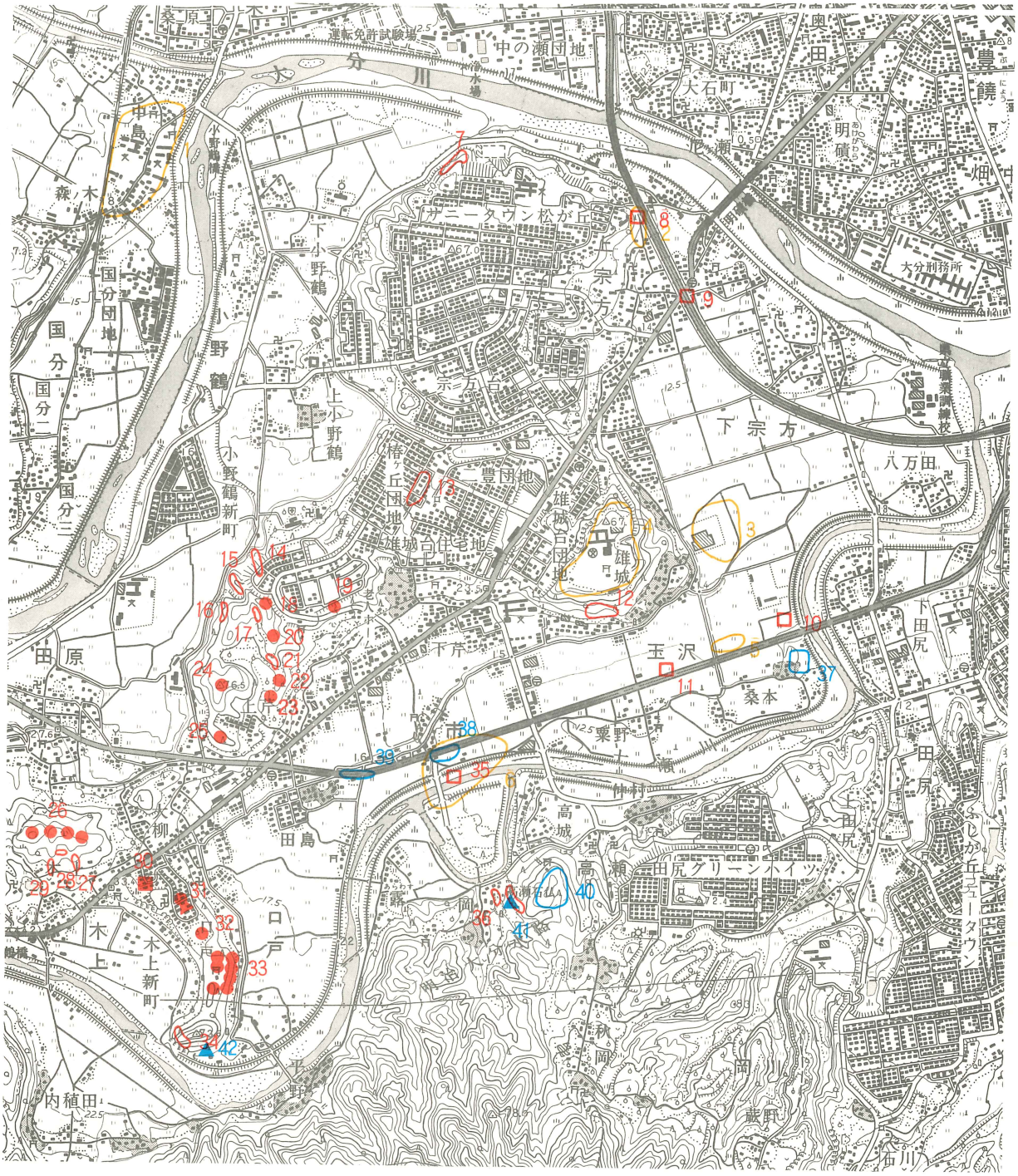
それより以前の古代については稙田郷が成立しているが、詳細は知れない。古墳時代以前は、丘陵上に古墳や集落が築かれるものの、沖積地についてはほとんど遺跡が知られていない。

第1表　江戸時代の各村高変遷表

単位は「石」

村名 / 時期	口戸	木ノ上	市	下宗方	上宗方	桑本	粟野	雄城
	延岡藩領	延岡藩領	臼杵藩領	臼杵藩領	臼杵藩領	臼杵藩領	延岡藩領	延岡藩領
正保	372	363	531	416	419	218	173	223
天保	382	379	349※	427	431	224	173	224
明治	376	371	－			－	－	224

※世利門村を分村のため減少



（黄色 弥生時代、赤色 古墳時代、青色 中世～近世）

第1図 遺 跡 位 置 図（1：25,000）

第2表 遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	賀来中学校遺跡	15	大曽2横穴墓群	29	志土地横穴墓群
2	北の後遺跡	16	大曽3横穴墓群	30	木ノ上古道石棺群
3	深町遺跡	17	漆間横穴墓群	31	御陵古墳
4	雄城台遺跡	18	六部塚古墳	32	千人塚
5	稙田条里遺跡H区	19	下迫古墳	33	浅草神社古墳群
6	稙田市遺跡	20	虎御前古墳	34	岩崎横穴古墳群
7	小野鶴横穴遺跡	21	高来山横穴墓群	35	稙田市遺跡
8	北の後遺跡	22	漆間古墳	36	高瀬横穴墓群
9	六反田遺跡	23	世利門古墳	37	桑本館跡
10	稙田平石遺跡	24	大将軍古墳	38	稙田市遺跡
11	稙田条里遺跡D区	25	稲荷古墳	39	ガランジ遺跡
12	雄城台下横穴墓群	26	山伏古墳群	40	高城山城跡
13	椿ヶ丘横穴墓群	27	土肥横穴墓群	41	高瀬石仏
14	大曽横穴墓群	28	木ノ上峠横穴墓群	42	口戸磨崖仏

第３章　調査の概要

１．調査区の設定

この国道210号線バイパス工事にともなって、大分県文化課では遺跡の存在する可能性の高い地区について試掘調査を行うこととした。各地区は、基本的に小字をつけて地区名としたが、「稙田条里遺跡」は周知遺跡であったことから小字によらず、「稙田条里遺跡」とした。また、「稙田市遺跡Ｐ区」は隣接地域で大分県文化課が河川改修工事にともなって「稙田市遺跡」を調査しており、その一連の遺跡ということで「稙田市遺跡○○年度調査区」という呼称になっている。

試掘調査の結果、遺跡と確認されたのはルートの西側から「ガランジ遺跡」、「稙田市遺跡」、「稙田条里遺跡Ｂ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｈ区」である。

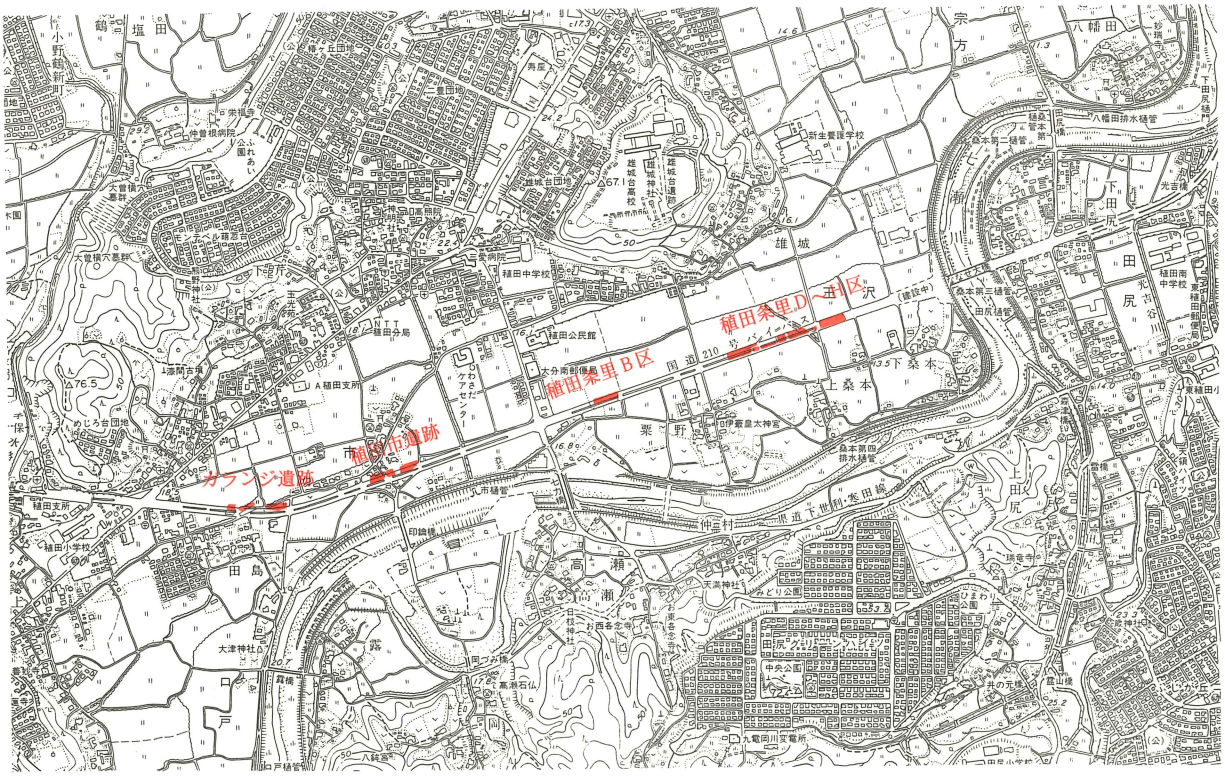
２．遺構の分布

各遺跡の詳細は次章以下で触れるので、ここでは各遺跡の概要について簡単に説明する。

ガランジ遺跡は、弥生時代の住居跡１基と中世の溝が２条確認された。溝は現在の「古井路」に並行するもので、その前身である可能性があるものである。

稙田市遺跡は、1987年から1991年にかけて河川改修工事にともなって調査された稙田市遺跡の北側に位置し、その関連遺構が検出されるかと想定された遺跡である。しかし、検出された遺構は古墳時代前期の住居跡１基と溝１条、さらに近世の屋敷遺構であった。その他に縄文時代晩期の土器包含層が調査された。

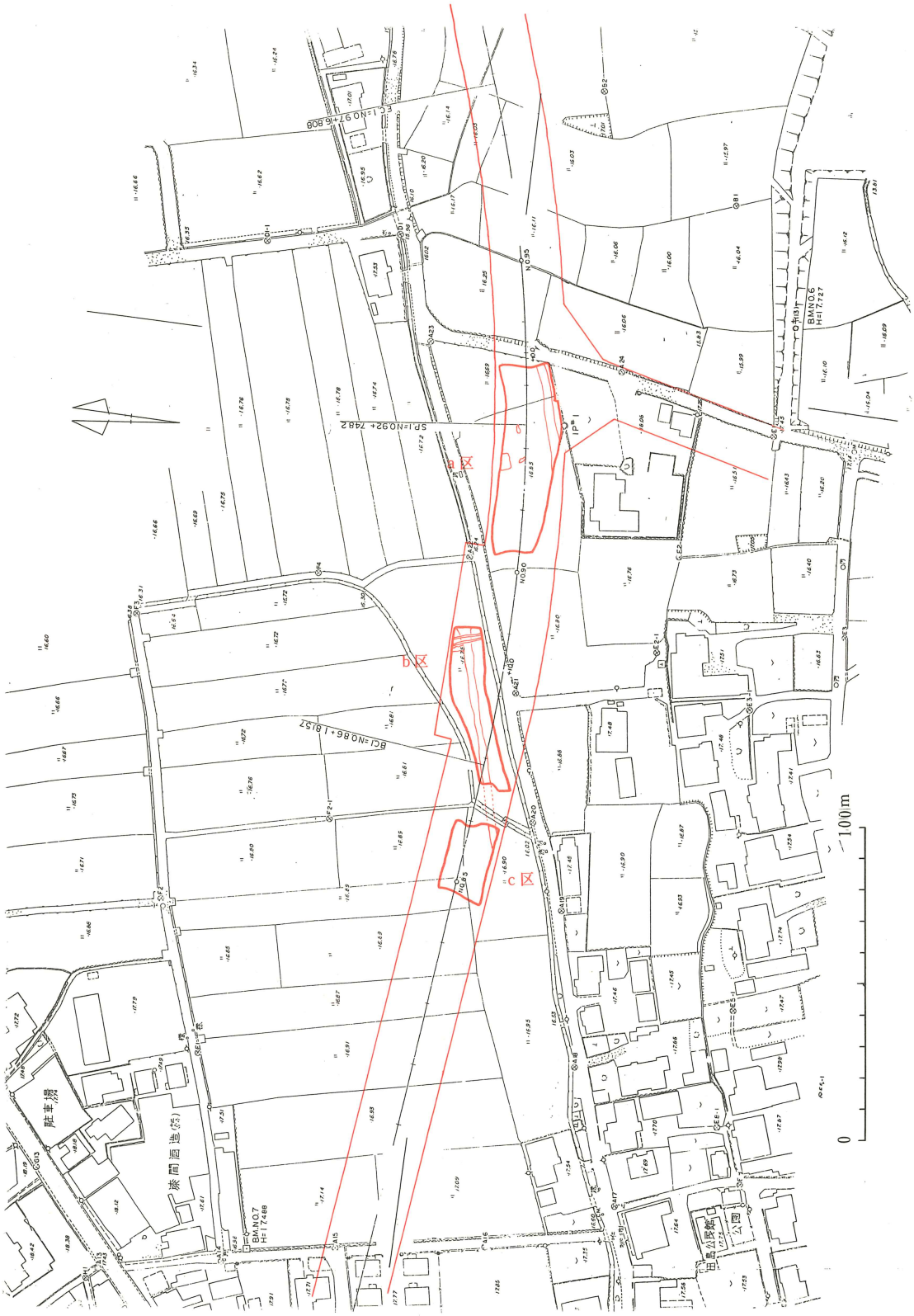
稙田条里遺跡は、広大な面積に及ぶ「条里」遺構の一部を調査したものであったが、条里の成立に係わる遺構は検出できなかった。調査した遺構は弥生時代後期の溝、古墳時代前期の溝と住居跡、古墳時代後期の水田遺構である。



第２図　調　査　地　点

第４章　ガランジ遺跡の調査

１．調査の概要



第３図　調査団位置図

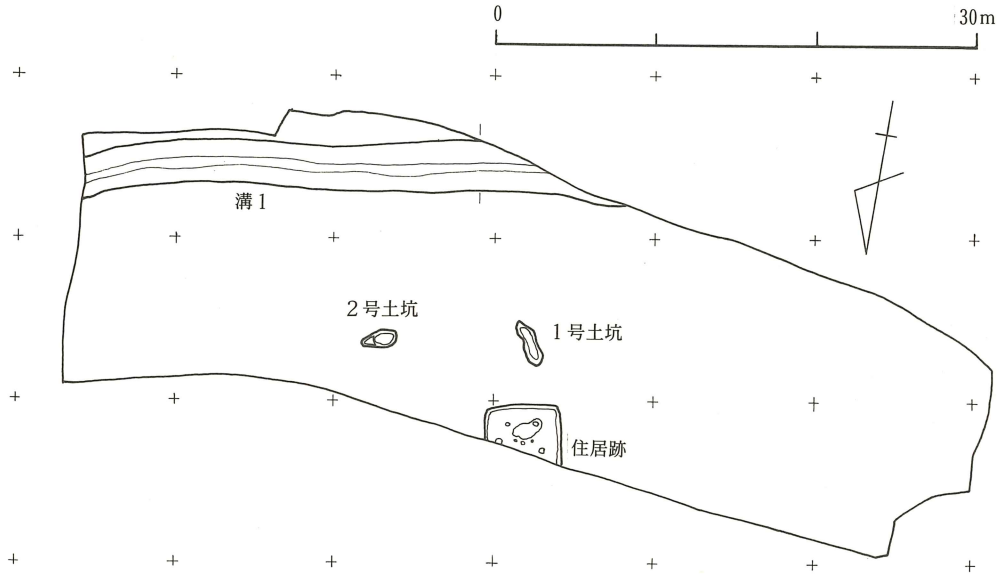
調査地区は大分市大字口戸字ガランジから大字木の上字鉾手にかけての長さ200ｍの範囲である。ちょうど、市の集落を東西に貫く道を挟んでその両側を調査したことになる。周辺の試掘調査の結果によると、調査対象地区の東側は段丘崖と考えられる低地部分があり、遺構の存在は確認できなかった。西側にも遺構の広がりは確認できなかった。

調査はａ、ｂ、ｃの３カ所に分けておこなった。その結果、ａ区からは溝１条と弥生時代後期の住居跡１基、時期不明の土坑２基、ｂ区からは溝が１条検出された。ｃ区はｂ区の溝の続きが一部確認されたのみである。

２．遺構と出土遺物

ａ区

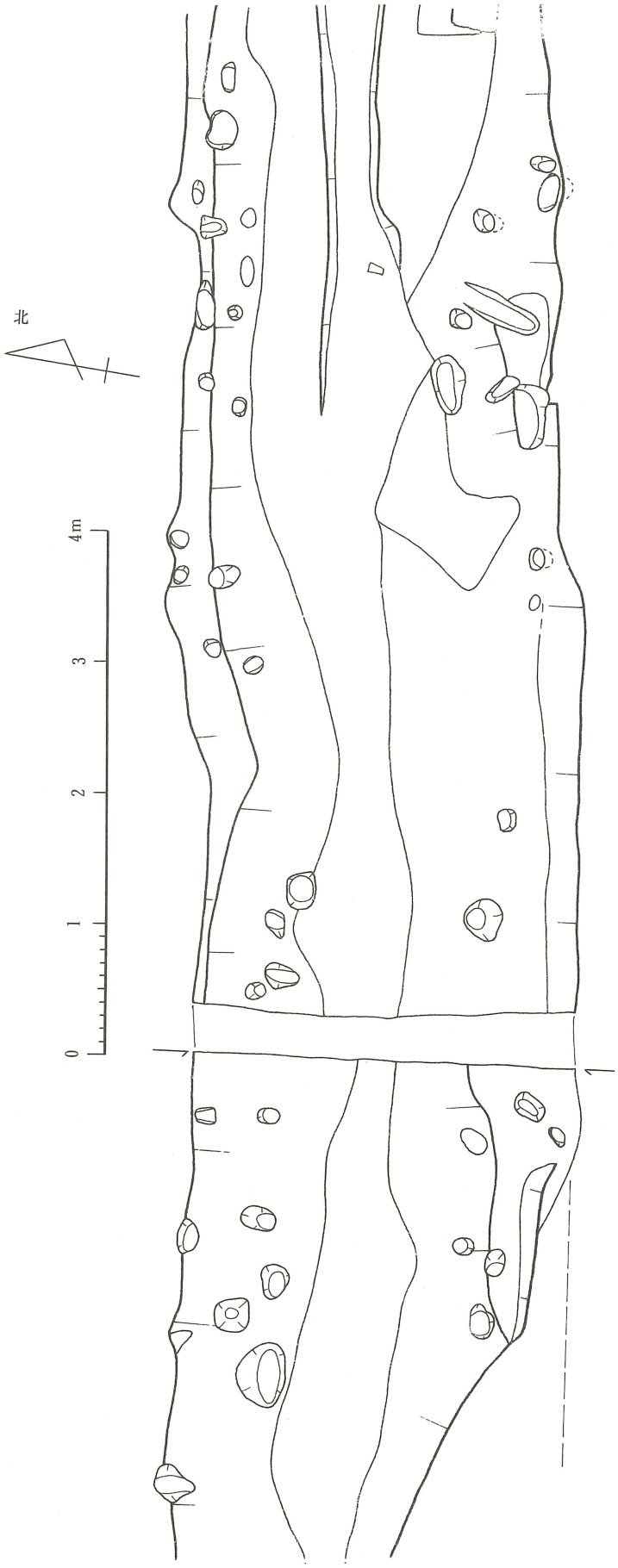
ａ区は「市」の集落がのる微高地の縁辺部にあたる。検出された遺構は、溝と住居跡、そして２基の土坑である。



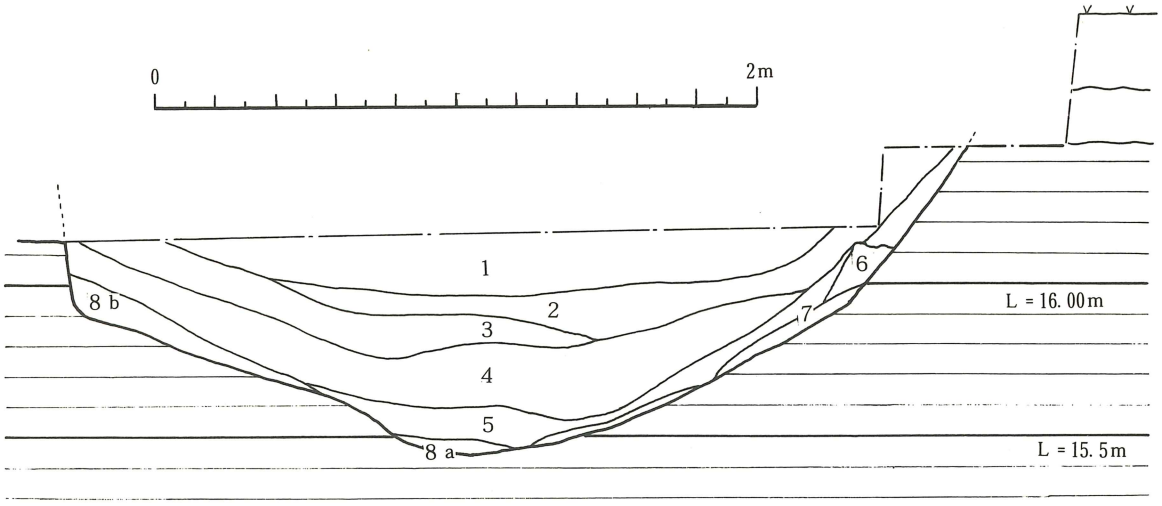
第４図　ａ区遺構配置図

（溝１）

溝はほぼ東西方向に伸びており、上端幅2.3㍍で深さは検出面から約55㌢のゆるやかなｖ字形を呈している。堆積状況は、基本的にシルトと砂層の互層になっており、水流があったことを示している。溝の肩部には杭痕と考えられるピットが多数見られた。出土遺物は第11図19から26で、弥生時代後期と中世の遺物が出土している。溝の時期は、最も時期が下る火鉢（第11図26）の15世紀後半から16世紀以降ということになるが、底から12～13世紀の白磁（第11図25）が出土しており、掘削時期はさかのぼることが推測される。



第5図　溝1実測図

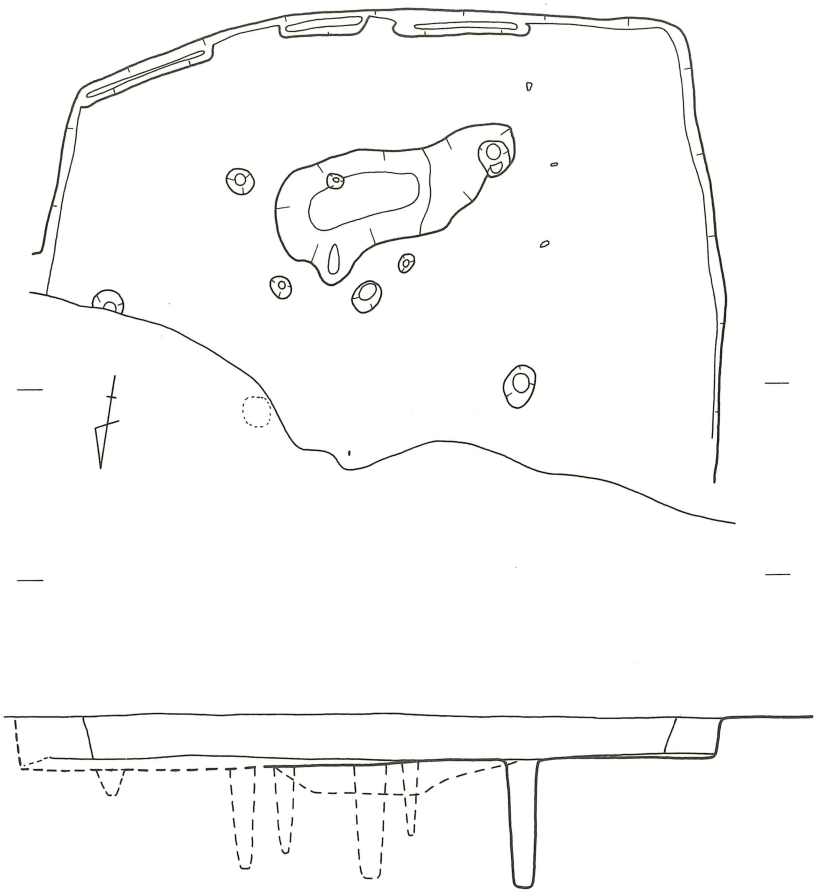


第6図　溝1土層断面図

（住居跡）

調査区北壁に半分がかかっており全形は窺い知れないが、東西3.5㍍である。主柱穴は4カ所で、それから復元すると南北は2.4㍍ほどになる。南側主柱穴の間には、焼土の堆積した炉跡がある。また、南側壁際には壁溝が一部残っている。

出土遺物は比較的多く、第10図に示す通りである。1から7はいわゆる安国寺式土器の壺で、11から17は甕である。安国寺式土器は、口縁部に波状文を有し、胴部の突帯は2から3条である。甕の底部は平底からわずかに上げ底状を呈している。これらの特徴から弥生時代後期中葉とすることができる。



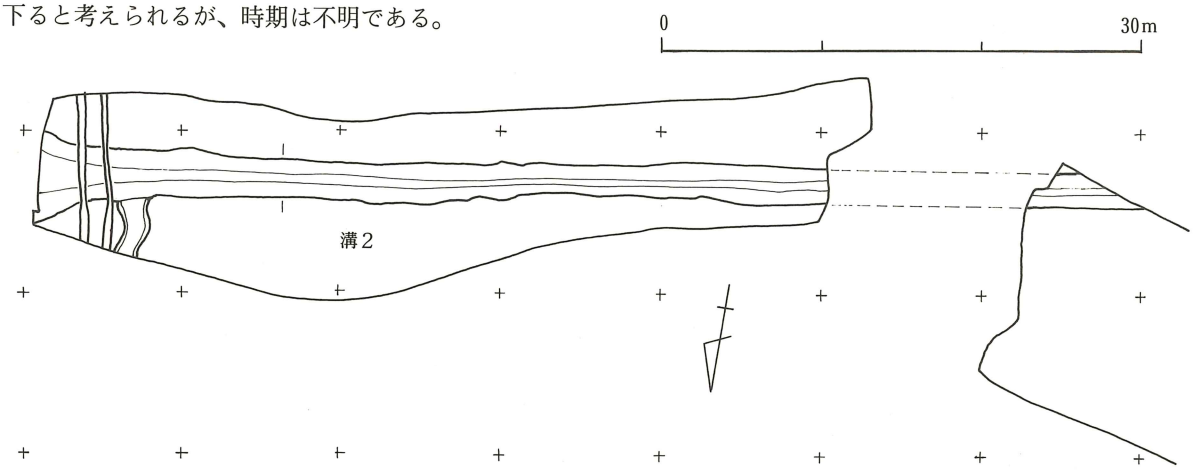
第7図　住居跡実測図

b区

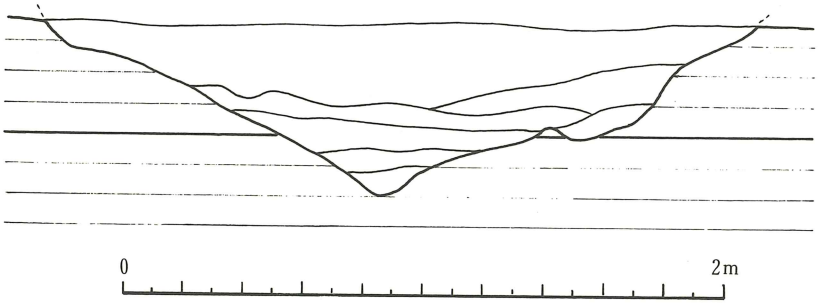
（溝２）

現在の道路に並行する位置で検出された溝で、幅2.2ｍで深さ0.6ｍのゆるやかなｖ字形を呈する。下半には砂層が見られ、水流があったことを示している。

出土遺物は少なく、形状のわかるものは弥生時代後期中頃の甕底部だけであるが、状況から考えて中世にまで下ると考えられるが、時期は不明である。



第８図　ｂ区遺構配置図



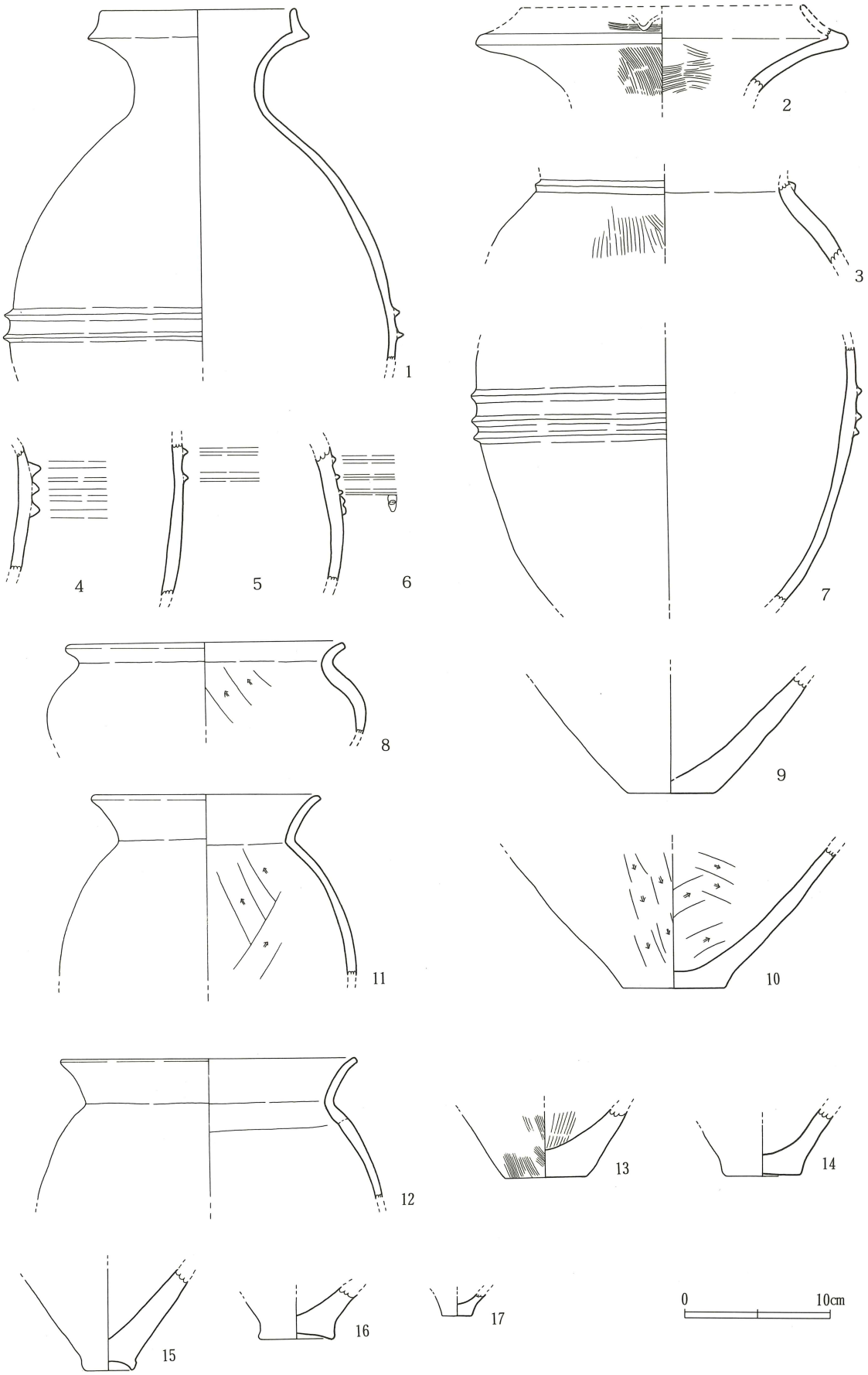
第９図　溝２土層断面図

３．小　結

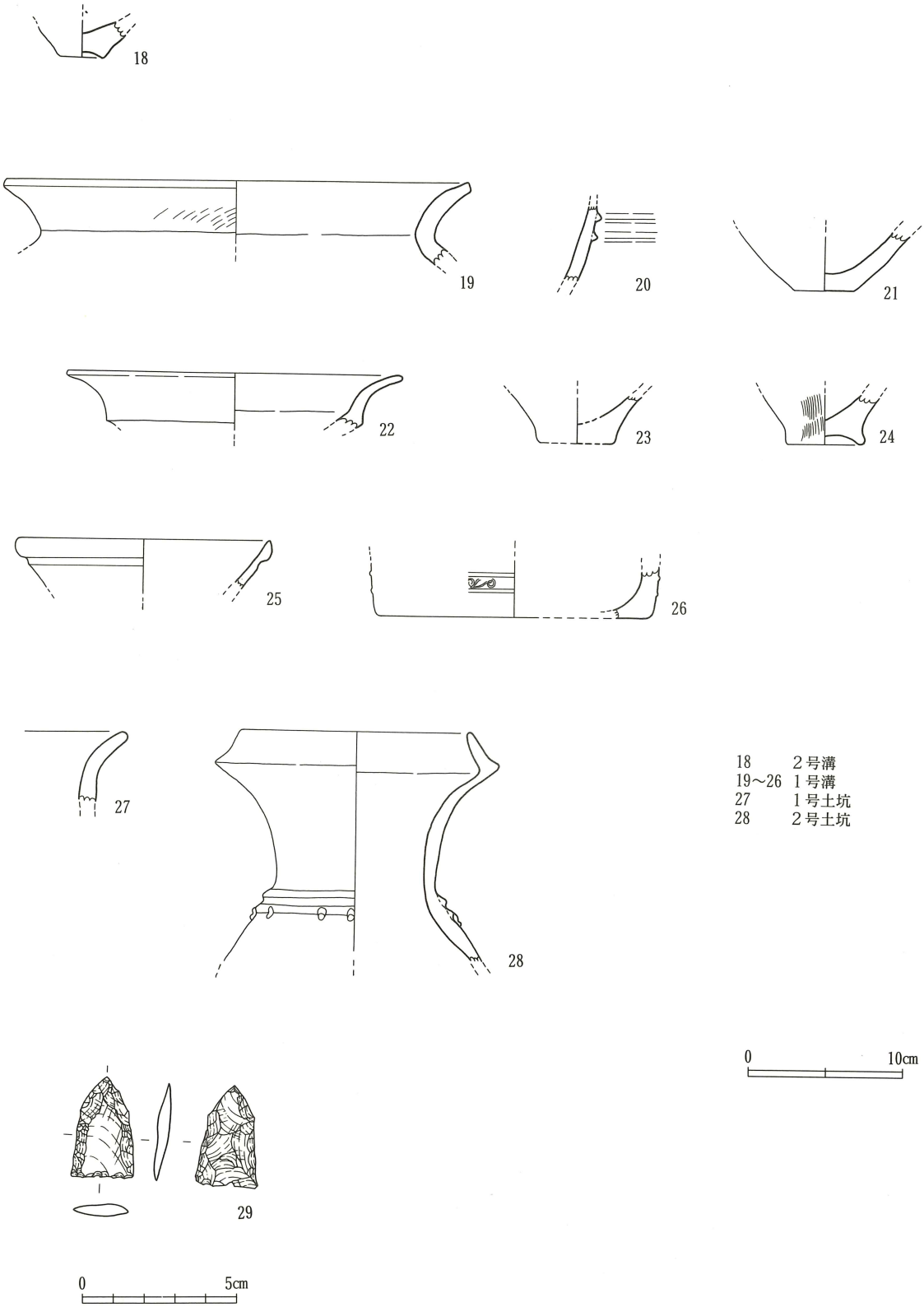
ガランジ遺跡は、古井路が横を流れる現道を横切る形で調査区が設定された。残念ながら現道部分は調査ができなかったが、中世と考えられる２条の溝と、弥生時代後期の住居跡１基が検出された。

弥生時代後期の住居跡は１基のみ検出されたが、集落としては北側に展開する可能性が高い。

中世の溝は現在の「古井路」に並行するもので、その前身である可能性が高い。溝１の東側延長線上は段丘崖となっていることから考えると、溝１が段丘崖の形成によって機能しなくなったために、新しい北方に水路（溝２）の付け替えを行った可能性が高いと言えよう。溝１の西側延長線の痕跡は、現地割りで100ｍ近く確認できる。この部分で現道もやや北に振れており、段丘崖の形成がやはり影響していると考えられる。溝１からは12～13世紀に属する白磁が出土しており、段丘崖の形成はその後である。



第10図　住居跡出土土器



第11図　ガランジ遺跡遺構出土遺物

第５章　稙田市遺跡の調査

１．既往の調査と調査の概要

稙田市遺跡は大分県大分市大字市に所在し、大分川の支流である七瀬川流域北岸の沖積低地に立地する（第12図)。周辺には古代の条里遺構が残存しているといわれ、稙田市遺跡も稙田条里遺跡として広範囲に周知されている領域の一画に位置している。稙田市遺跡では、建設省による七瀬川河川改修工事に伴い、1998年度から1991年度の５年間にわたって、大分県教育委員会を主体とした発掘調査が行なわれている。七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査区は、今回報告する国道210号線バイパス建設に伴う発掘調査区の南約50ｍに位置しており、約35,000㎡が調査されている。その結果、稙田市遺跡は縄文時代晩期末から近世にかけての複合遺跡であることが判明しており、検出された縄文時代晩期の刻目突帯文土器やカマドを有する古墳時代中期の住居跡および中世の屋敷跡などは、本地域の指標となりうる遺構・遺物である[(1)]。

今回以下で報告するのは、国道210号線バイパス建設に伴う稙田市遺跡の調査概要である（第13図)。当該バイパス建設に伴う稙田市遺跡の調査の内容を紹介するのは、今回が初めての機会となるが、本報告をもって正式報告となすものである。発掘調査はバイパス建設予定地を一度に調査したわけではなく、用地買収状況と工事進捗状況に応じて一定面積を試掘・本調査の対象とし、最終的には1990年度から1992年度の３年間に渡って、断続的な調査を行なうこととなった。試掘調査はバイパス建設予定地全域を対象にし、その試掘調査の結果に基づいて、遺構・遺物の分布する幅約22ｍ、延長約138ｍの約3,000㎡を本調査の対象とした。ただし、上記の面積のうち、現用の里道下や舗装道路下の一部は本調査対象外とした部分がある。各年度の調査対象面積と検出した遺構は、以下の通りである。

1990年度　弥生時代終末から古墳時代前期の包含層と11～12世紀（？）の溝１条を検出。
　　調査面積約1,600㎡。

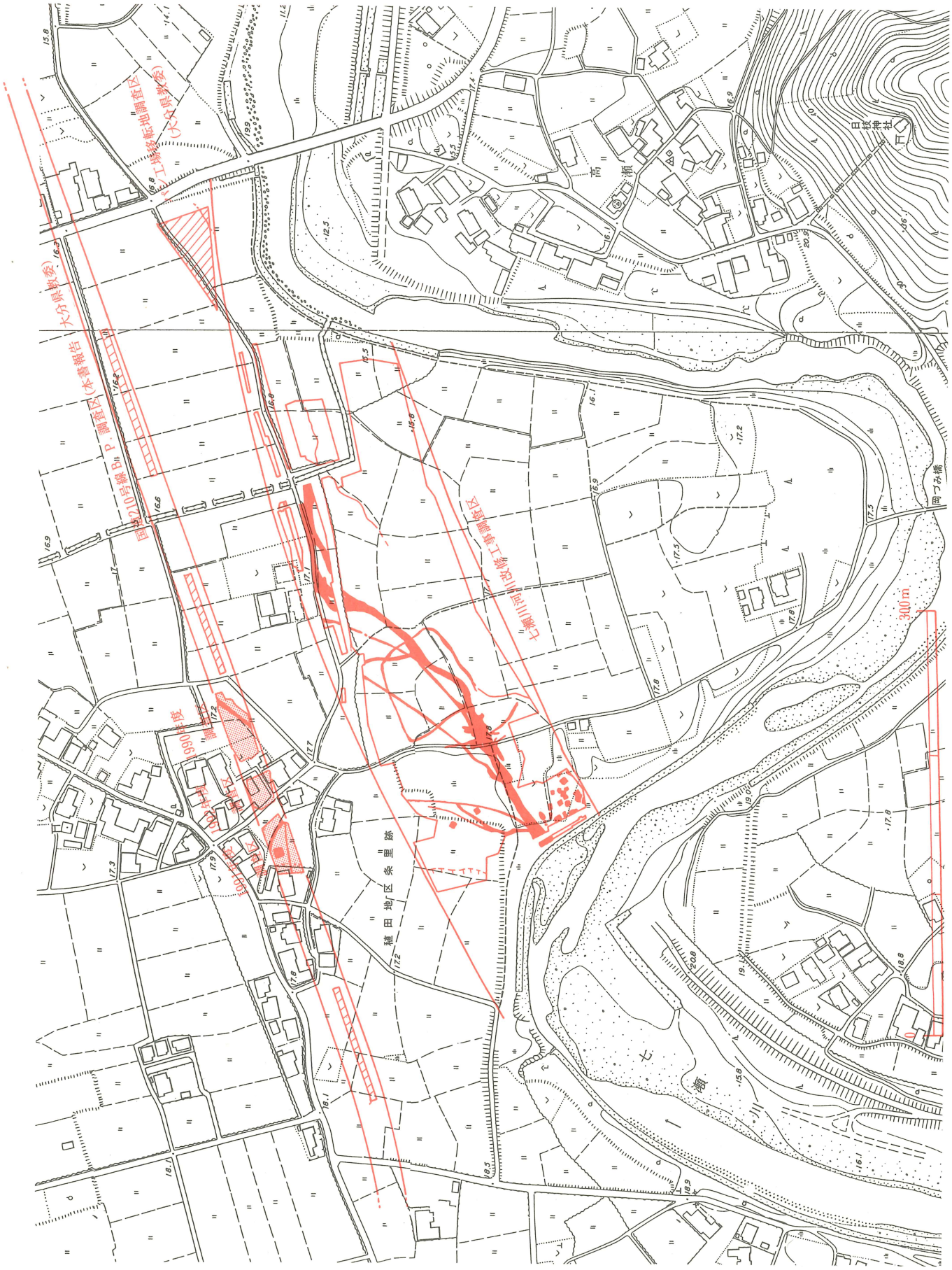
1991年度　古墳時代前期の土坑１基、古墳時代後期の住居跡１棟、中世および近世の溝各１条ほかを検出。
　　調査面積約900㎡。

1992年度　掘立柱建物３棟、柵列、土坑、井戸４、溝５条を検出。掘立柱建物のうちの一部が中世にさかのぼる可能性があるが、他の遺構はすべて近世以降に比定される。
　　調査面積約500㎡。

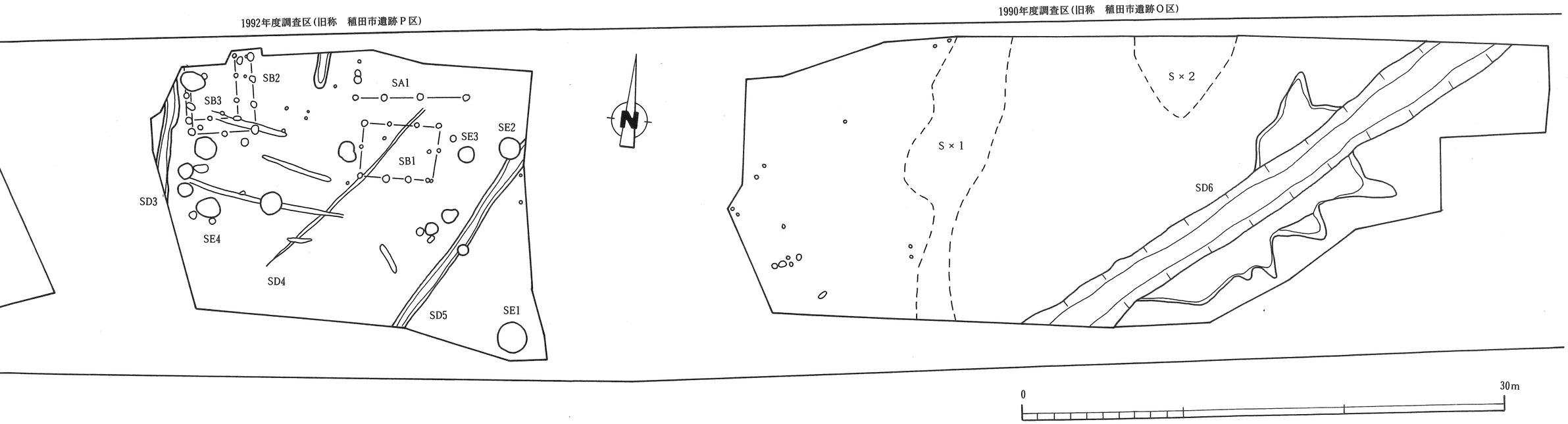
なお、発掘調査当初は七瀬川河川改修工事の調査区との関連から、1990年度調査区を稙田市遺跡Ｏ区、1991年度調査区を同Ｎ区、1992年度調査区を同Ｐ区と仮称していた。これらの調査地区名は河川改修工事の発掘調査の長期化に伴い、統一がとれず系統的なものでなくなったため、本報告ではアルファベットによる地区名は採用せず、調査年度を基準とした記述を行いたい。

以下、今回の調査で検出された遺構・遺物の詳細を紹介する。

註 (1)　大分県教育委員会『稙田市遺跡』Ⅰ～Ⅴ(1988～1992年)

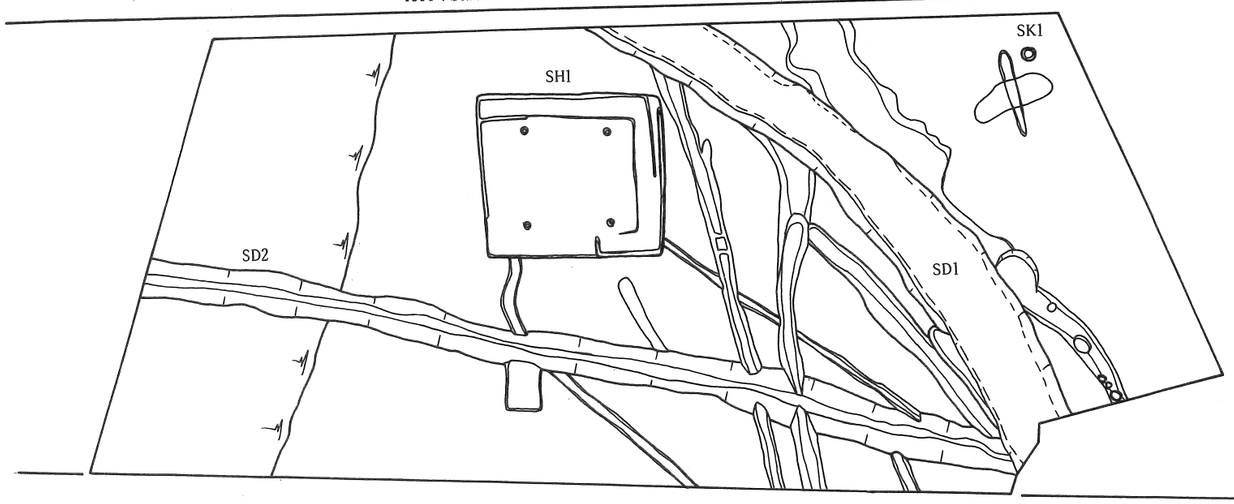


第12図　植田市遺跡周辺地形図

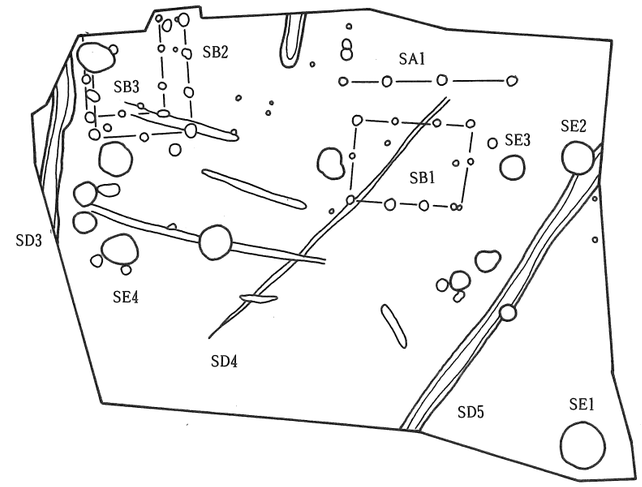


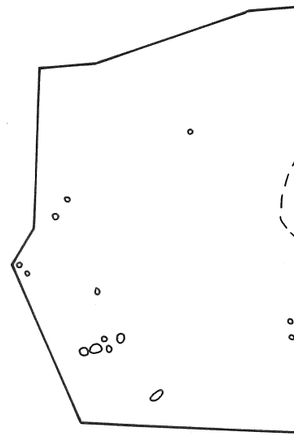
第13図　植田市遺跡全体図（Ｓ＝1／250）

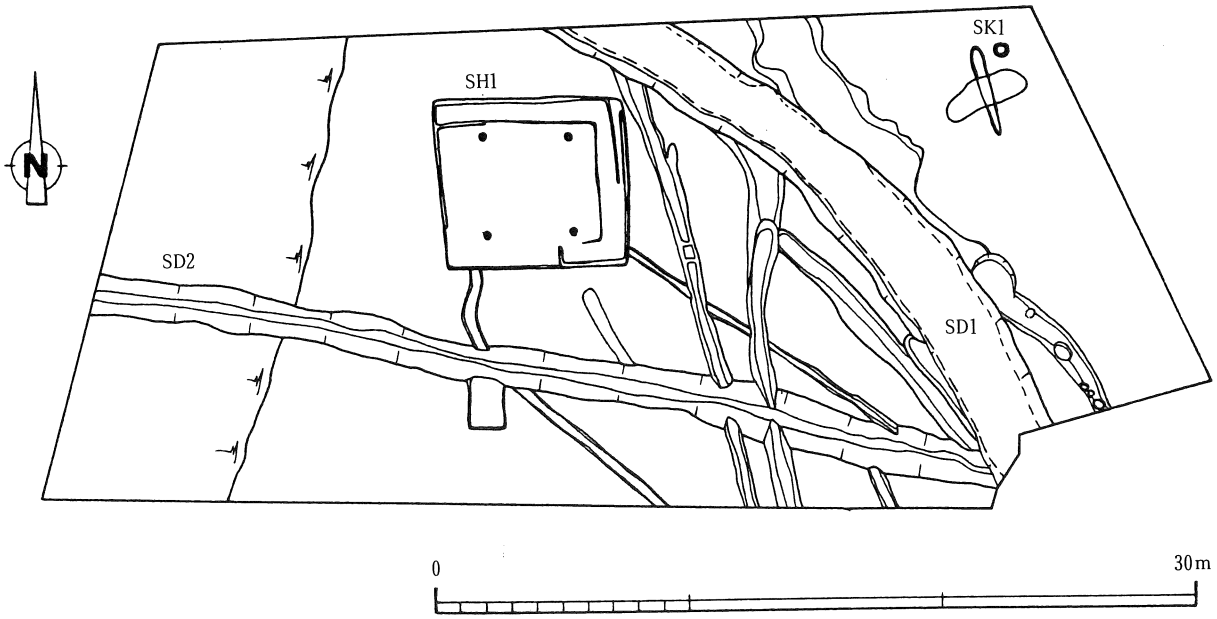
1991年度調査区(旧称　稙田市遺跡N区)



1992年度調査区(旧称　稙田市遺跡P区)







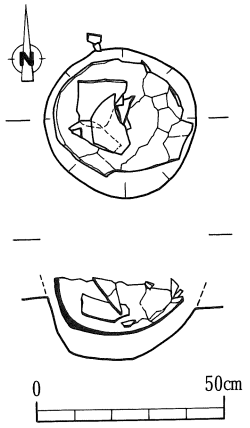
第14図　1991年度調査区全体図（S＝1／300）

2．発掘調査の成果

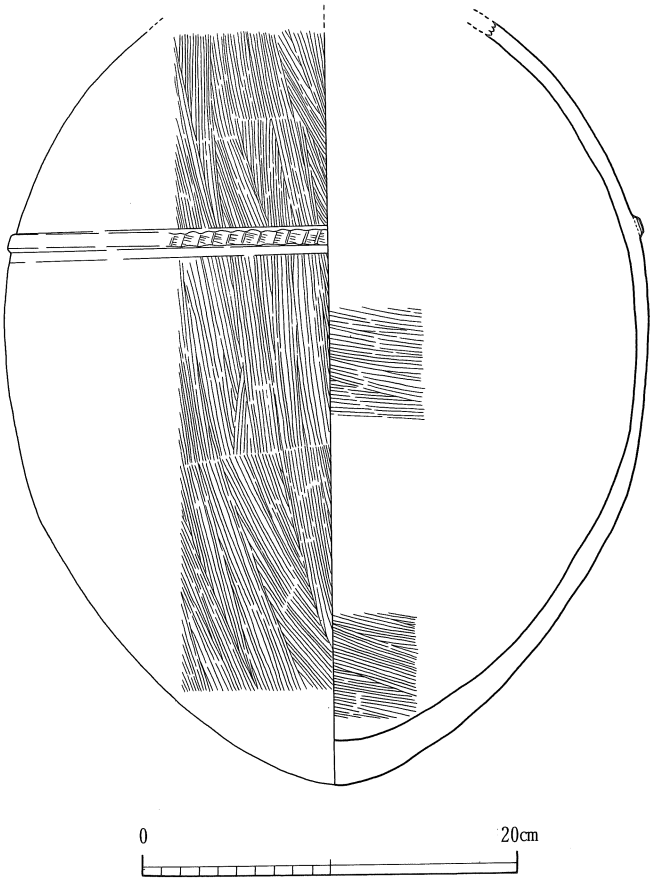
(1)　1991年度調査区（第14図）

概要　1991年度調査区は、国道210号線バイパス建設に伴う稙田市遺跡の調査区の東側に位置する。発掘調査当初は、七瀬川河川改修工事に伴う調査区との関連から稙田市遺跡N区と呼称していた。調査面積は約900㎡である。古墳時代前期の土坑１（ＳＫ１）、中期の住居跡１（ＳＨ１）、中世の溝１（ＳＤ２）、近世の溝１（ＳＤ１）などが検出されている。

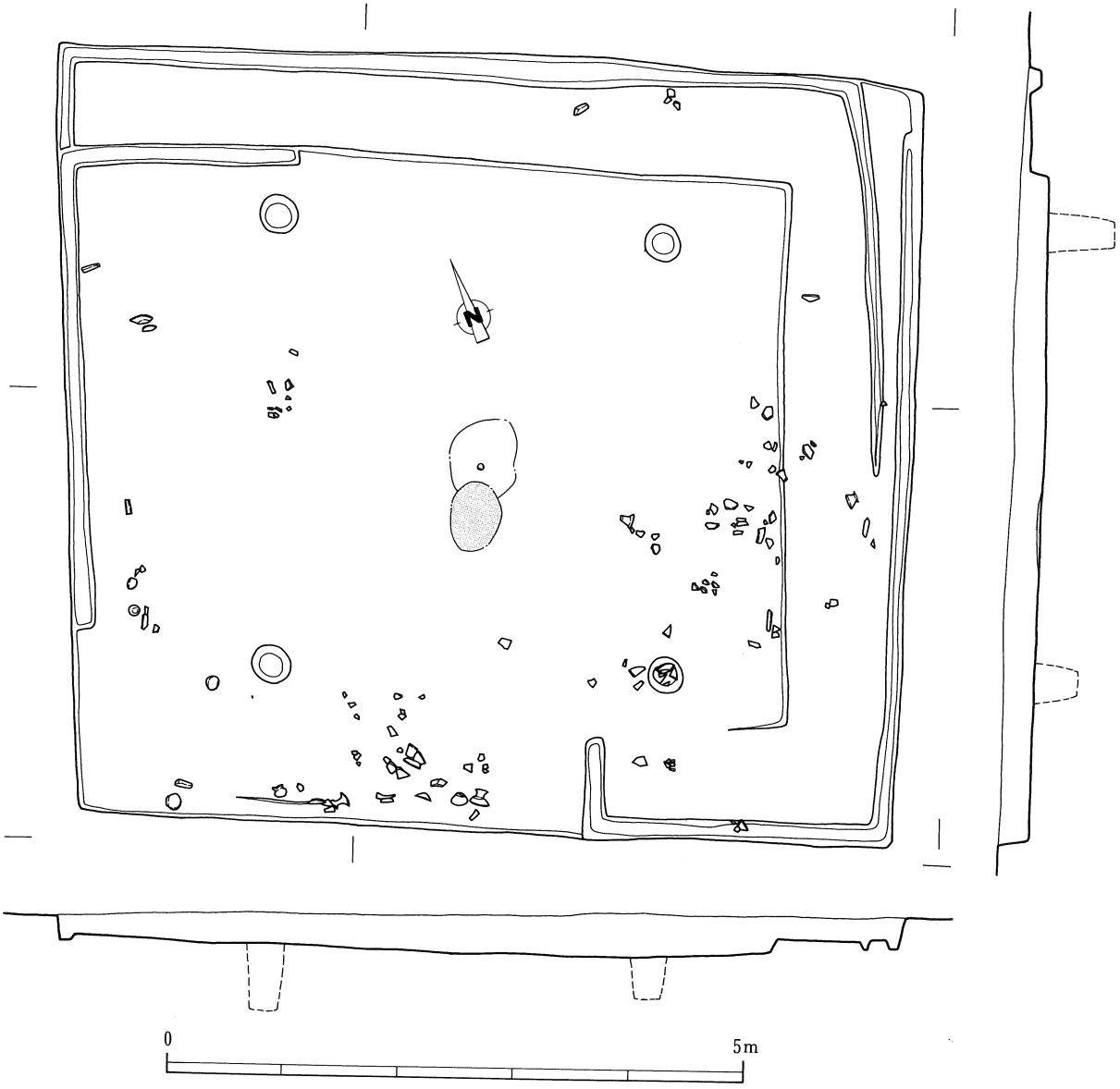
ＳＫ１（第15図）　調査区北西隅付近で検出した土坑で、径約0.4m、深さ約0.15mを測る。土坑内部からは、土師器の壷形土器の底部から胴部にかけての部位が出土している。遺構と出土遺物の状態から、上面がかなり削平されているものと思われるが、本来は完形品であった壷を斜め約40度の角度で土坑内に安置していた状況が復元される。小児用の埋葬遺構と思われ、古墳時代前期に比定される。



第15図　ＳＫ１実測図（S＝1/20）



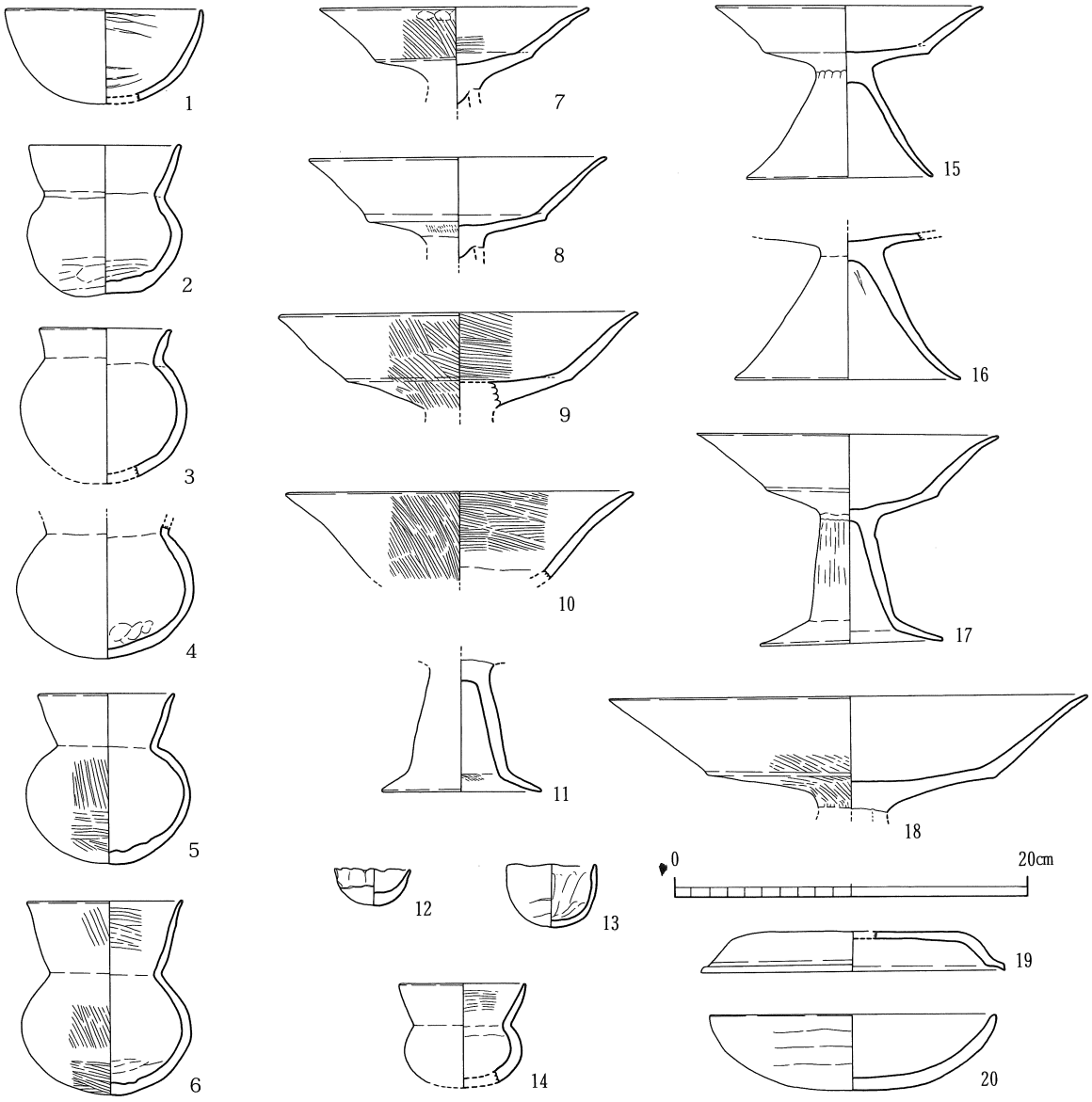
第16図　ＳＫ１出土遺物（S＝1／4）



第17図　ＳＨ１　実　測　図（Ｓ＝1／60）

出土遺物　第16図は土師器の壷である。現状では口縁部から肩部を欠損しており、胴部上位にはベルト状突帯をめぐらす。器壁の内外面には刷毛目が施されている。弥生時代後期以降に発達する在地型の複合口縁壷の形態で、古墳時代前期の布留式古段階に比定される。

ＳＨ１（第17図）　調査区ほぼ中央部で検出した住居跡である。住居跡は南北6.7m、東西7.4mを測る方形プランを呈する。床面積は49.6㎡で、当該時期の住居跡としては、かなり大型の部類に入る。北・西・南壁にいわゆるベッド状遺構を設け、壁溝が認められる部位もある。主柱穴は４本で、住居跡中央部には焼土と炭化物の分布が認められる。なお、炭化物の分布域の上部にミニチュア土器（第18図16）１個が伏せられた状態で出土しているが、これが意味のある行為かどうか不明である。出土遺物から、住居跡の時期は古墳時代中期の５世紀前半から中頃に比定される。また、住居跡埋土中から８世紀代の土器（同19・20）が出土しており、発掘調査中は判別できなかったものの、これらの出土地点付近に奈良時代の遺構（土坑やピットなど）が切り合っていた可能性が考えられる。

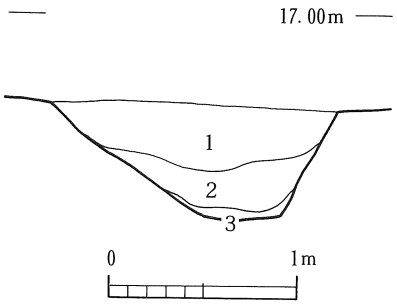


第18図　ＳＨ１　出土遺物（Ｓ＝1／4）

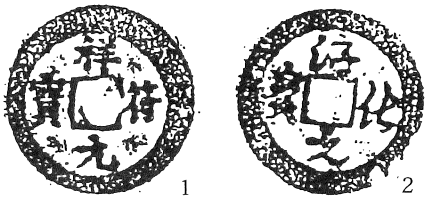
出土遺物（第18図）　1～18はＳＨ１の所属時期を示す一括出土遺物である。1は土師器鉢、2～6は丸底の小型壷、7～15は土師器高坏、16～18はミニチュア土器である。このうち、16は住居跡のほぼ中央部に分布する炭化物の直上に伏せられた状態で出土した。以上の一括出土遺物は個々の土器の形態や土器群の構成に高坏が多いこと、さらに須恵器の出土が認められないことから、古墳時代中期の5世紀前半から中頃に比定されよう。19は土師器蓋で、口縁端部はくちばし状を呈する。20は土師器埦で、器壁外面に手持ちのヘラ削りが認められる。19・20は8世紀代に比定される遺物で、上記の古墳時代中期の土器群と大きく時期を異にすることから、これらの遺物の出土地点付近に奈良時代の遺構が存在した可能性が考えられる。

ＳＤ２　調査区を縦断する形で検出された溝である。幅1.8m、長さ3.7m、深さ0.6mを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。また、調査区南西隅付近で、近世の溝ＳＤ１と切り合い関係を有する。埋土は３層に分層されるが、最下層の粘質土には細かい砂粒が認められる部分があり、流水の痕跡を示している。埋土中より、銅銭２枚と糸切りの底部を持つ土師質土器の細片が出土しており、詳細な時期の決定はできないが、中世の所産である。

出土遺物　埋土中より出土した銅銭２枚を図示している（第20図）。１は北宋銭の淳化元宝で、初鋳年代は990年。２も北宋銭の祥符元宝で、初鋳年代は1008年である。なお、糸切りの底部を持つ土師質土器小皿が出土しているが、細片のため図示できていない。



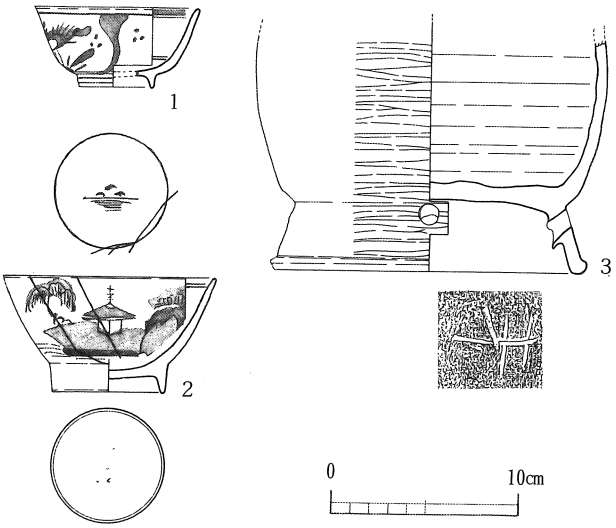
第19図　SD2土層断面図（Ｓ＝1/4）
1．茶褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．暗褐色粘質土（砂質土を含む）



第20図　SD2出土銅銭（実大）

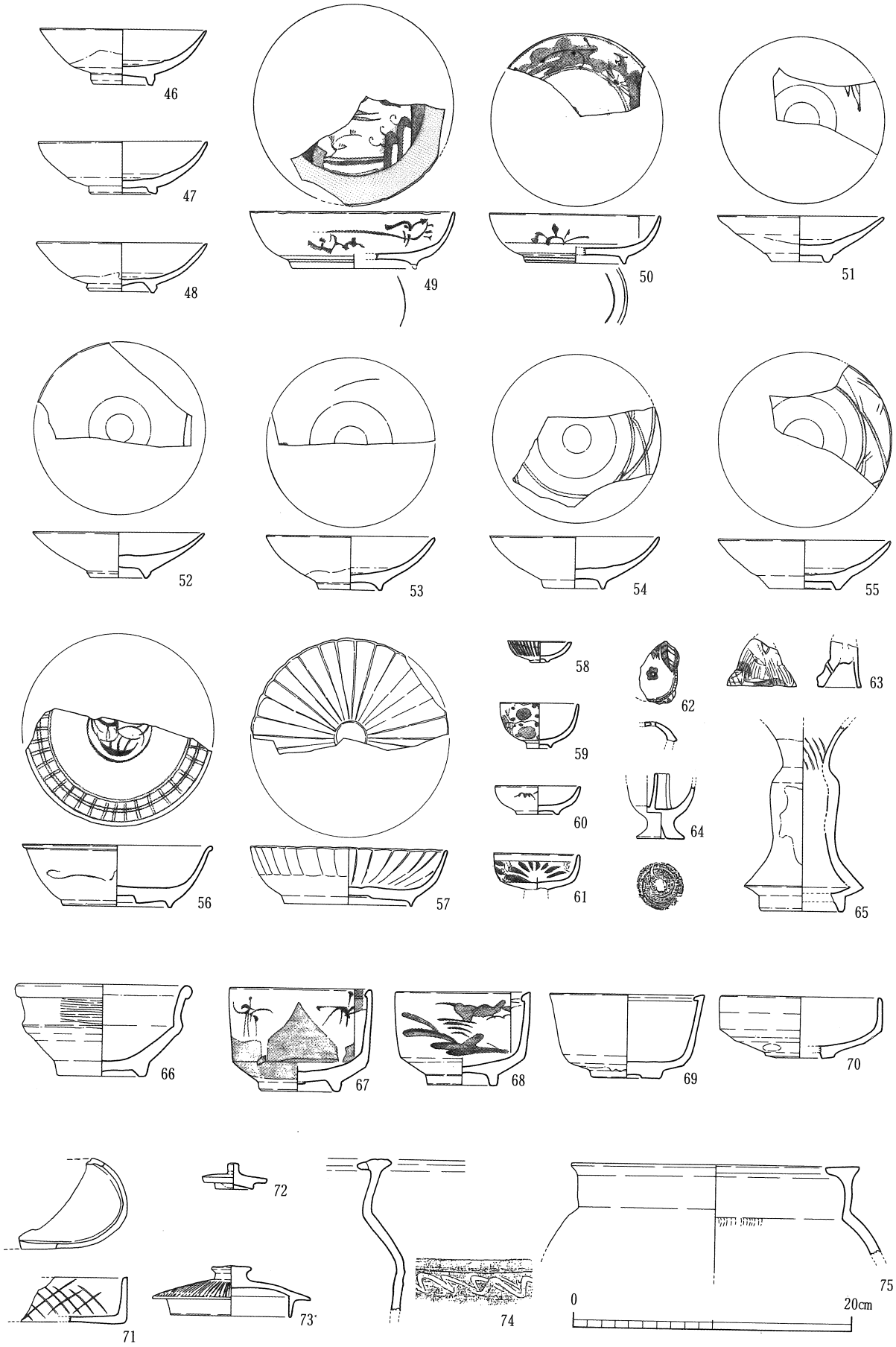
ＳＤ１　調査区を斜めに横断する形で検出された近世の溝である。幅2.5m、長さ2.5m、深さ0.6mを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。ＳＤ１が検出された地点は、発掘調査以前は小さな段差のある地形となっていた。溝の内部には杭が多数打たれており、水田経営に関わる水路であったことがわかる。溝埋土の最上層からは、小型の携帯用の硯や木製の下駄、瀬戸美濃産磁器碗や焼継のある肥前磁器広東碗および瓦質土器焜炉等が出土しており、幕末には埋没していたことを示している。下層から出土した遺物には17世紀後半から19世紀代のものが認められ、ＳＤ１の存続時期を示すものと考える。量的にまとまりのみられる最も古い遺物の一群には、17世紀後半代のものが認められ、ＳＤ１の最初の掘削時期を示す遺物である可能性が考えられる。なお、発掘時は湧水が著しく、完掘を断念した部分がある。

出土遺物（第21～27図）　第21図１～３は検出面下数cmで出土したもので、最上層出土遺物として取り上げたものである。ＳＤ１の埋没時期を示唆するものと考える。１は瀬戸美濃産磁器染付端反碗で、製作年代は1820～1860年代に比定される。２は肥前磁器染付広東碗で、焼継が認められる。内底部には朱描きの焼継文字が描かれた痕跡が認められるが、残念ながら判読できない。製作年代は1780～1820年代。３は在地産の瓦質土器焜炉で、19世紀前半から中頃の所産である。内底部にはヘラ描きの記号状の沈線が認められる。第11～13図は埋土中から出土した陶磁器・土器で、ＳＤ１の存続時期を示唆するものと考える。第22図４・５は京焼風陶器呉器手碗といわれる肥前産の陶器碗で、17世紀後半から18世紀前半に製作されたものである。６は肥前京焼風陶器碗で、18世紀前半に比定される。底部付近は露胎となり、内底部には刻印は認められない。７・８は肥前唐津系（現川系）陶器刷毛目碗で、17世紀末から18世紀前半の所産である。９～16は肥前陶胎染付碗で、17世紀末から18世紀前半に比定される。17・18は関西系陶器碗と思われ、前者は丸碗で内外面に透明釉を施す。後者はいわゆる腰折れの碗形態を呈



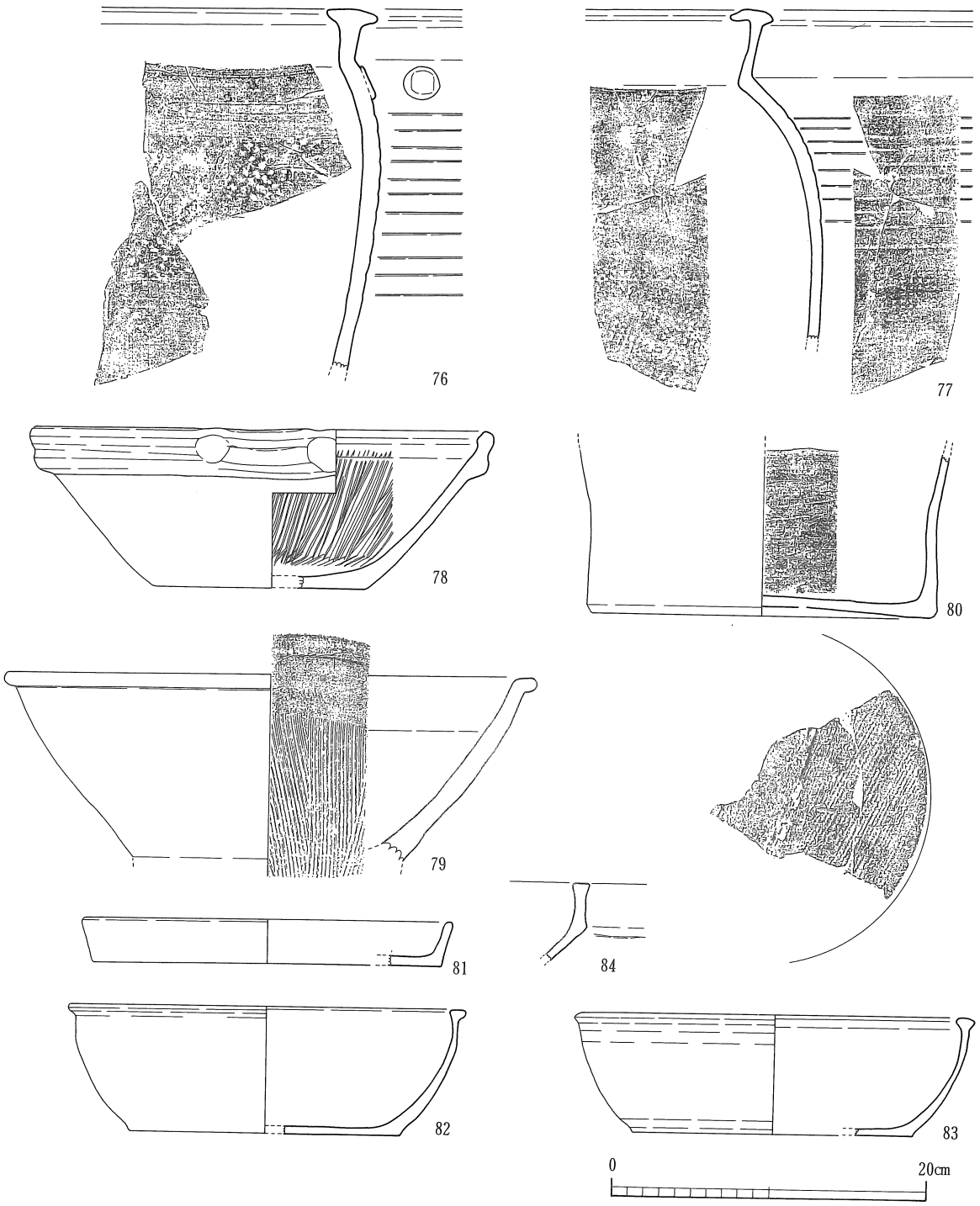
第 21図　ＳＤ１出土遺物 ①　（Ｓ＝1／4）

第22図　　ＳＤ１出土遺物 ②（Ｓ＝1／4）



第23図　ＳＤ１出土遺物③（Ｓ＝1／4）

し、文様は鉄絵（錆絵）で描かれている。いずれも、18世紀後半代に比定される。19は肥前磁器染付碗で、文様や呉須の発色の具合から、18世紀前半から中頃の所産であろう。20・21は肥前磁器染付碗で、外面に梅樹文を描き、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなる。18世紀後半に比定される。22～25は肥前磁器染付碗で、いわゆる「くらわんか茶碗」と俗称される外面に簡略化した梅樹文と雪輪文を描くタイプのものである。25の内底部には大明年製崩れ銘がみられる。いずれも18世紀後半の製品である。26は肥前磁器碗で、外面に鉄釉、内面に透明釉を施す。これも18世紀後半の所産である。27・28も肥前磁器染付碗で、27の外面には菊花弁の中に草花、28の外面には竹林と竹の子を掘ろうとしている人物が描かれている。両者とも、見込みには崩れた五弁花文が手描きによって描かれている。いずれも18世紀後半から末に比定される。29は肥前磁器染付筒形碗で、これも18世紀後半から末の製品である。当該資料は焼成がやや不良で、透明釉や呉須の発色がやや不良である。30～32は肥前磁器染付広東碗で、いずれも見込みに「壽」字から脱化した記号文を描く。1780～1820年代の製品である。33～36は肥前磁器染付端反碗で、1820～1860年代に比定される。33は見込みが蛇ノ目釉剥ぎとなり、34の外面文様は細線描きの手法が採用されている。また、36は同一規格同一文様の個体が、図示した以外に１個存在する。37～39は肥前磁器染付碗で、1820～1860年代に比定される製品である。なお、37は焼成がやや不良で、呉須などの発色がよくない。40・41は肥前産の磁器小杯である。前者は白磁で18世紀以降、後者は染付で19世紀以降の製品である。42は肥前磁器染付杯で、器壁が薄く作られている。見込みが蛇ノ目釉剥ぎとなり、内面文様と合わせて桜花を描いたものとなっている。19世紀前半から中頃に比定される。43は肥前磁器色絵小杯で、これも器壁が薄く作られ、内面文様は赤絵で描かれている。これも19世紀前半から中頃に比定される製品である。44・45は18世紀後半以降に製作された肥前磁器染付猪口で、45は蛇ノ目凹形高台となる。第23図46～48は肥前唐津系（内野山窯系）陶器銅緑釉皿で、底部付近は露胎となり、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなる。17世紀末から18世紀前半代の製品である。49は肥前青磁染付皿で、口縁部が輪花となる。内面の無文部に青磁釉が施されている。18世紀前半に比定される。50は肥前磁器染付皿で、18世紀代の製品である。見込みには五弁花文が描かれていると思われるが、残存部が少ないため、手描きかコンニャク印判によるものかは不明である。51～53も肥前磁器染付皿で、見込みが蛇ノ目釉剥ぎとなる粗製の製品である。17世紀末から18世紀代に比定される。54・55は見込みが蛇ノ目釉剥ぎとなり、内面に斜線文を描く肥前（波佐見系）磁器染付皿で、18世紀後半の製品である。56は肥前磁器染付皿で、底部は蛇ノ目凹形高台（低）となる。19世紀前半に比定される。57は肥前磁器白磁菊皿で、型押しで整形され、底部はやはり蛇ノ目凹形高台（低）となる。19世紀前半から中頃の製品である。58は型押し整形により菊花を型取った形態を呈する肥前磁器白磁紅皿で、18世紀後半以降に比定される。59・60は肥前磁器染付紅皿で、これらも18世紀後半以降の製品である。61は肥前磁器色絵仏飯器で、脚部以下を欠損する。文様は赤絵で描かれている。19世紀以降の所産である。62は肥前磁器染付水滴の破片で、18世紀以降の製品と思われる。63は産地不明の陶器製の人形で、頭部を欠損する。外面の一部に緑釉と褐色の釉を施した後に透明釉が施されており、体部には斜め方向に貫通する小孔が存在する。詳細な製作時期は不詳であるが、18世紀後半以降の製品であろう。64・65は18世紀以降に比定される関西系陶器の灯火具である。64の底部には、小孔とともに糸切り痕が認められる。65の底部の打ち欠きは意図的なものである可能性が考えられる。いずれも外面に鉄釉が施されている。66は18世紀代の所産である肥前唐津系陶器香炉である。67も肥前唐津系陶器香炉と思われ、文様は鉄釉で描かれている。これも18世紀代の製品であろう。68は肥前陶胎染付香炉で、18世紀前半に比定される。69・70は関西系陶器香炉で、18世紀後半以降の製品である。なお、69の内面には灰の付着の痕跡が認められ、70は胴側面の小型の脚部が剥落した痕跡が認められる。71は関西系陶器びん盥で、これも18世紀後半以降の所産である。胴部外面には鉄泥が塗られ、体部の格子目状の文様は赤絵で描かれている。72・73も18世紀後半以降に比定される関西系陶器蓋である。72は外面に鉄釉が施され、内面および底部は露胎となる。73は土瓶の蓋で、外面に透明釉が施され、外面文様は飛びガンナによる。74～第13図77は肥前唐津系陶器甕で、いずれも18世紀以降の所産である。74は胴部上位外面に波状文を施す。76・77は胴部内外面に格子目叩きを施し、胴部外面上位に平行沈線を施している。また、76は頸部と胴部の境付近に小円形の貼り付けが認められる。18は堺産陶器擂鉢（Ⅱ型式）で、18世紀後半以降の製品である。79は



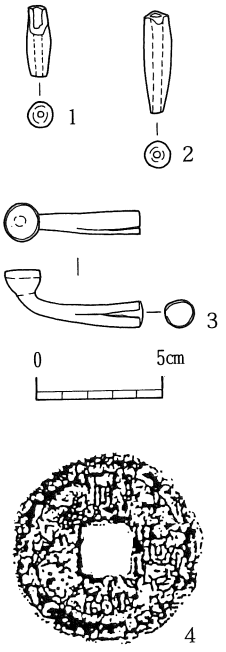
第24図　ＳＤ１出土遺物④（Ｓ＝1／4）

肥前唐津系陶器擂鉢で、これも18世紀後半以降に比定される。80～83は在地産の可能性が高い瓦質土器で、80は火消し壷、81は皿、82・83は鉢あるいは火鉢である。いずれも豊後府内地域周辺で、19世紀前半以降に多量に生産される器形を呈している。なお、80の底部には木目状の圧痕が認められる。84は土師質土器焙烙の口縁部で、口縁端部がやや肥厚し上面が平坦面をなす特徴は、19世紀前半以降の器形であることを示唆している。

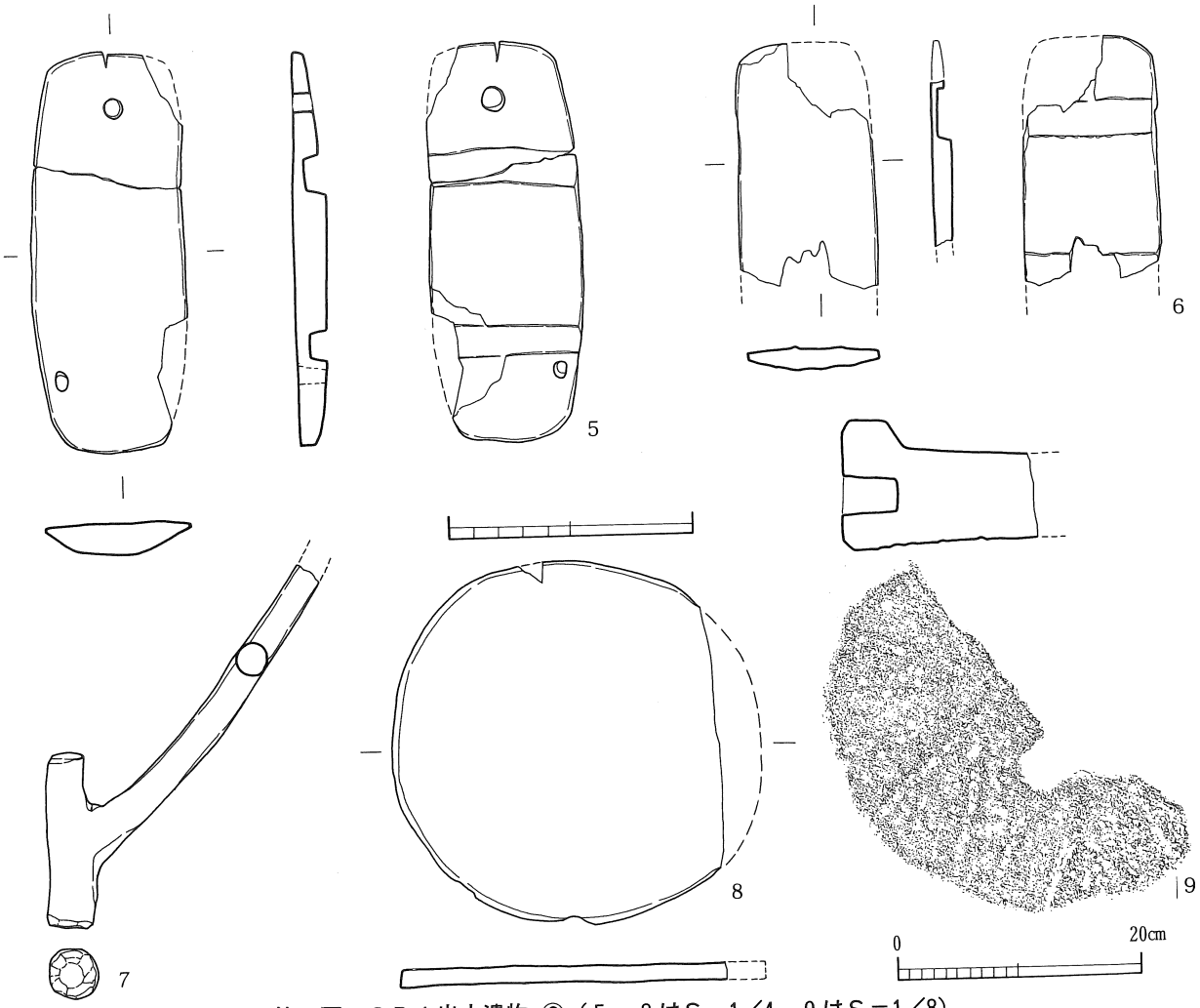
第25図１・２は土製の管状土垂である。３は青銅製の煙管で、基部に一部損傷が認められる。４は摩滅が著しいが、寛永通寶の鉄銭である。第15図５～８は木器である。５・６は下駄で、サイズが小さいことから小児用もしくは女性用のものと思われる。５・６の下駄はいずれも最上層からの出土遺物である。７は用途不明の加工品

である。8は曲物の底板である。9は石臼の上臼で、花崗岩質の石材を使用している。第16図10・11は硯で、前者は砂岩質頁岩、後者は粘板岩が使用されている。なお、11は小型の携帯用の硯と推定され、最上層からの出土遺物である。12～16は砥石で、砂岩質の岩石が使用されている。いずれも置砥石であるが、16・17は特に大型で16は断面が方形、17は断面が七角形を呈する。

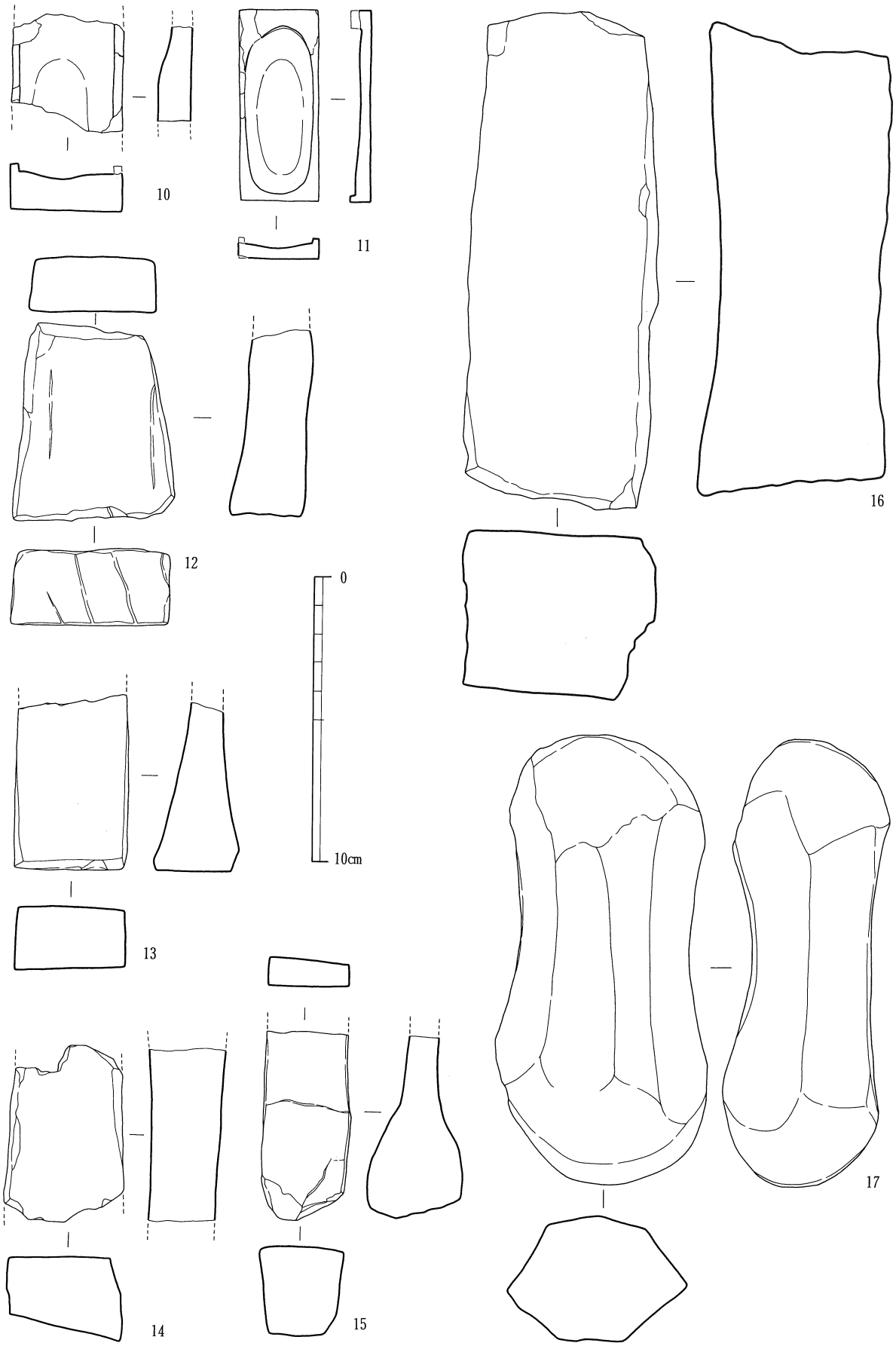
小結　1991年度の調査区では、古墳時代前期の土坑、中期の住居跡、中世の溝、近世の溝などが調査された。古墳時代前期の土坑ＳＫ１は壷形土器を用いた小児用の埋葬遺構で、七瀬川河川改修工事の調査区で検出された溝[1]と合わせて、周辺に当該時期の集落の存在を予測させる。古墳時代中期の住居跡ＳＨ１は、出土土器の構成に高坏が大きな割合を占めることや須恵器の出土がないことから、５世紀前半から中頃に比定される。当該住居跡は面積が49.6㎡とかなり大型であり、ベッド状遺構を設けるなど、古墳時代中期のものとしてはやや特異な感を受ける。この時期の住居跡は床面積が30㎡以下で、ベッドなどの施設のない４本柱のものが普通である。当該時期の住居跡はやはり河川改修工事の調査区で数棟が検出されている[2]が、いずれもこのような施設・規模を有するものはない。今後は周辺の古墳時代中期の集落全体の中で、当該住居跡の性格がどのようなものであるのかが問題となろう。近世の溝ＳＤ１は水田の潅漑用水路であると推定される。埋土中の遺物には17世紀後半代に比定できるものがあり、溝の掘が当該



第25図 SD1出土遺物(5)
(1、2はＳ＝1/4、4は実大)

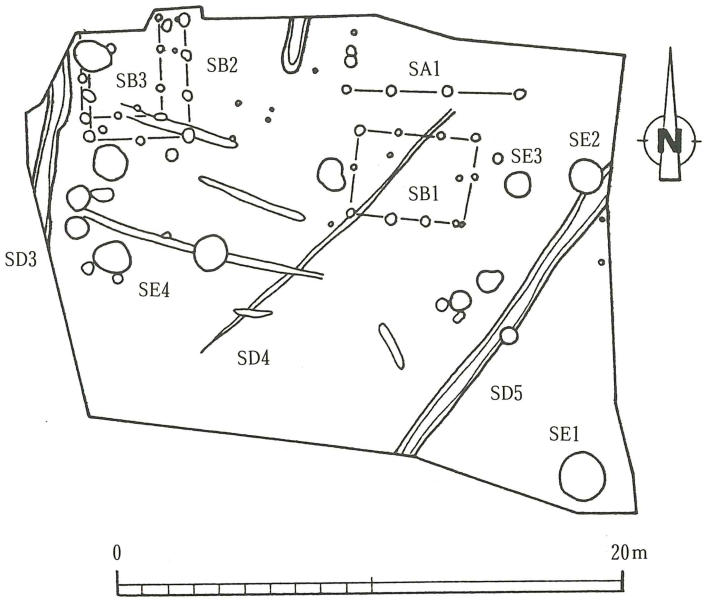


第26図　ＳＤ１出土遺物 ⑥（５～８はＳ＝1／4、９はＳ＝1／8）



第27図　ＳＤ１出土遺物 ⑦

時期に遡る可能性がある。また、最上層から出土した遺物には幕末前後に比定されるものが多く、江戸時代の末期には溝が埋没している。稙田市遺跡が所在する大分市稙田地区は、現在も多くの水田が広がる景観を呈している。これらの水田を潤す用水路には、地元で「古井路」と呼ばれる水路がある。伝承によると古井路は建久３年（1192）に掘削されたと伝えられるが、確実なところでは江戸時代の慶安５年（1652）に創設されたとされる。ＳＤ１は周辺の状況から判断すると、この「古井路」に取り付く支流の水路である可能性が高い。古井路の創建時期とＳＤ１の存続時期には若干の齟齬をきたすが、ＳＤ１が井路に取り付く支流の水路であることを考えると、上記の時期的な齟齬は矛盾をきたすものではないと考える。ＳＤ１が存在する地点は、発掘調査以前には小さな段差のある地形となっていた。このように、現在に残る微地形が古い時期の遺構のランド・マークとなっていることがあり、今後注意が必要であろう。



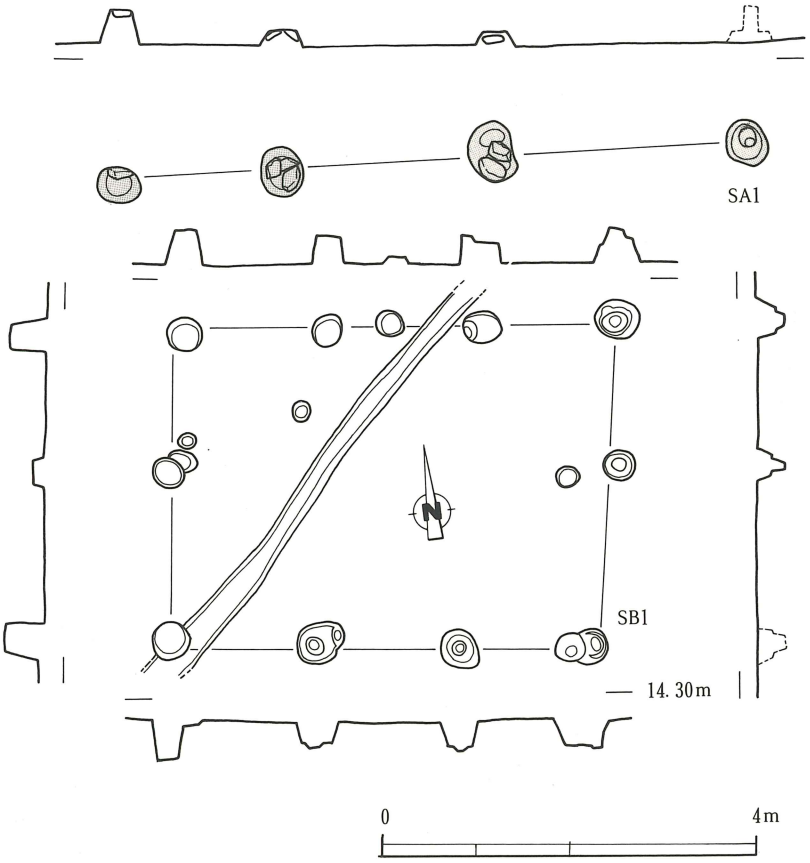
第28図　1992年度調査区（Ｓ＝1／300）

註(1)　大分県教育委員会『稙田市遺跡Ⅳ』（1991年）

(2)　同上『稙田市遺跡Ｖ』（1992年）

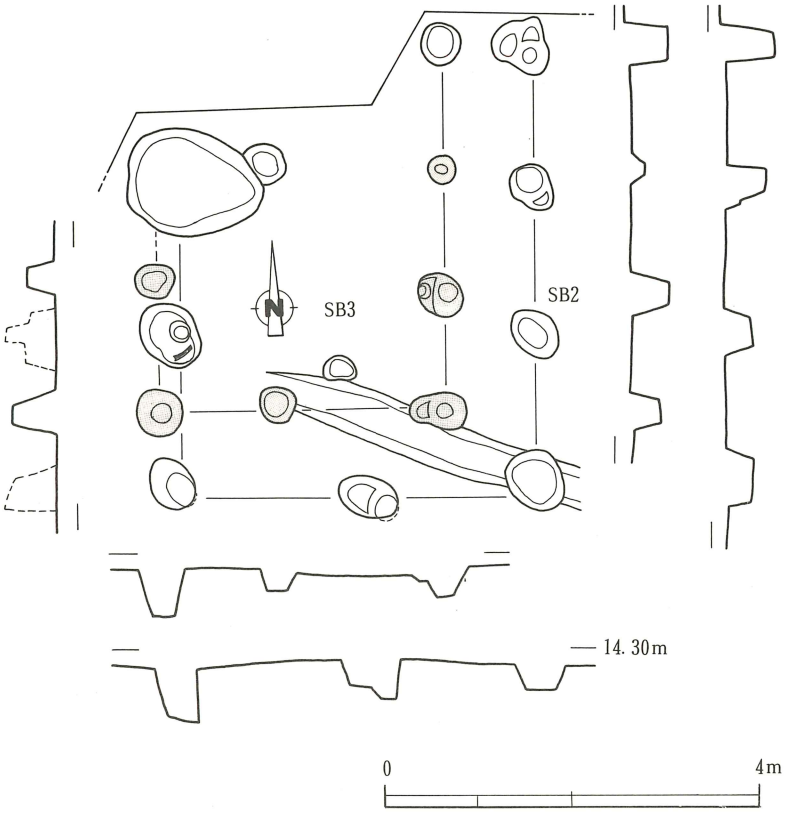
(2)　1992年度調査区（第28図）

概要　1992年度調査区は、国道210号線バイパス建設に伴う稙田市遺跡の調査区のほぼ中央に位置する。調査当初は、七瀬川河川改修工事に伴う調査区との関連から稙田市遺跡Ｐ区と呼称していた。調査面積は約500㎡である。掘立柱建物３棟（ＳＢ１～３）、柵列（ＳＡ１）、土坑、井戸５（ＳＥ１～５）、溝３条（ＳＤ３～５）ほかを検出している。掘立柱建物や溝のうち、一部が中世に遡る可能性があるが、他の遺構はすべて近世以降に比定される。なお、井戸はすべてが近世以降に比定されることや掘り下げ時に地盤の崩壊の危険性が考えられたため、完掘していない。



第29図　ＳＡ１・ＳＢ１実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＡ１・ＳＢ１～ＳＢ３（第29・30図）　ＳＡ１は柱穴４本からなる柵列で、全長6.8ｍを検出した。柱穴内部には、根締石と思われる礫数個を底面付近に配置しているものがある。ＳＢ１は東西３間、南北２間の掘立柱建物で、4.6ｍ×3.2ｍの規模をもつ。この建物は時期不明の溝ＳＤ４と切り合い関係（ＳＤ４→ＳＢ１）にある。ＳＢ２・ＳＢ３も切り合い関係にある掘立柱建物（ＳＢ３→ＳＢ２）で、調査区北西隅付近で検出され、延長部はさらに調査区外に伸びる。ＳＢ２は東西２間、南北３間以上で、3.8ｍ×4.7ｍ以上の規模をもつ。ＳＢ３も東西２間、南北３間以上で、3.0ｍ×3.9ｍ以上の規模を有する。ＳＡ１・ＳＢ１～ＳＢ３からは出土遺物が認められず、詳細な時期は不明であるが、周囲の状況からＳＢ３が中世に遡る可能性が考えられるほかは、すべて近世以降の遺構である。



第30図　ＳＢ２・ＳＢ３実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＤ３～ＳＤ５　1992年度調査区からは３条の溝が検出されている。それぞれの規模と時期は以下のとおりである。

ＳＤ３　　幅1.0ｍ・延長７ｍ・深さ0.3ｍ。埋土中の出土遺物より、遺構の時期は江戸時代後期。

ＳＤ４　　幅0.5ｍ・延長14ｍ・深さ0.2ｍ。埋土中の出土遺物より、遺構の時期は18世紀後半以降。

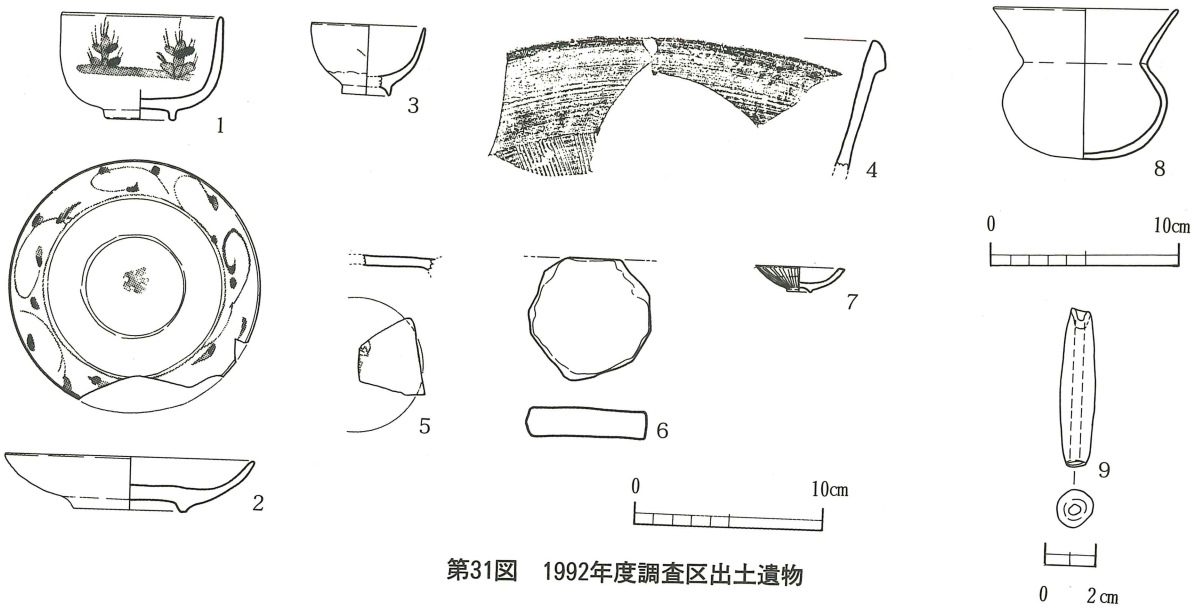
ＳＤ５　　幅0.5ｍ・延長14ｍ・深さ0.3ｍ。17世紀代に比定される井戸ＳＥに切られていることから、江戸時代前期あるいは中世にさかのぼる可能性がある。

ＳＥ１～ＳＥ５・ＳＫ１～ＳＫ８　1992年度調査区からは５基の井戸または井戸と推定される遺構が検出されている（ＳＥ１～ＳＥ５）。これらはすべて近世に構築されたもので、掘り下げ時に地盤の崩壊の危険性が考えられたため、完掘していない。また、土坑は８基検出されており（ＳＫ１～ＳＫ８）、ＳＫ８が明治時代前半代に下るほかは、時期不詳のものも含めて、近世に構築されたものである。

出土遺物（第31図）　1992年度調査区からの出土遺物のうち、図示可能なものを紹介する。第31図１はＳＤ４出土の肥前磁器染付碗である。外面に松樹文を描く。18世紀後半代に比定される。２もＳＤ４出土の肥前磁器染付皿である。内面の五弁花文はコンニャク印判によるもので、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなる。18世紀後半代の製品。３・４はＳＫ１とＳＥ１から出土した破片が、それぞれ接合している。３は肥前磁器染付碗で、外底部付近が露胎となる。外面に一部染付文様が認められるが、欠損のため文様の全体像は不明である。18世紀後半代に比定される。４は肥前陶器擂鉢で、18世紀後半以降の製品である。５はＳＥ１出土の肥前磁器染付皿の底部破片である。内定部に朱描きの焼継文字を有するが、欠損のため、判読できない。染付による銘款も欠損が大きいが、一重方形枠を有する渦福である可能性が高い。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。18世紀後半以降に比定される。

遺構名	調査時の遺構名称	時期を判別できる出土遺物（小破片を含む）	遺構の時期
ＳＡ1	Ｐ区柱穴列	－	近世
ＳＢ１	Ｐ区１号掘立	－	近世
ＳＢ２	Ｐ区２号掘立	－	近世
ＳＢ３	Ｐ区３号掘立	－	中世？～近世
ＳＤ３	Ｐ区溝４	関西系陶器？	18Ｃ後半以降
ＳＤ４	Ｐ区溝３	肥前磁器染付碗・皿（第31図１・２） 肥前磁器蛇ノ目釉剥碗（18Ｃ後半）	18Ｃ後半
ＳＤ５	Ｐ区溝１	－	中世？
ＳＥ１	Ｐ区井戸１	肥前磁器染付碗（第31図３）・肥前磁器擂鉢（同４） 肥前京焼風陶器呉器手碗（17Ｃ後半） 二彩手唐津陶器鉢（17Ｃ末～18Ｃ前半） 肥前磁器二重網目文染付碗（18Ｃ後半） 肥前磁器染付端反碗（1820～1860年代）	19Ｃ前半～中頃
ＳＥ２	Ｐ区井戸２	関西系陶器底部（18Ｃ後半以降） 唐津系陶器皿口縁（17Ｃ前半）	17Ｃ代
ＳＥ３	Ｐ区井戸３	肥前京焼風陶器呉器手碗（17Ｃ後半） 肥前京焼風陶器呉器手碗（17Ｃ後半）	17Ｃ後半代に遡る可能性あり。 不明
ＳＥ４	Ｐ区井戸４	－	不明
ＳＥ５	Ｐ区井戸５	－	
ＳＫ１	Ｐ区土坑１	肥前磁器鉄釉灰釉掛け分け碗（1630～1650年代） 肥前磁器染付碗（第31図３）・肥前陶器擂鉢（同４） 二彩手唐津陶器鉢（17Ｃ末～18Ｃ前半）	19Ｃ前半～中頃
ＳＫ２	Ｐ区土坑２	－	不明
ＳＫ３	Ｐ区土坑３	－	不明
ＳＫ４	Ｐ区土坑４	－	不明
ＳＫ５	Ｐ区土坑５	瓦加工品（第31図６）・肥前白磁紅皿（同７） 二彩手唐津陶器鉢（17Ｃ末～18Ｃ前半） 瀬戸美濃陶器紅皿（19Ｃ前半）	19Ｃ前半以降
ＳＫ６	Ｐ区土坑６	－	不明
ＳＫ７	Ｐ区土坑７	－	不明
ＳＫ８	Ｐ区土坑内８	クロム青磁碗（明治前半）	明治前半

第３表　1992年度調査区遺構一覧



第31図　1992年度調査区出土遺物

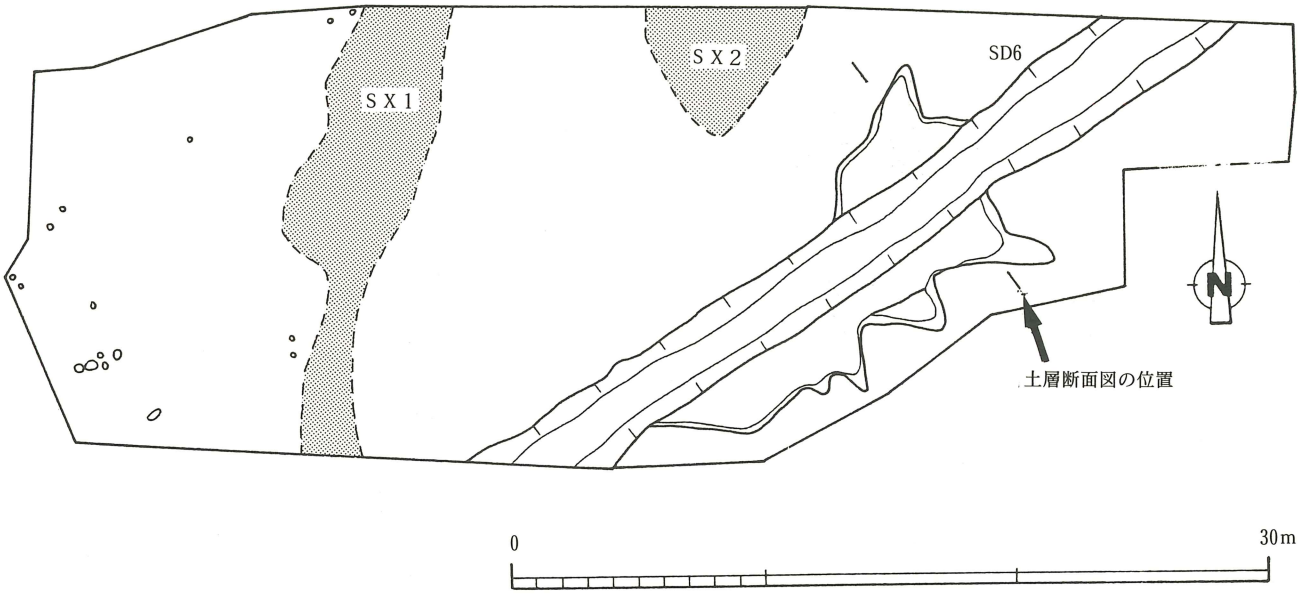
6・7はＳＫ５の出土品である。6は瓦片の再加工品で、平瓦の破片を円盤状に再加工している。製品の端部には側面の一部が残存している。詳細な年代は確定できないが、江戸時代後期のものであろう。7は肥前磁器白磁紅皿で、18世紀後半以降の製品である。8は調査区排土中から出土した土師器小型丸底壷である。4世紀代に比定できよう。9も排土中から出土した土錘で、詳細な年代は確定できないが、江戸時代後期のものである可能性が高い。

小結　1992年度調査区から検出された遺構の大半は、江戸時代後期に比定されるものである。掘立柱建物・柵列・井戸・土坑などで構成される遺構群は、近世農民の居住地の一部である可能性が高い。周辺からは水田耕作に使用されたと推定される用水路（1991年度調査区のＳＤ１や七瀬川河川改修の調査区でも多数の溝が検出されている）が検出されており、これらの遺構と一体となって、近世後期の農村の集落景観を形成していたものと推定される。また、本調査区からは近世以前の明確な遺構は検出されていないが、排土中から土師器小型丸底壷などが出土しており、他の地区と同様に、本来は古墳時代に比定される何らかの遺構が存在していた可能性が高いと考えられる。

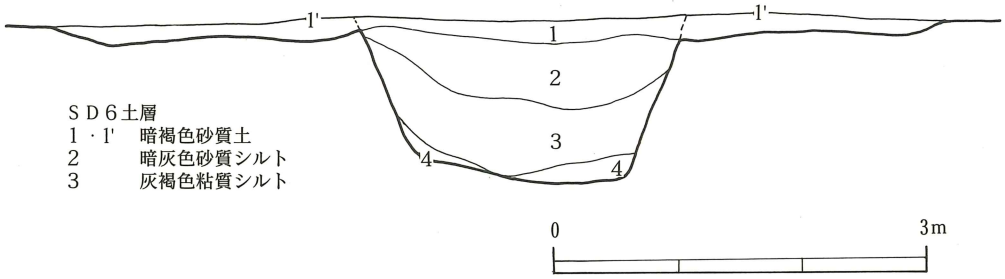
(3)　1990年度調査区（第32図）

概要　1990年度調査区は、国道210号線バイパス建設に伴う稙田市遺跡の調査区の東側に位置する。発掘調査当初は、七瀬川河川改修工事に伴う調査区との関連から稙田市遺跡Ｏ区と呼称していた。調査面積は約1,600㎡である。11～12世紀代に比定される溝１（ＳＤ１）と弥生時代終末から古墳時代前期の遺物包含層（ＳＸ１・ＳＸ２）が検出されている。

ＳＤ６（第33図）　調査区東側を斜めに縦断する形で検出された溝である。幅2.4ｍ、長さ30ｍ、深さ1.2ｍを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。埋土は４層に分層され、最下層の粘質土には細かい砂粒が認められる部分があり、流水の痕跡を示している。埋土中からの出土遺物の大半は古墳時代の土器の小片であるが、これらはすべて周辺からの流れ込みであり、遺構の時期を示唆するものではない。埋土中からの出土遺物には、糸切り痕の認められる土師器や中国産の白磁片が少量認められ、これらがＳＤ１と関係する遺物である可能性が高い。遺構の時期を示唆する遺物が少量であるため、詳細な年代を確定できないが、ＳＤ１の時期は11～12世紀代に比定される可能性が高い。

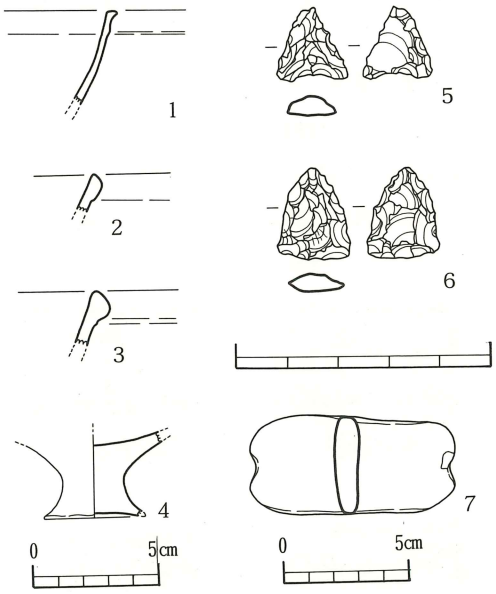


第32図　1990年度調査区（Ｓ＝1／300）

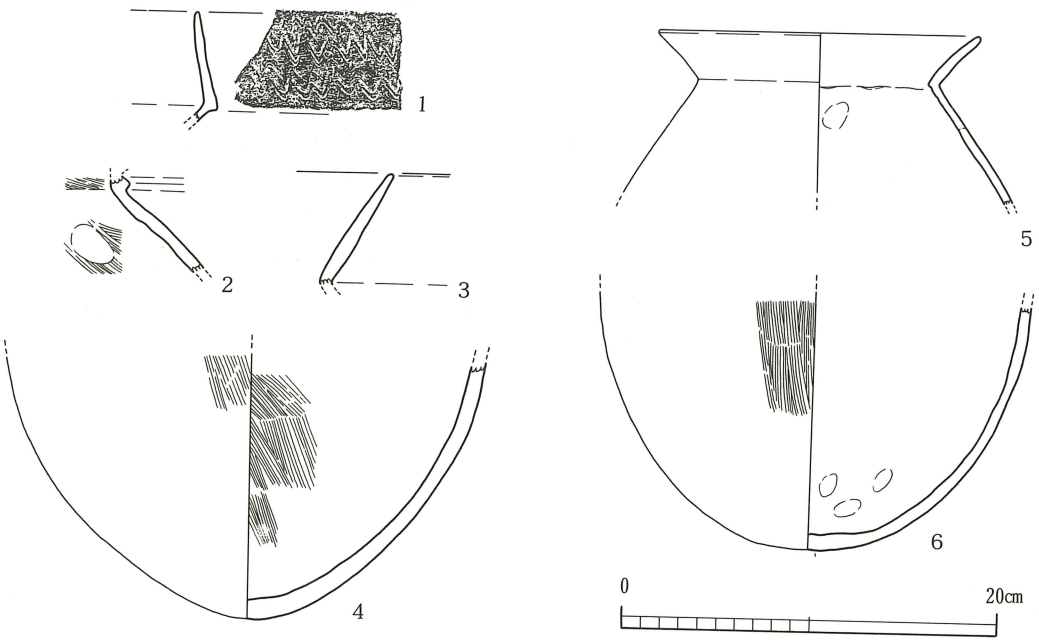


第33図　ＳＤ６土層断面図（Ｓ＝1／60）

出土遺物（第34図）　第34図に示したものは、すべてＳＤ１の埋土中からの出土遺物である。１～３は中国産白磁の口縁部片である。１は口縁部を外反させ、端部を水平にする形態、２・３は小型の玉縁口縁を呈する。４は土師器で、小破片のため、器形や傾きなどについて、さらに検討が必要であるが、台付皿に復元される可能性が高いと考えるものである。磨滅により、非常に不鮮明であるが、底部にはわずかに糸切りの痕跡が認められる。以上、１～４がＳＤ１の時期を示唆する遺物と推定される。５・６は石鏃で、５は姫島産黒耀石、６はサヌカイトを素材としている。７は石錘で、砂岩質頁岩が使用されている。



第34図　ＳＤ６出土遺物

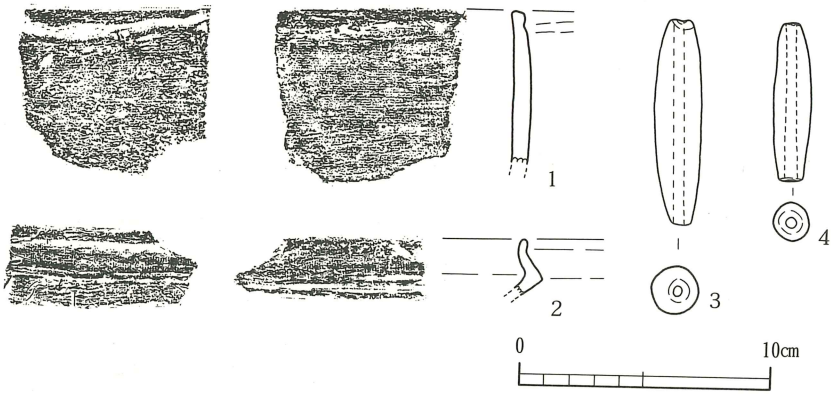


第35図　ＳＸ１・ＳＸ２出土遺物（Ｓ＝1／4）

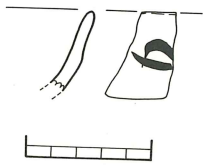
ＳＸ１・ＳＸ２　調査区内に弥生時代後期末から古墳時代前期の土器を包含する茶褐色の遺物包含層が存在する。便宜上、西側の包含層をＳＸ１、東側の包含層をＳＸ２と呼称することにする。土器の遺存状況は比較的良好であり、ややまとまった出土状態を呈するものもあったが、周辺に土坑や住居跡などの遺構が存在した形跡は認められなかった。

出土遺物（第35図）　１～４はＳＸ１の出土遺物である。１は在地系の複合口縁壷の破片で、発達した複合口縁の外面に脱化した櫛描き波状文を施している。２は複合口縁壷の頸部破片で、３は単口縁壷の口縁部破片である。４は壷の胴部下半から底部にかけての破片である。１～４は、いずれも弥生時代後期末から古墳時代前期の所産である。５・６はＳＸ２の出土遺物で、同一個体の甕である可能性が高い。底部内面付近に指頭痕が認められる。古墳時代前期の布留式併行期に比定される。

その他の遺物（第36・37図）　1990年度調査区内において、遺構検出中に出土した、その他の出土遺物を紹介する。第36図１は縄文時代晩期の深鉢、２は浅鉢の口縁部破片である。いずれも、その器形の特徴から、刻見目突帯文土器単純期である下黒野式の時期に比定されよう。３・４は土錘で、詳細な時期の比定は不可能である。５は土師器椀の口縁部と思われる。外面には墨書による文字の一部が認められるが、欠損のため、判読できない。小破片のため、時期の決定が困難であるが、中世に比定できるものであろうか。



第36図　その他の遺物①



第37図　その他の遺物②

小結　本調査区の中で、最も注目すべき遺構はＳＤ１である。調査区の制限により、ＳＤ１の調査区外への展開は不明であるが、本調査区の南側約70ｍに位置する七瀬川河川改修調査区では当該遺構に対応する溝は検出されていない。ＳＤ１の時期については、少量の出土遺物から判断すると、龍泉系青磁が盛行する以前で、中国産白磁のみが主体的に存在する11～12世紀代に比定しておくのが穏当なところと考えられる。稙田市遺跡において発掘調査の行われた国道210号線バイパス調査区および七瀬川河川改修調査区では、当該時期に比定される遺構はＳＤ１が唯一のものである。ただ、本遺構と同様の時期や規模に匹敵する溝が、本調査区の西側約450ｍに位置するガランジ遺跡（本書収録）でも２条検出されており、注目される。稙田市遺跡やガランジ遺跡は、中世には「稙田荘」と呼ばれる荘園に含まれていたとみられる。「稙田荘」の初見は保元２年（1157)、保元の乱で戦死した藤原頼長の没官領中にみられ（『兵範記』)、このころすでに摂関家領となっていたと思われる。稙田荘の詳細な成立年代や成立事情は不明ではあるが、本報告のＳＤ１やガランジ遺跡の溝が稙田荘の成立やその整備に関わる遺構であるとすれば大変興味深い。

また、包含層や遺構外からは弥生時代後期末から古墳時代前期や縄文時代晩期末の土器が出土した。これらは断片的な資料ではあるが、本調査区周辺で検出された遺構・遺物と同時期のものであり、各時期の生活面の広がりを把握する上で重要な資料となった。

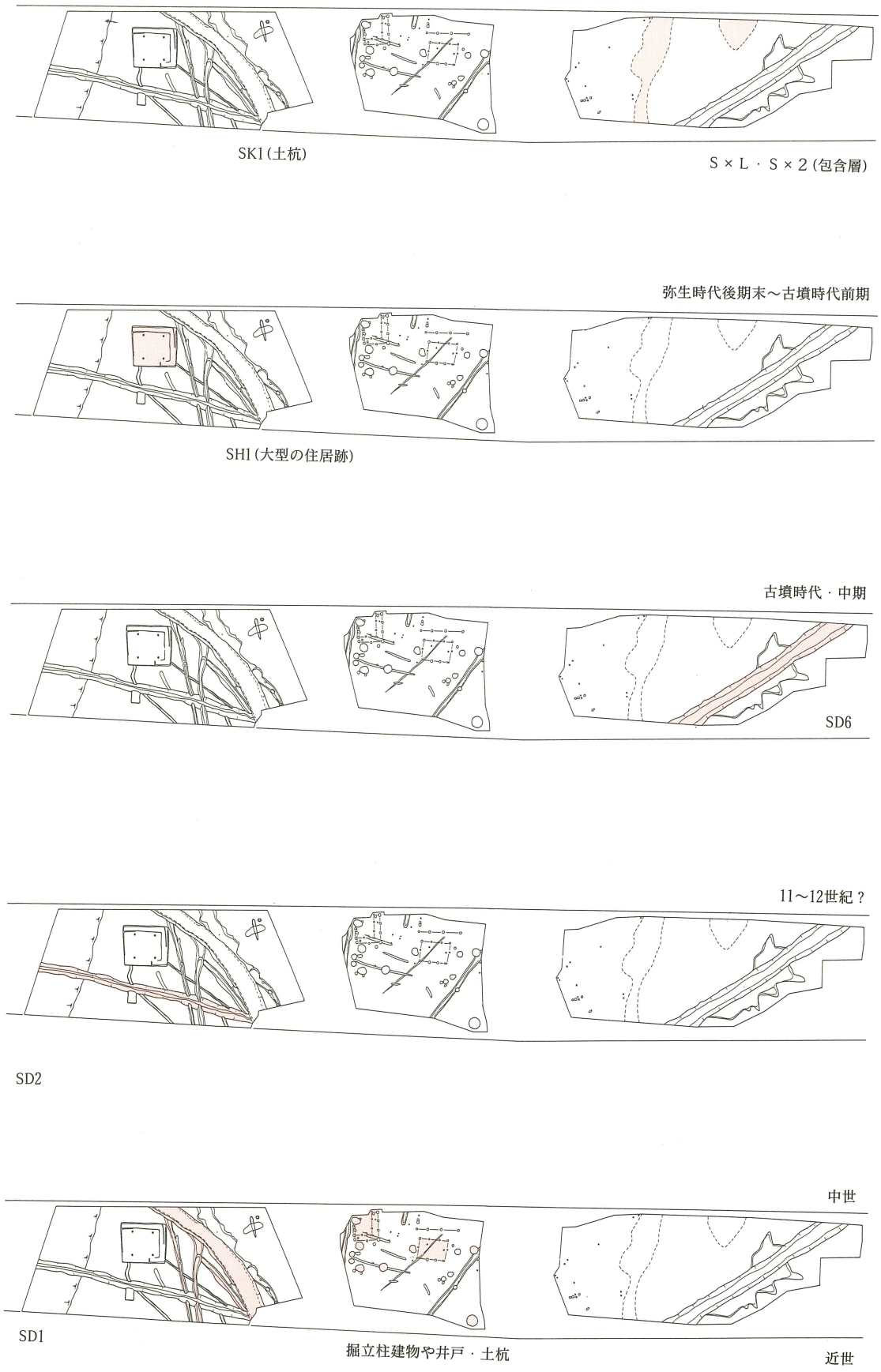
３．まとめ

本書では、国道210号線バイパス建設に伴う稙田市遺跡の調査概要を報告した。稙田市遺跡の全体像はなお不明な部分が多いが、国道バイパスの調査と並行あるいは先行して、七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査も行われており、現時点では両調査区の調査成果を合わせて検討するのが理想的である。従って、以下では国道210号線バイパスと七瀬川河川改修工事の調査区で検出された遺構を時期別に紹介して、まとめに代えたい。（第38～42図参照)。

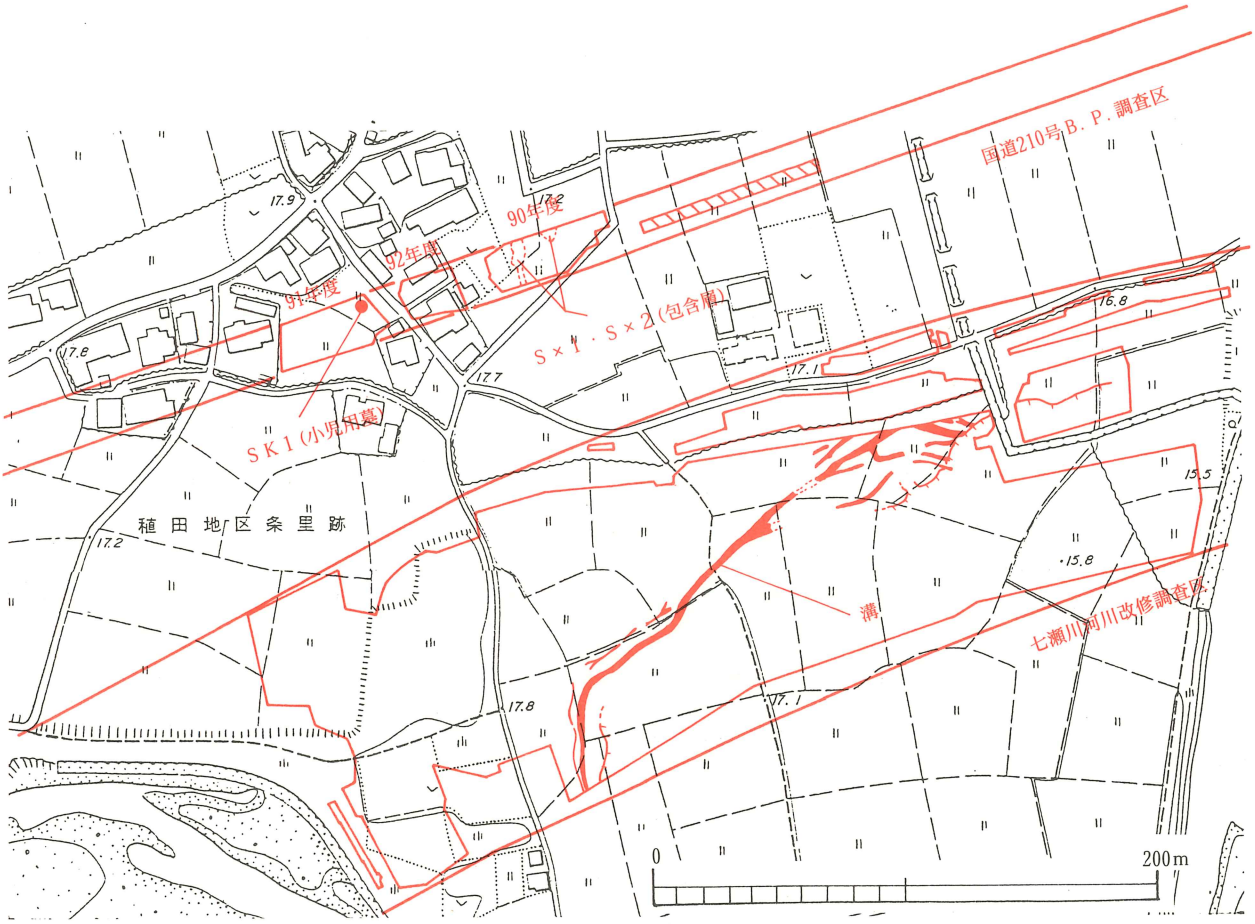
縄文時代晩期末　研究者によっては「弥生時代早期」と呼称されることもある時期で、考古遺物としては刻目突帯文土器を指標とする。稙田市遺跡周辺には当該時期の遺物包含層が分布しており、特に河川改修調査区では埋甕や多量の土器などが検出されている。国道バイパス調査区では1990年度調査区で少量の土器類が採取されているにすぎない。（第36図１・２)。未だ確証を得ていないとはいえ、稙田市遺跡の立地とこのような遺物の分布状況は、当該時期に水稲稲作の開始を示唆している可能背が考えられる。今後の調査でさらに検討が進められることが期待される。

弥生時代後期末～古墳時代前期（第38図１・第39図）　弥生時代後期末～古墳時代前期になると、河川改修調査区に灌漑用と推定される比較的大規模な溝が掘削される。この溝は弥生時代後期末に掘削が開始され、古墳時代前期に再び掘り直されている。この溝の周囲には、明確な遺構としては確認できていないものの、水田が営まれていたと推定される。国道バイパス調査区では、1991年度調査区で小児用の埋葬遺構と推定される土坑、および1990年度調査区で当該時期の包含層が検出されている。従って、河川改修調査区は当該時期の生産面、国道バイパス調査区は当該時期の集落域の一部であった。ただし、国道バイパス調査区では竪穴住居跡が検出されてなく、この地点は集落の周辺部であった可能性が高い。

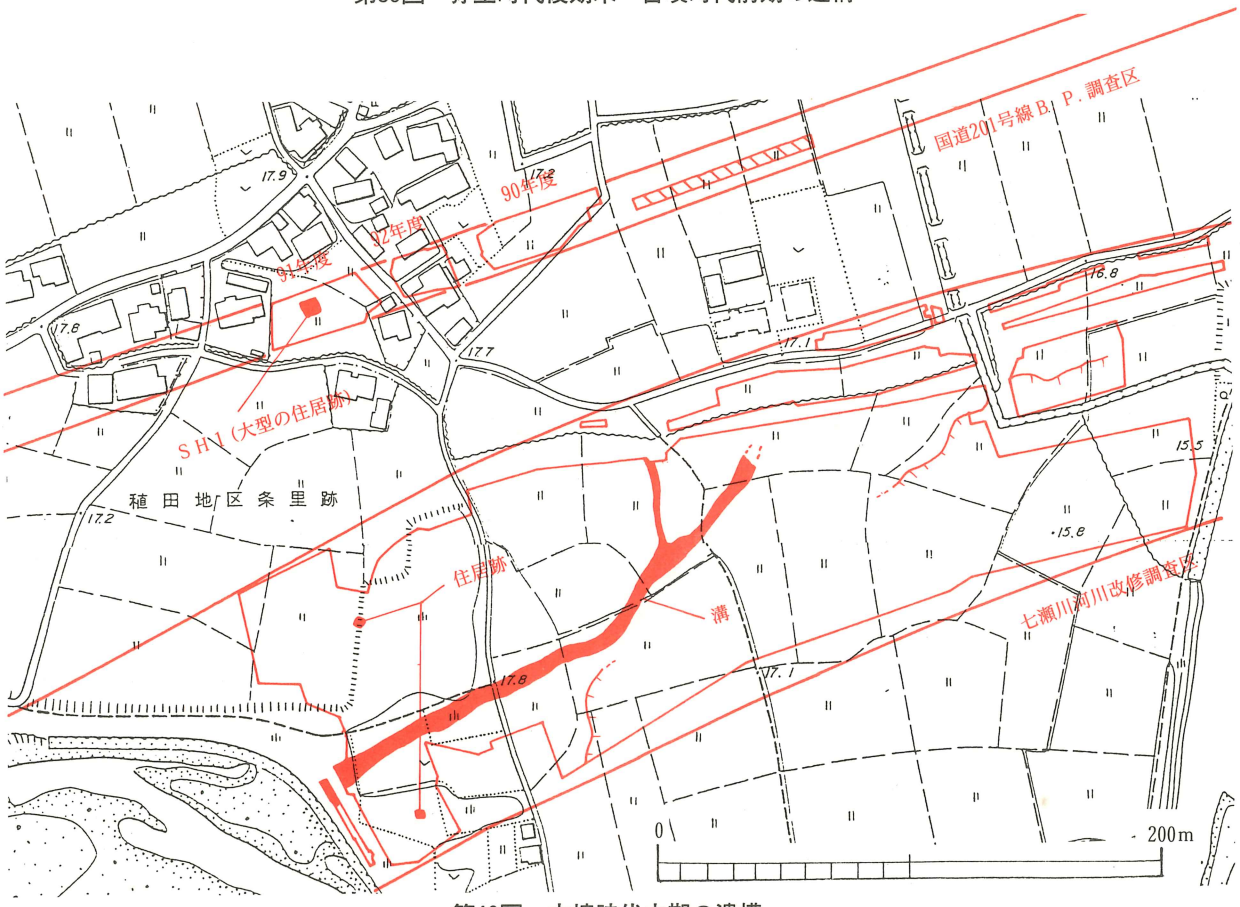
古墳時代中期（第38図２・第40図）　この時期には、河川改修調査区で古墳時代前期とほぼ同じ位置に新しいな溝が掘削され、溝の南西側には数基の竪穴住居跡が営まれる。国道バイパス調査区ではベット状遺構を有する大型の住居跡が検出されている。この住居跡は河川改修調査区内の住居跡よりはるかに大型であり、しかもその周辺には他に住居跡が営まれている様子はなく、当該遺構だけが孤立して造営されている印象を受ける。住居跡から出土した土器は土師器高坏が主体を占め、須恵器が検出されていないことから、その実年代は５世紀中頃前



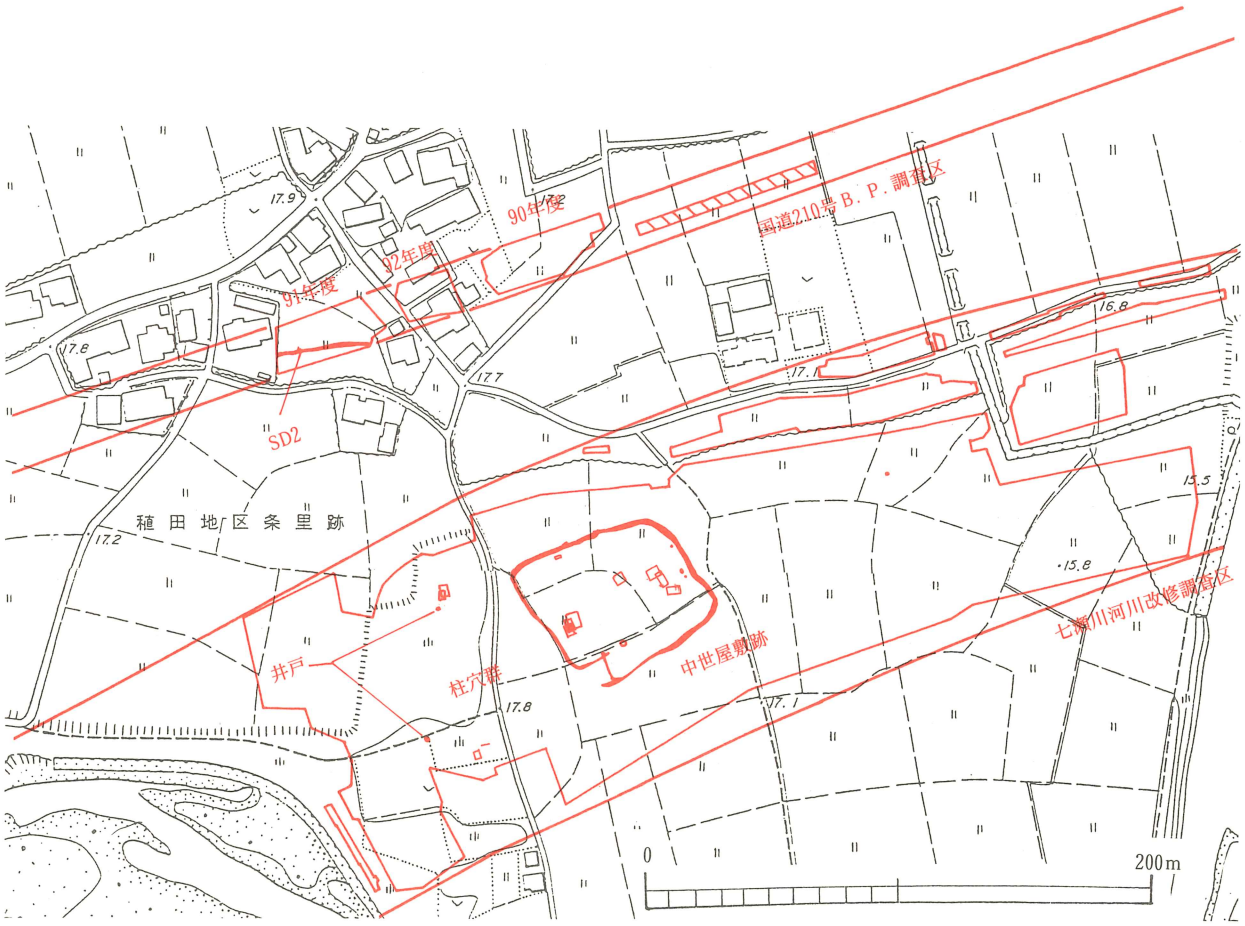
第38図　国道210号線バイパス建設に伴う植田市遺跡の時期別遺構（S＝1／1000）



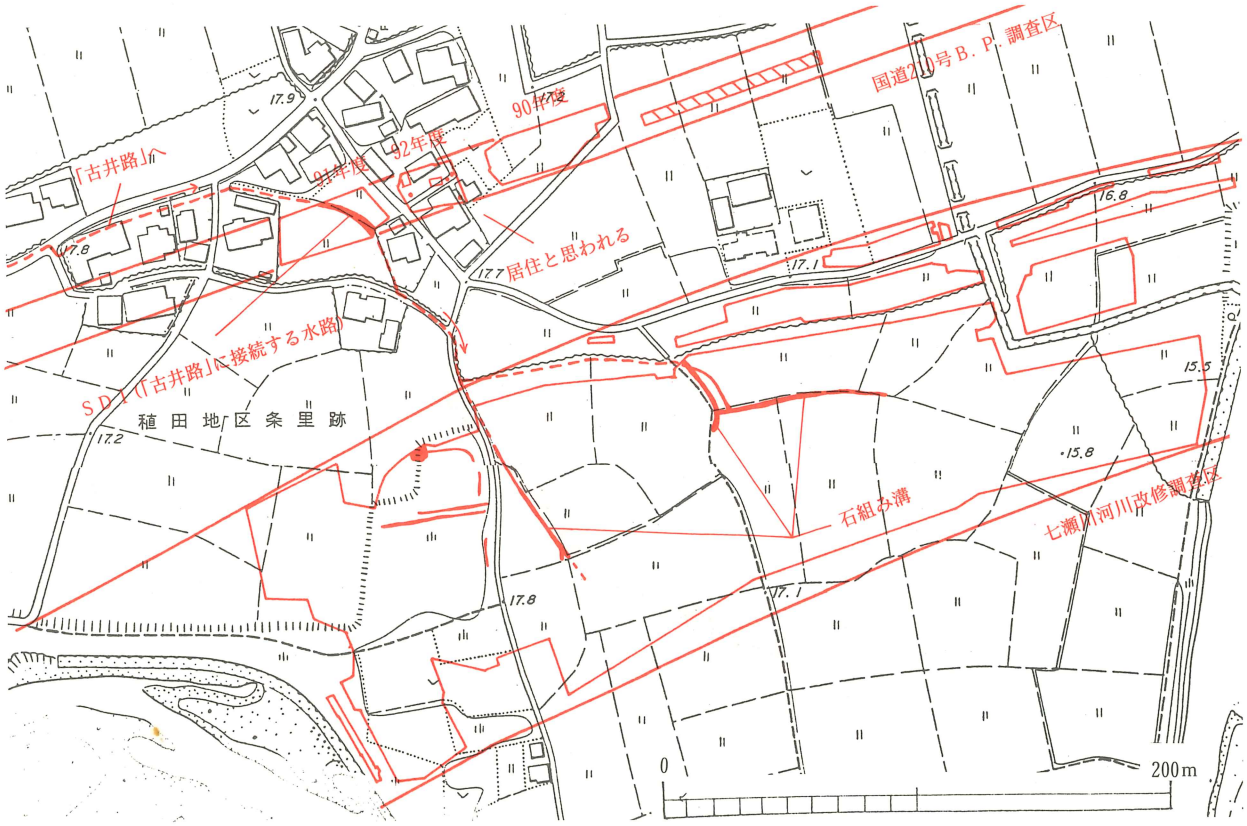
第39図　弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構



第40図　古墳時代中期の遺構



第41図　中世の遺構



第42図　近世の遺構

後と推定される。この状況は５世紀中頃前後の稙田市遺跡の集落の中で、国道バイパス調査区で検出された住居跡（SH１）が集落跡の中でも主体的な位置を占めるものであることが推定される。ただ、このような状況も５世紀末前後になると、河川改修調査区でカマドを有する住居跡が多数造営されるようになり、集落の主体は河川改修調査区の方に移動したと思われる。

11～12世紀（第38図）　国道バイパス調査区で１条の溝（SD２）ほかが検出されている。この溝は河川改修調査区で検出された溝で囲まれる屋敷を中心とする中世後半期の集落とほぼ同時期に比定される。いずれにしても、当該時期の中心部は河川改修調査区の方にあったと推定される。

中世（第38図４・第34図）　国道バイパス調査区で溝１条（ＳＤ２）ほかが検出されている。この溝は河川改修調査区で検出された溝で囲まれる屋敷を中心とする中世半期の集落とほぼ同時期に比定される。いずれにしても区当該時期の中心部は河川改修調査区の方にあったと推定される。

近世（第38図５・第42図）　国道バイパス1991年度調査区で検出された溝SDI1は、慶安５年（1652）に改修されたとされる「古井路」に接続する灌漑用の水路である。河川改修調査区では、さらにこのSD１に接続すると推定される水路も検出されている。また、国道バイパス1992年度調査区では近世の集落（農村）と思われる掘立柱建物や溝・土坑、井戸などが検出されている。特に井戸は５基が検出されており、当該調査地点周辺が近世の集落の主体であったことが推定されよう。

第６章　植田条里遺跡の調査

１．調査概要

１）調査区の設定

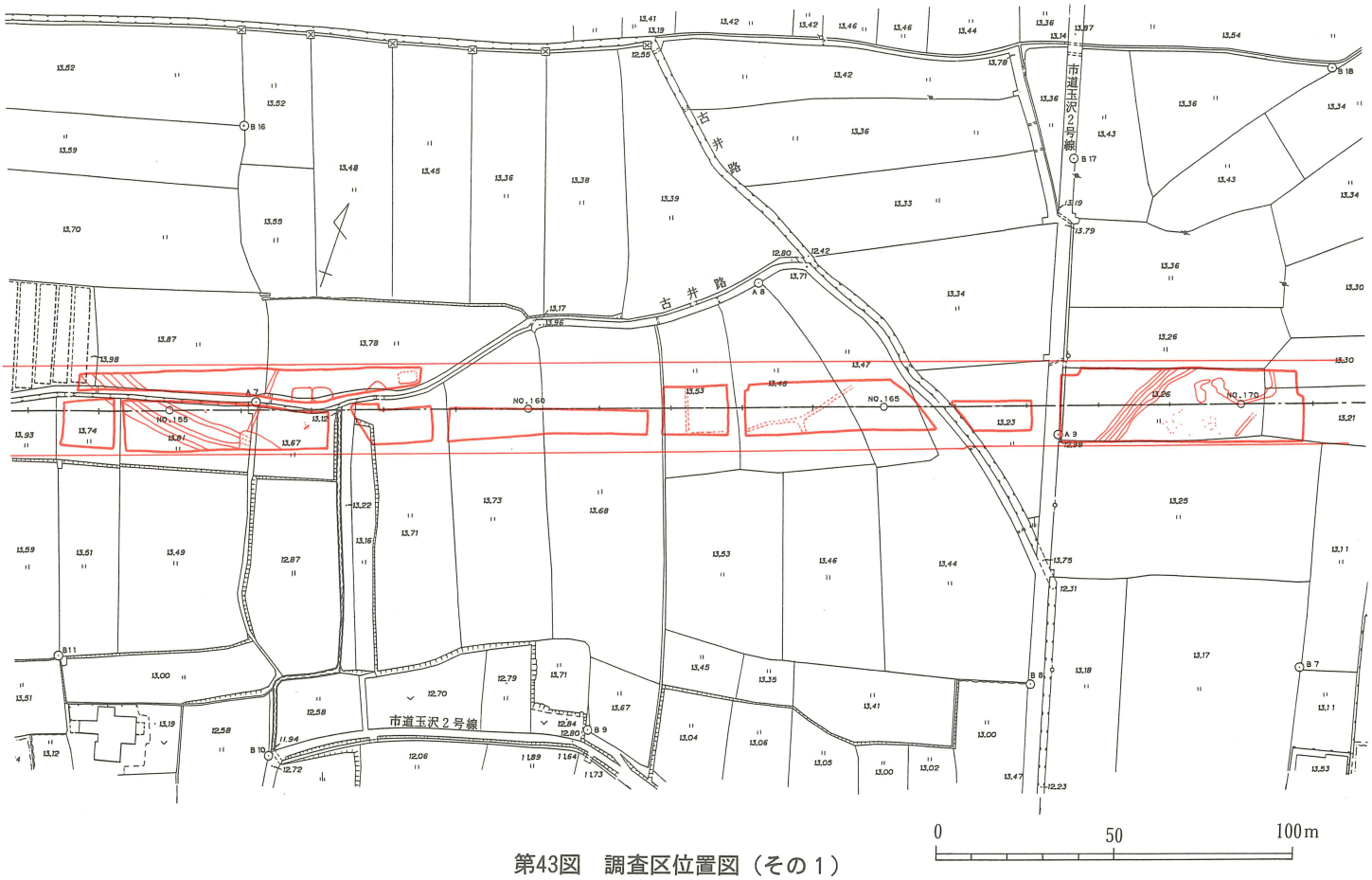
植田条里遺跡と呼称されるのは、広大な面積を占める。その中を国道210号バイパスが横断する形になり、長さが２㌔にも及ぶ。そこで、現在の水田区画などをもとにして第43、44図のようにＡからＨの８地区に分け、順次調査を行うことにした。

２）調査の概要

植田条里遺跡と呼ばれるものは、当然ながら地表面で確認できる「条里」痕跡の広がる地域を指している。今回の調査は、当初から「条里」を念頭に置いたものでなかったため、意識的な調査ができなかった憾みはあるが、平野部に細長いトレンチを設定したことにより、平野部全体のおおよその遺跡の状況がつかめるようになった。

調査はまず遺構の確認のために試掘調査からおこなった。基本的には重機による表土剥ぎで、住居跡などの遺構確認を行った。さらに、水田の存在が考えられる地区についてはさらに掘り下げを行い、水田面の確認を行った。

試掘調査の結果、Ｂ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｈの５地区において遺構、遺物が確認された。以下、遺構と遺物に分けて調査結果を記述する。



第43図　調査区位置図（その１）

2．遺構と遺物

B区

溝が３条確認されたのみで、他の遺構は検出されなかった。また、他地区で検出した古墳時代の水田層の確認はできなかった。しかし、土層観察によると少なくとも６層程度の水田耕作土が認められ、後述する近世の溝検出面より下で少なくとも２層の耕作土があることから、近世以前の水田が存在した可能性もある。

（溝１）

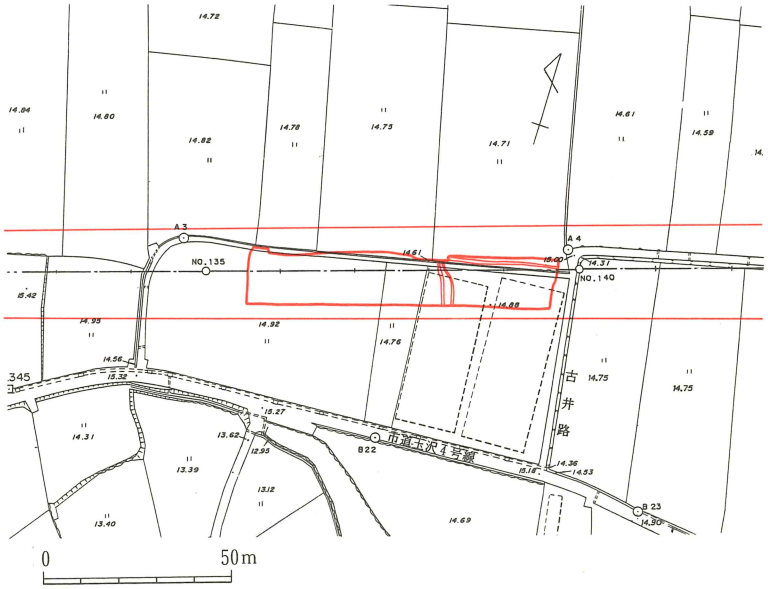
調査区の北東側で検出された東西方向に伸びる溝である。幅は0.8㍍から1.2㍍、深さは20㌢から30㌢程度である。溝内部には杭の痕跡が多数認められ、また多くの礫とともに陶磁器が出土した。また、溝埋土には砂層が認められ、水路として利用されたことがわかる。底面は東に向かって僅かに低下しているので、水の流れは西から東である。

出土遺物は第46図１～12で、１点の中世白磁(1)を除くとすべて近世の陶磁器である。

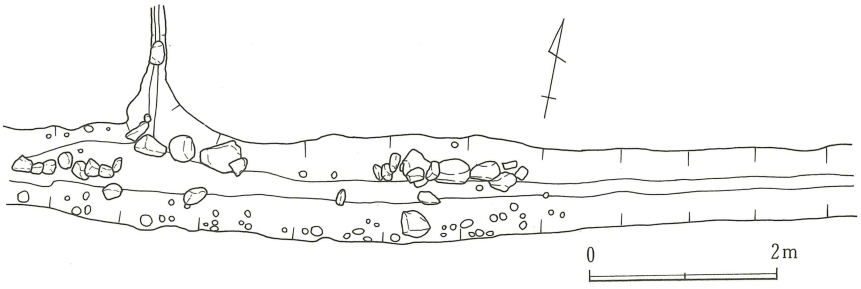
（溝２、３）

溝２と溝３は溝１に対して直行する形で検出された。溝２は幅0.4㍍から１㍍、深さ10㌢程度、溝３は幅0.6㍍から1.2㍍で深さは15㌢程度である。

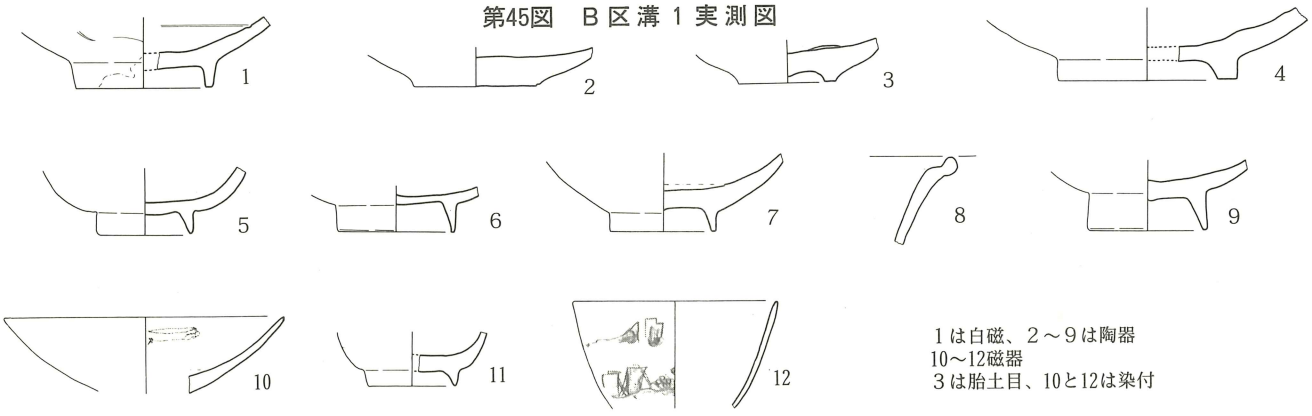
出土遺物は少なく、時期は不明である。



第44図　調査区位置図（その２）

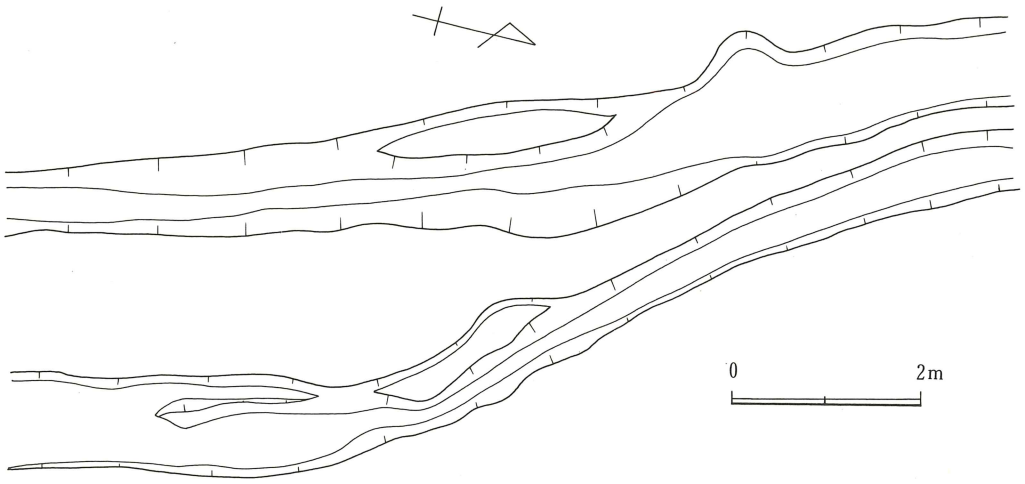


第45図　Ｂ区溝１実測図



１は白磁、２～９は陶器
10～12磁器
３は胎土目、10と12は染付

第46図　Ｂ区溝１出土遺物



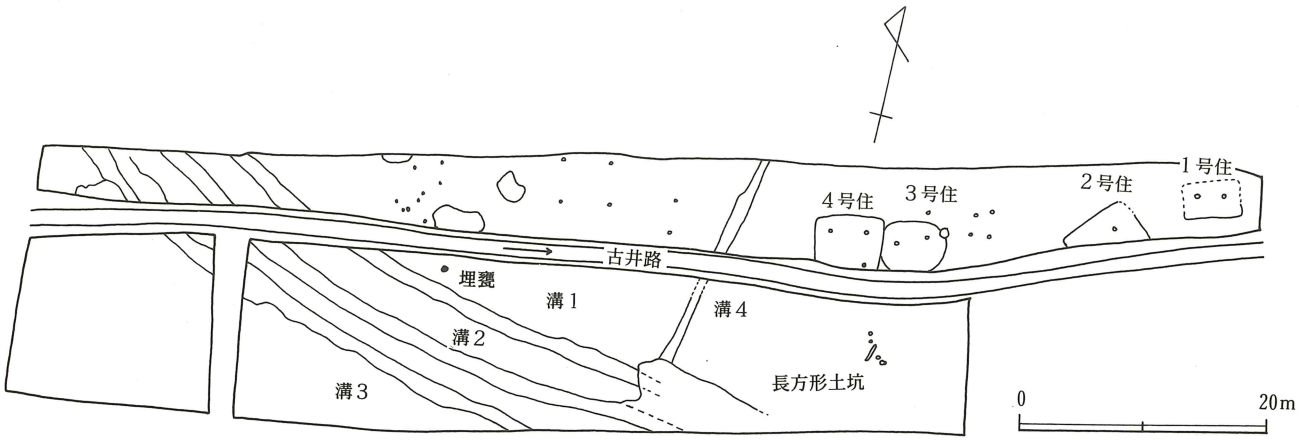
第47図　B区溝２、３実測図

D区

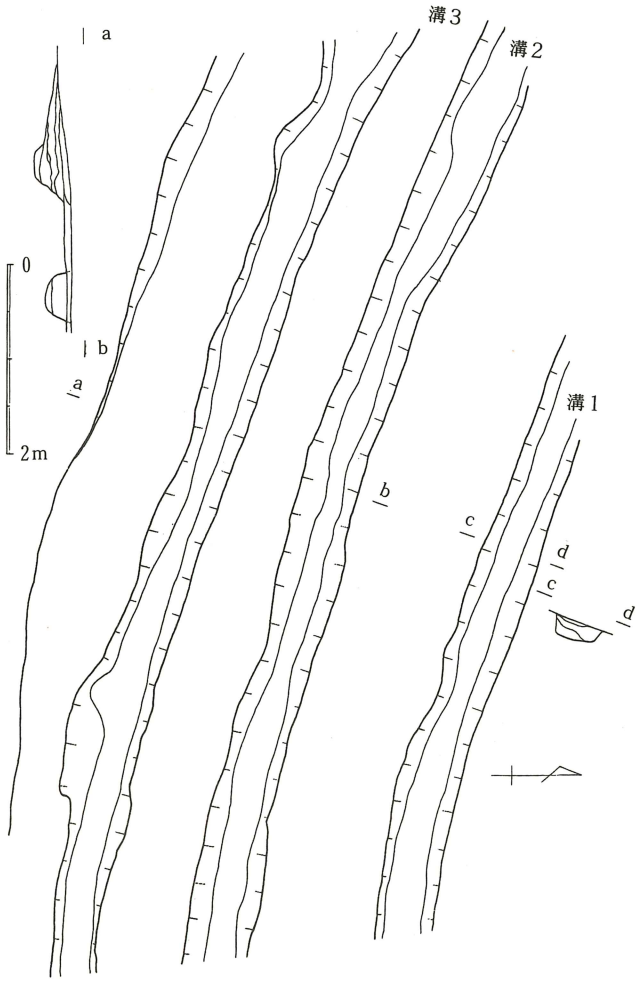
D区では中央部を現水路（古井路）が西から東に向かって流れており、調査は北調査区と南調査区に別れる。調査区内では、溝１から５と４基の住居跡、埋甕１基が検出された。

（土層）

調査区の南壁の土層（土層A）を調査した。それによると後述する古墳時代前期の溝１、３、４の検出面は砂質の明灰褐色土中に認められ、それより上位では水田耕作土が認められた。この水田耕作土は古墳時代前期の溝埋没後、間層があってその後に形成されている。耕作土中からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、他地区で確認された古墳時代後期の水田と考えられる。



第48図　D区　遺構配置図



第49図　溝１、２、３実測図

（溝１、２、３）

溝１、２、３は並行しており、緩やかに円弧を描くように北西から南東に向かって伸びている。溝１は1.2㍍、深さは35㌢から60㌢で、土層断面図からわかるように灰褐色粘質土が下層に堆積し、滞水していた状況を示している。明確な砂層はなかった。

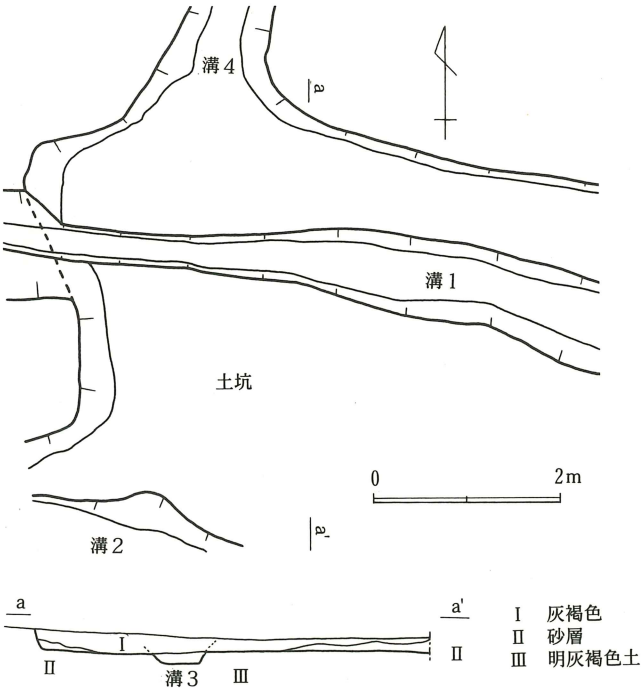
溝２は幅1.5㍍、深さ50㌢程度である。溝１と同様に最下層には粘質の灰褐色土が堆積していた。

溝３は、南側の上端が外側に広がり、幅３㍍程と幅広いが、掘り下げの始まる部分からであると、幅約１㍍程度になる。深さは50㌢から60㌢である。堆積状況は、最下層に粘質の灰褐色土で、上層には砂層も認められる。

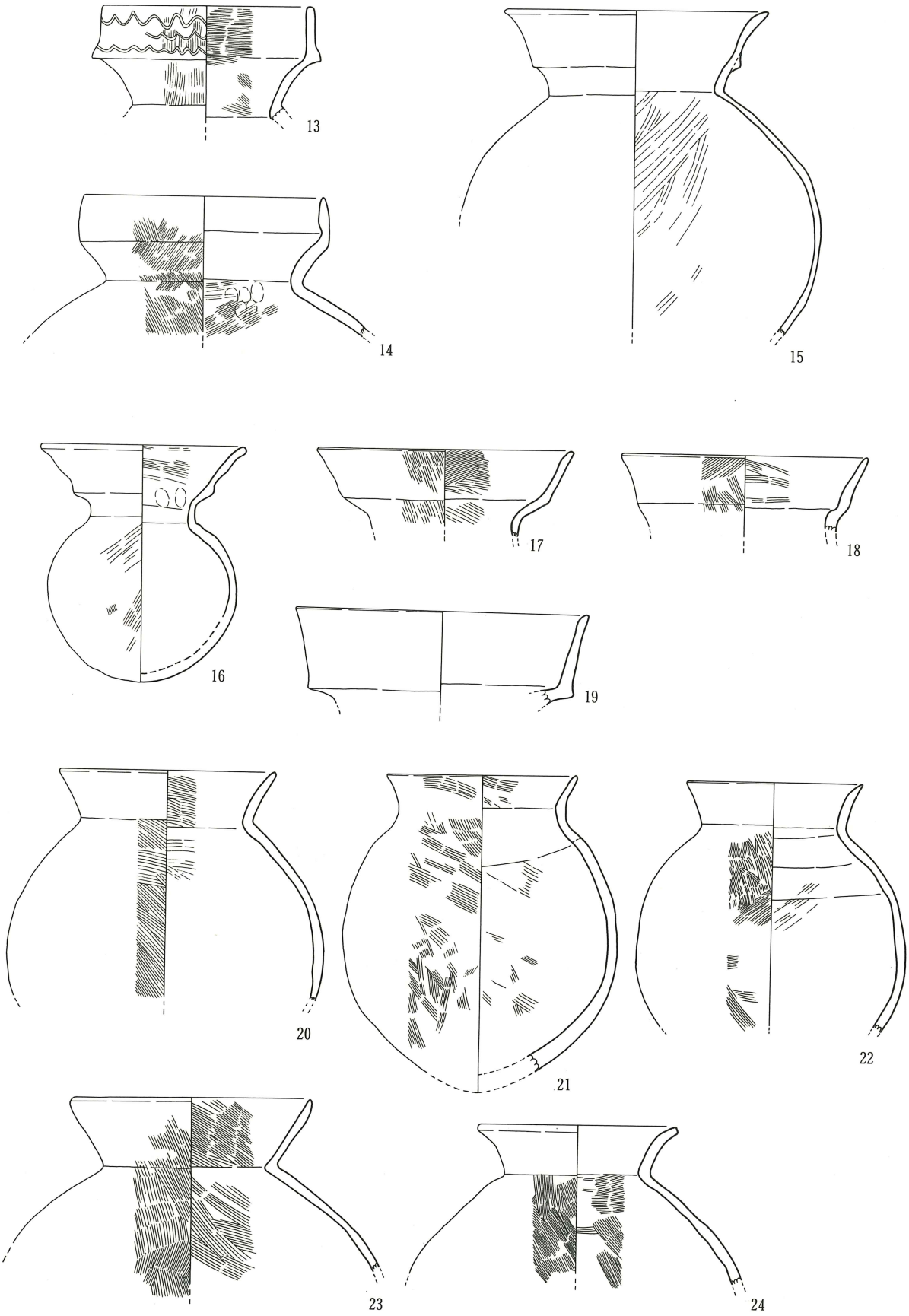
出土遺物は、特に溝１において溝最上層の暗灰褐色土中から廃棄された状態で大量に出土している。13から144は溝１、145から169は溝の出土である。

（溝４）

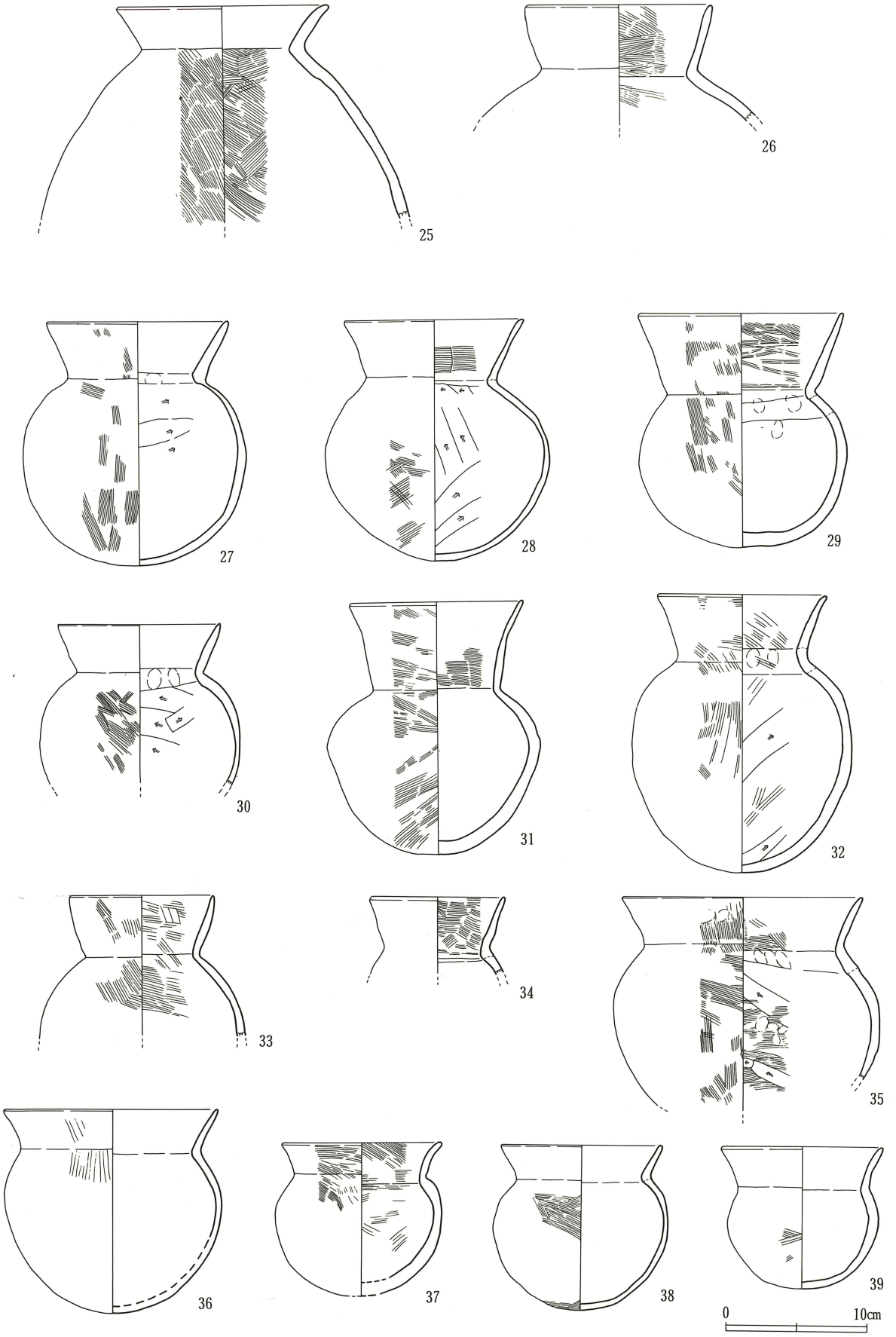
溝１から３に直行する形で略南北方向に伸びる溝。幅約0.7㍍で、深さは30㌢から40㌢である。溝１を切っており、溝２との平面の観察では、後述の長方形土坑が重なっているために切り合い関



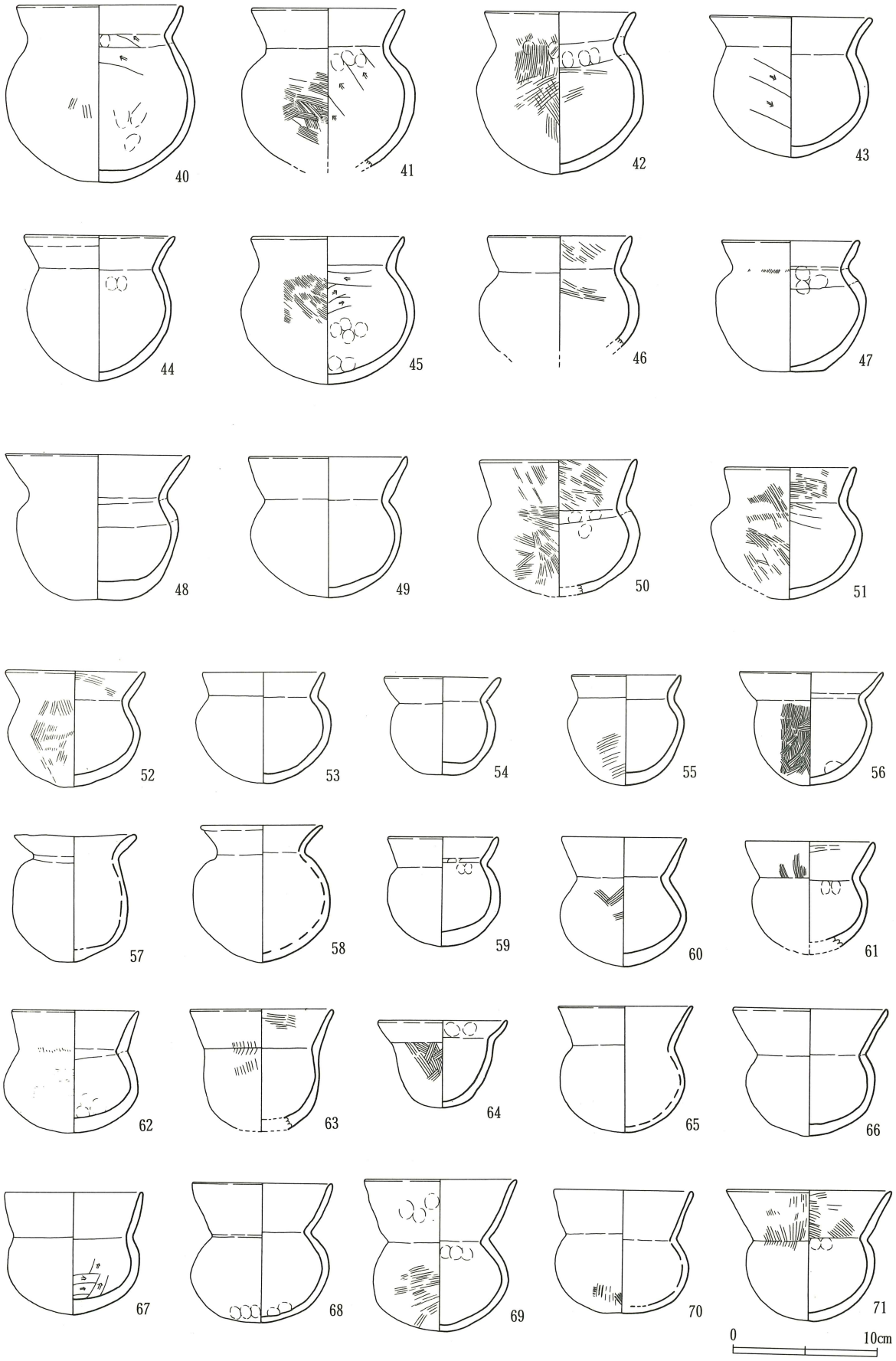
第50図　Ｄ区溝４と長方形土坑実測図



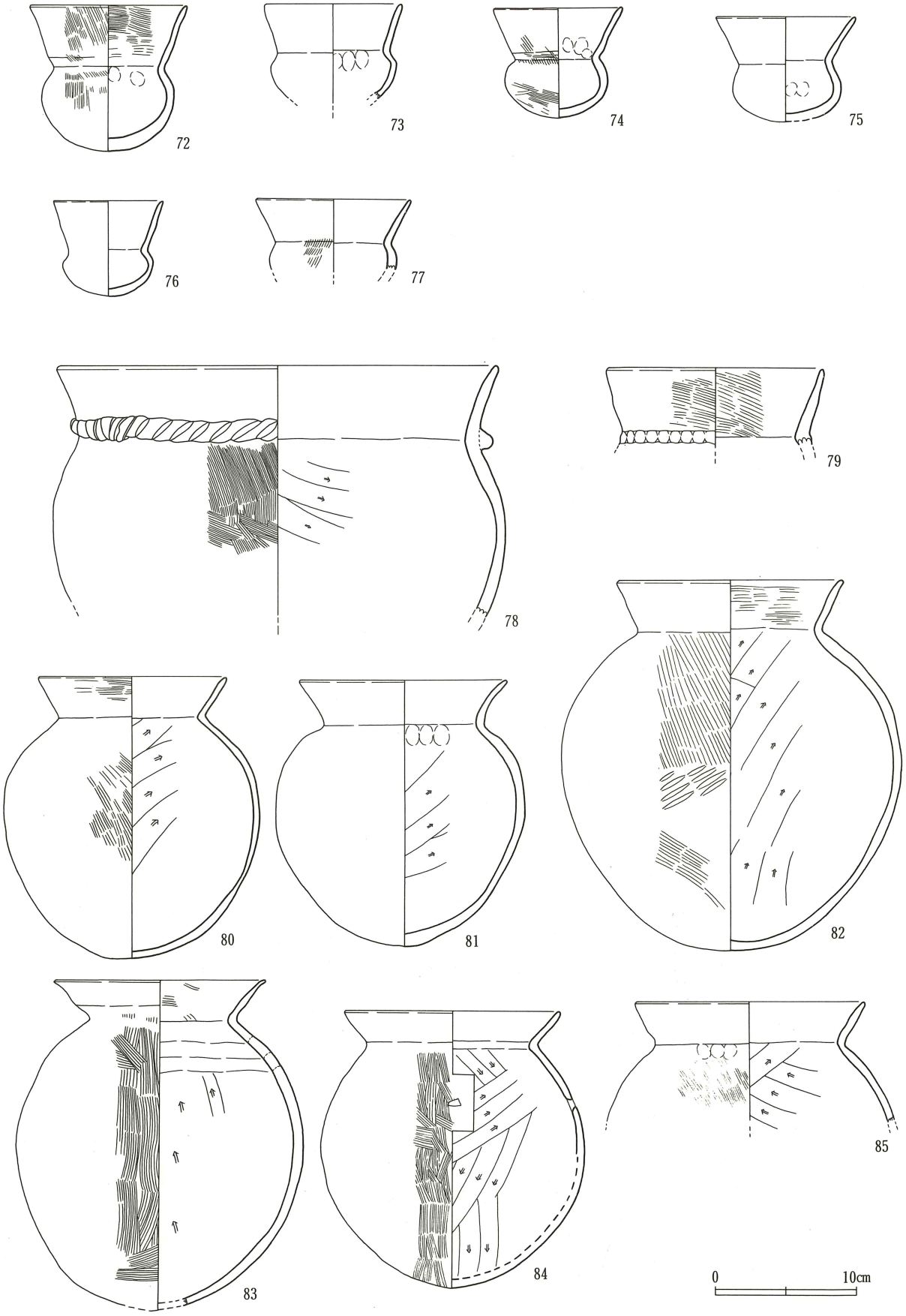
第51図　D区　溝１出土土器実測図（1）



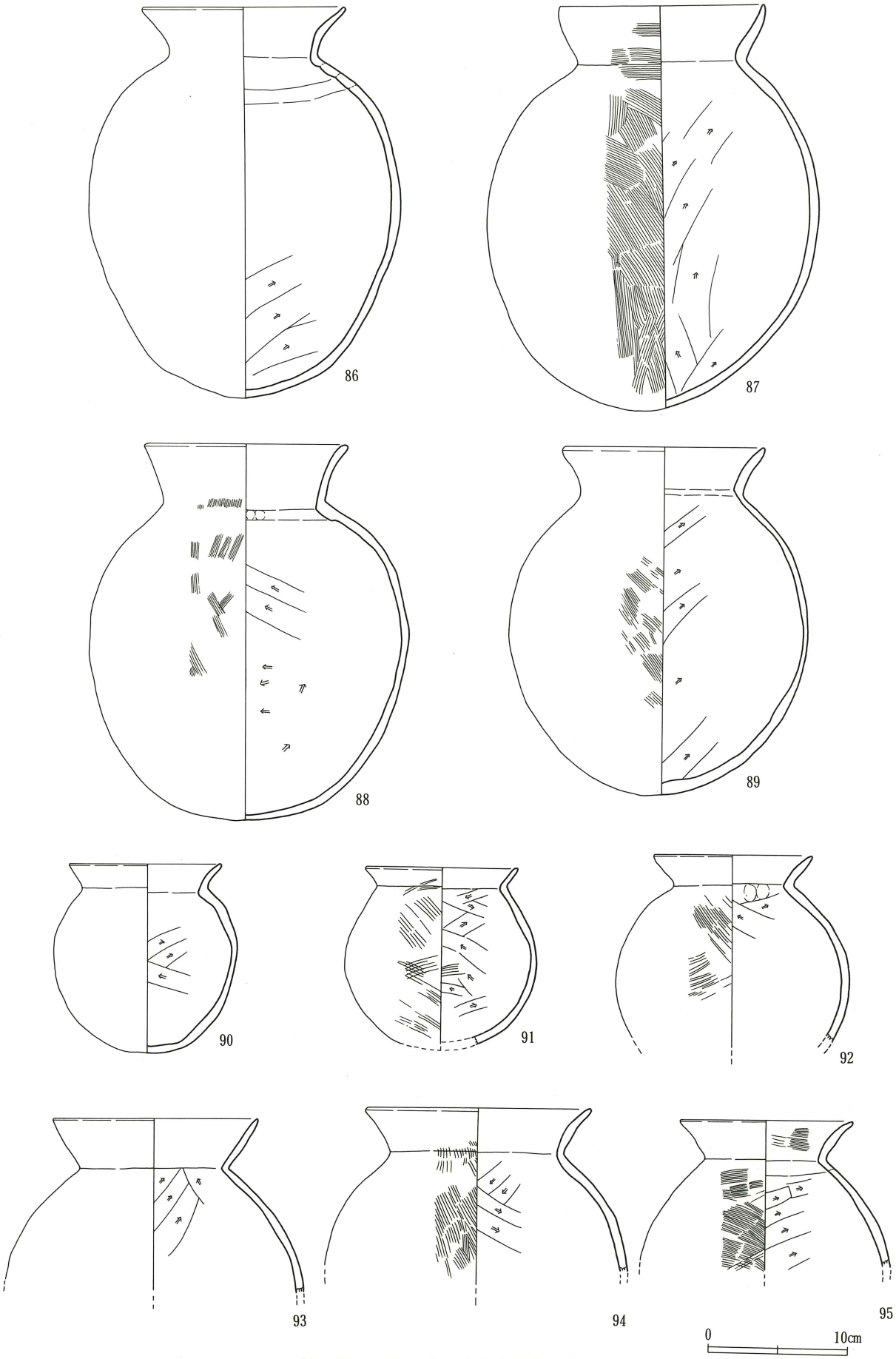
第52図　D区　溝１出土土器実測図（2）



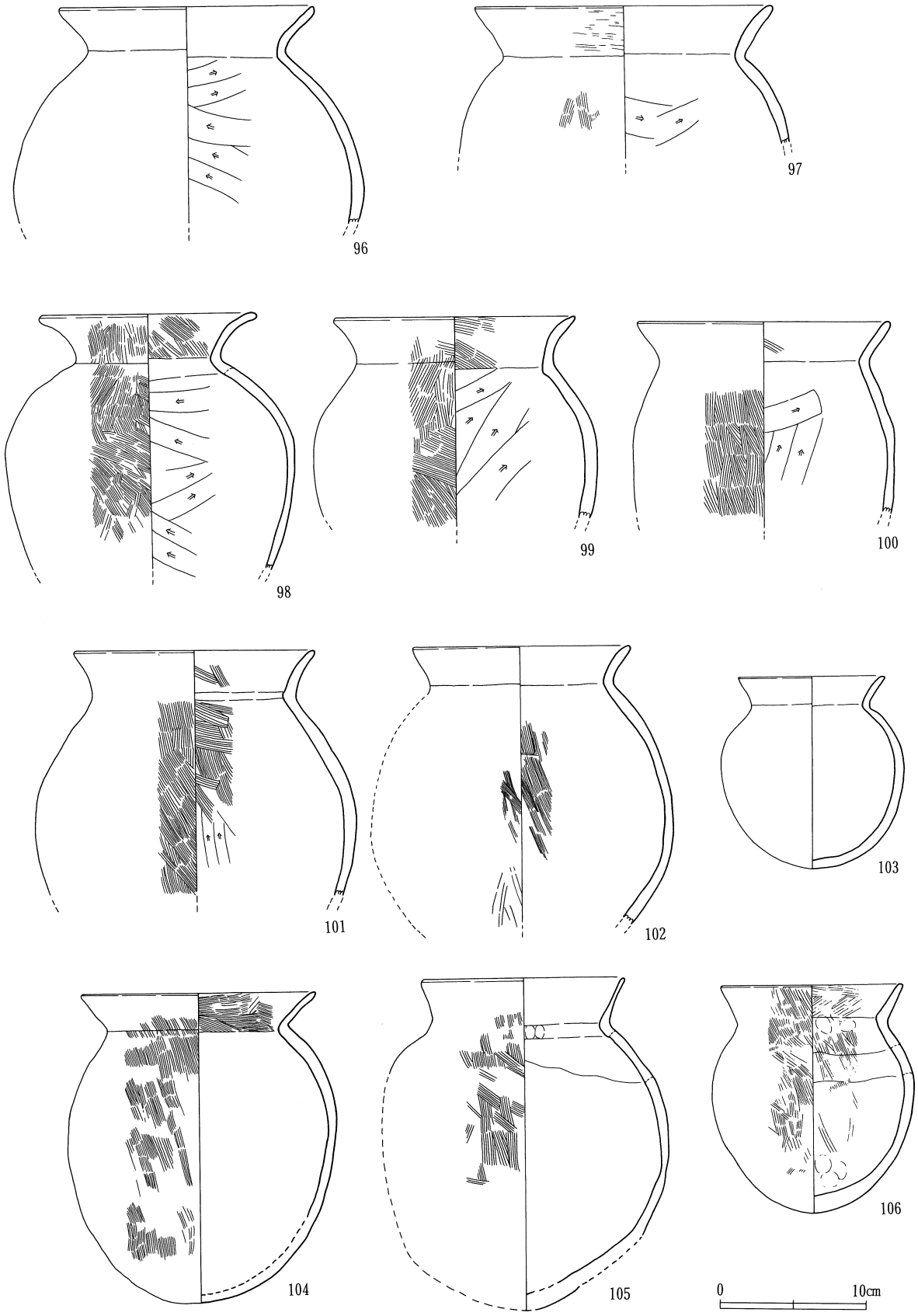
第53図　D区　溝1出土土器実測図 (3)



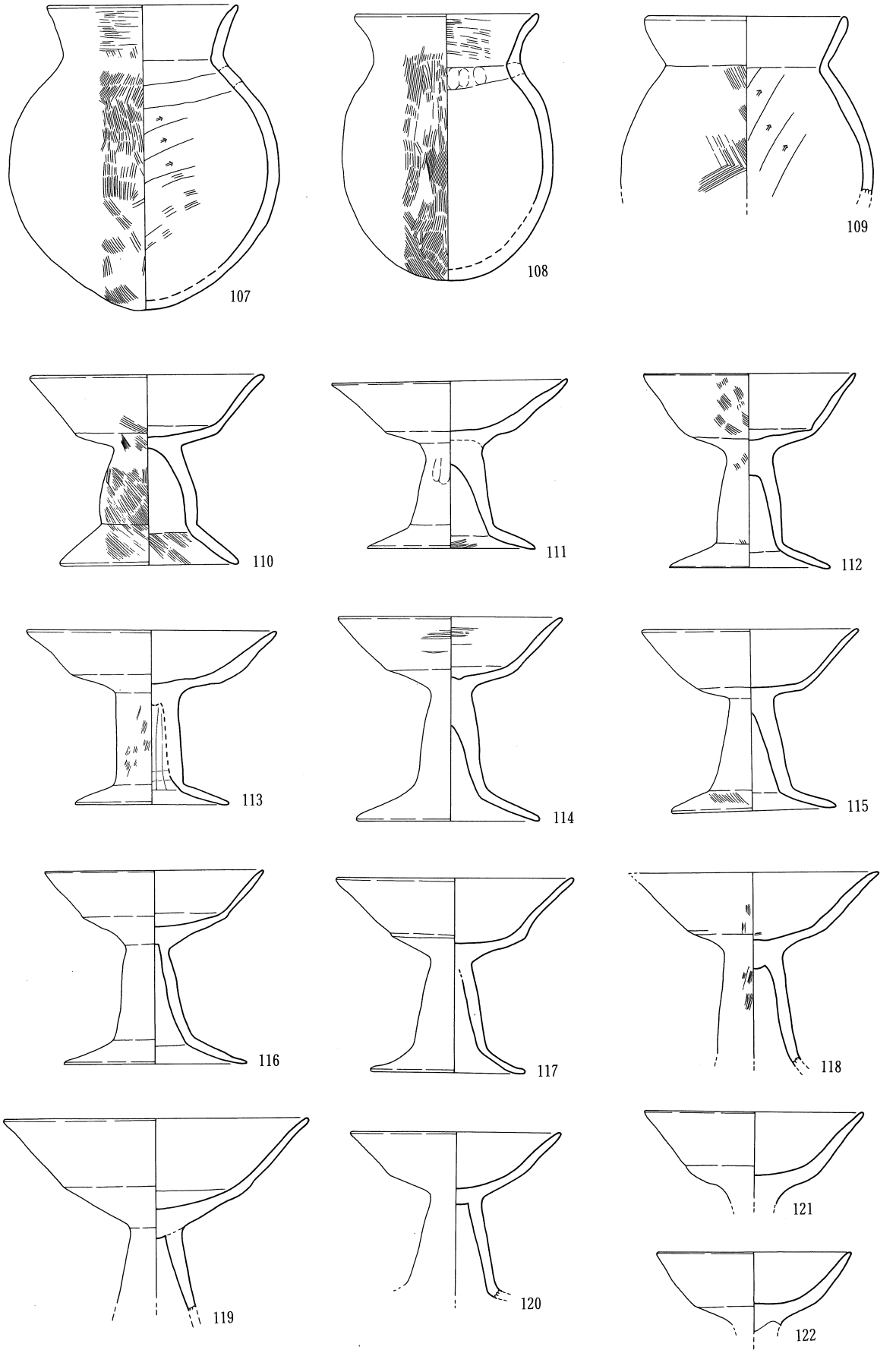
第54図　D区　溝１出土土器実測図（4）



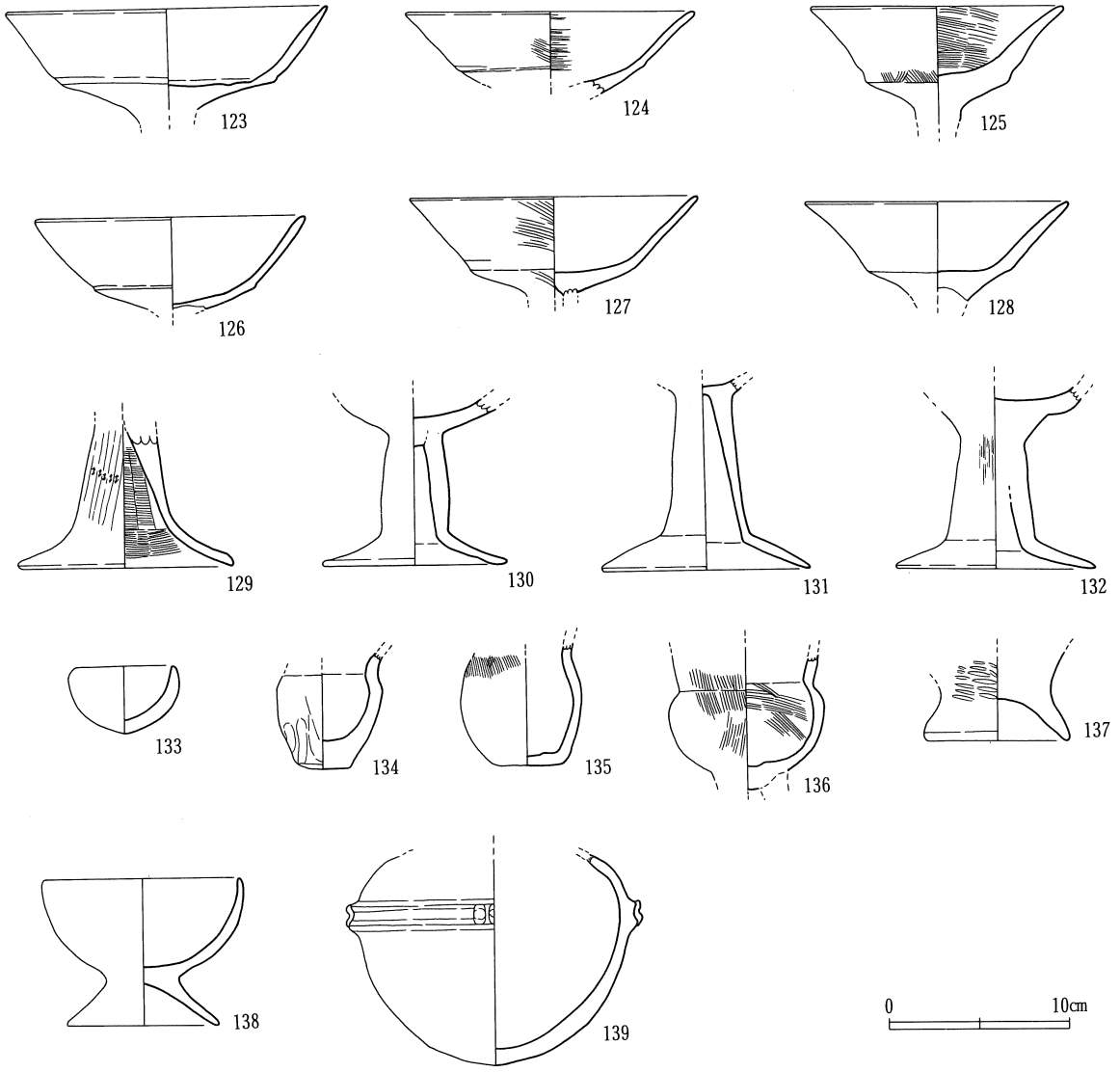
第55図　D区　溝１出土土器実測図（5）



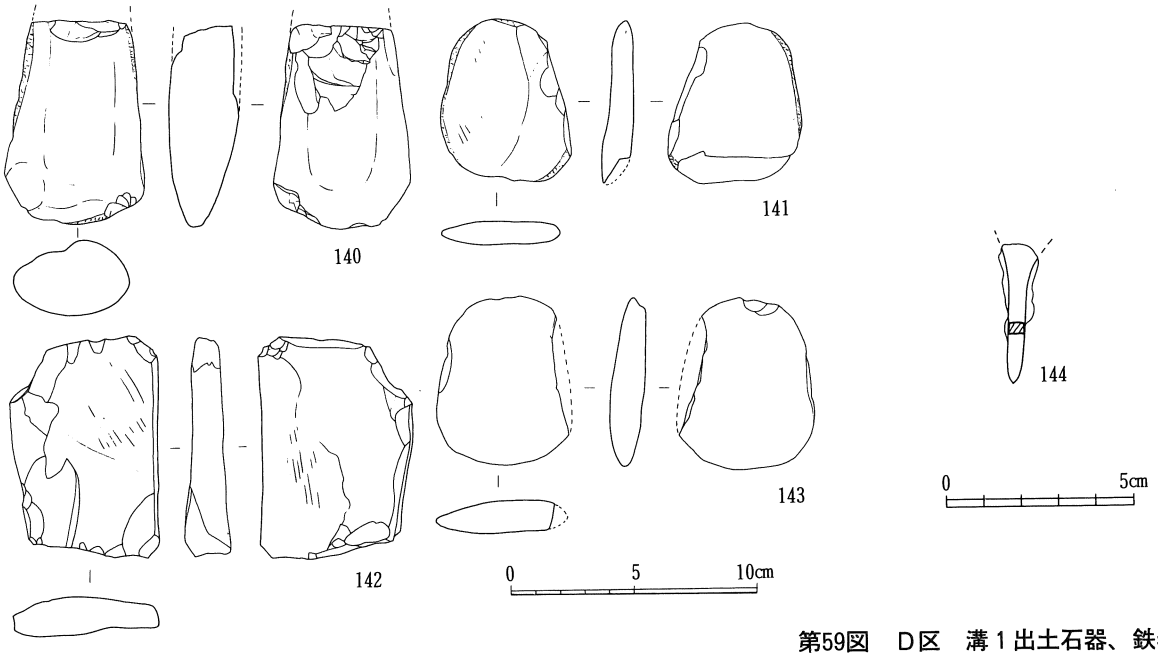
第56図　D区　溝1出土土器実測図（6）



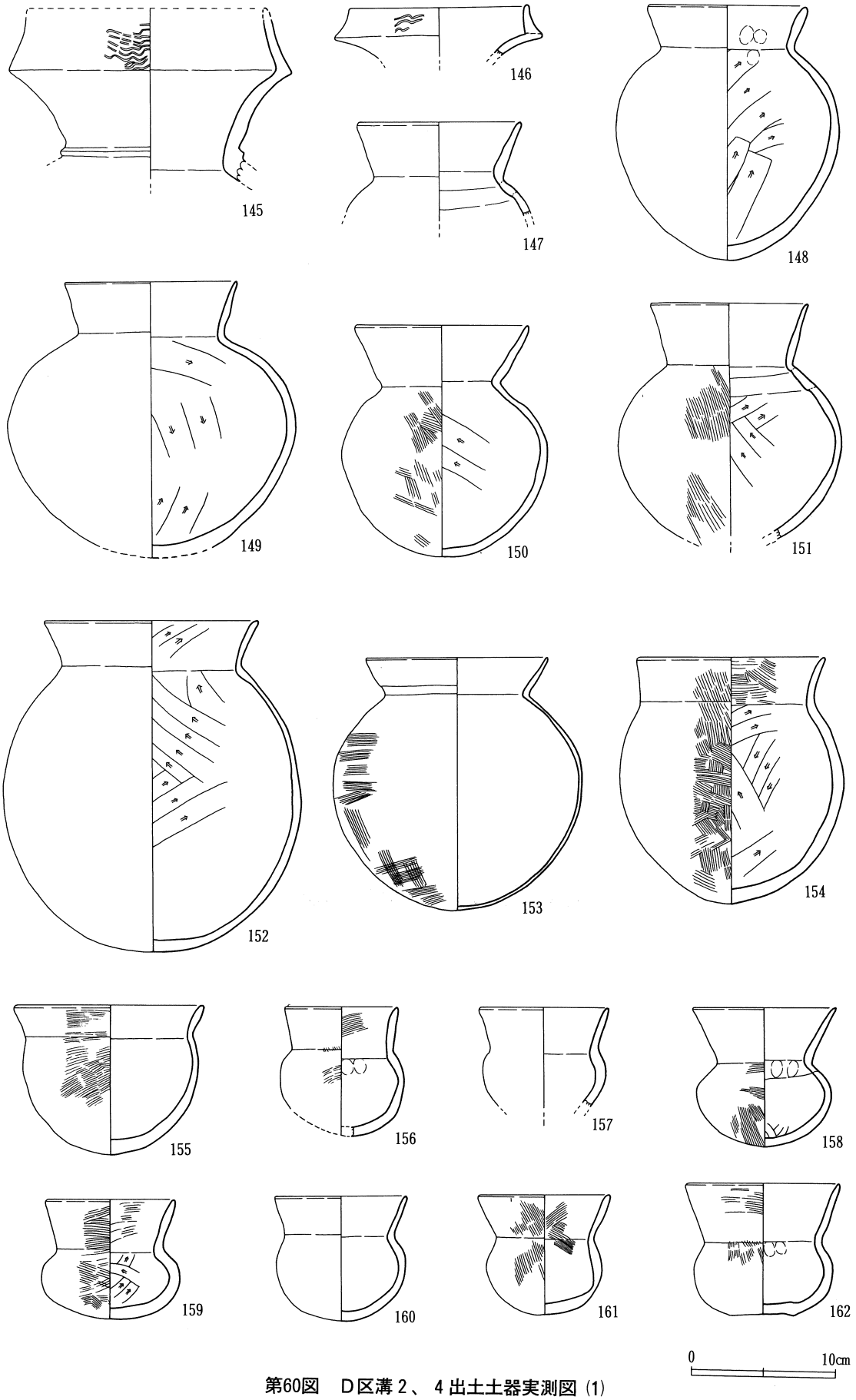
第57図　D区　溝１出土土器実測図（7）



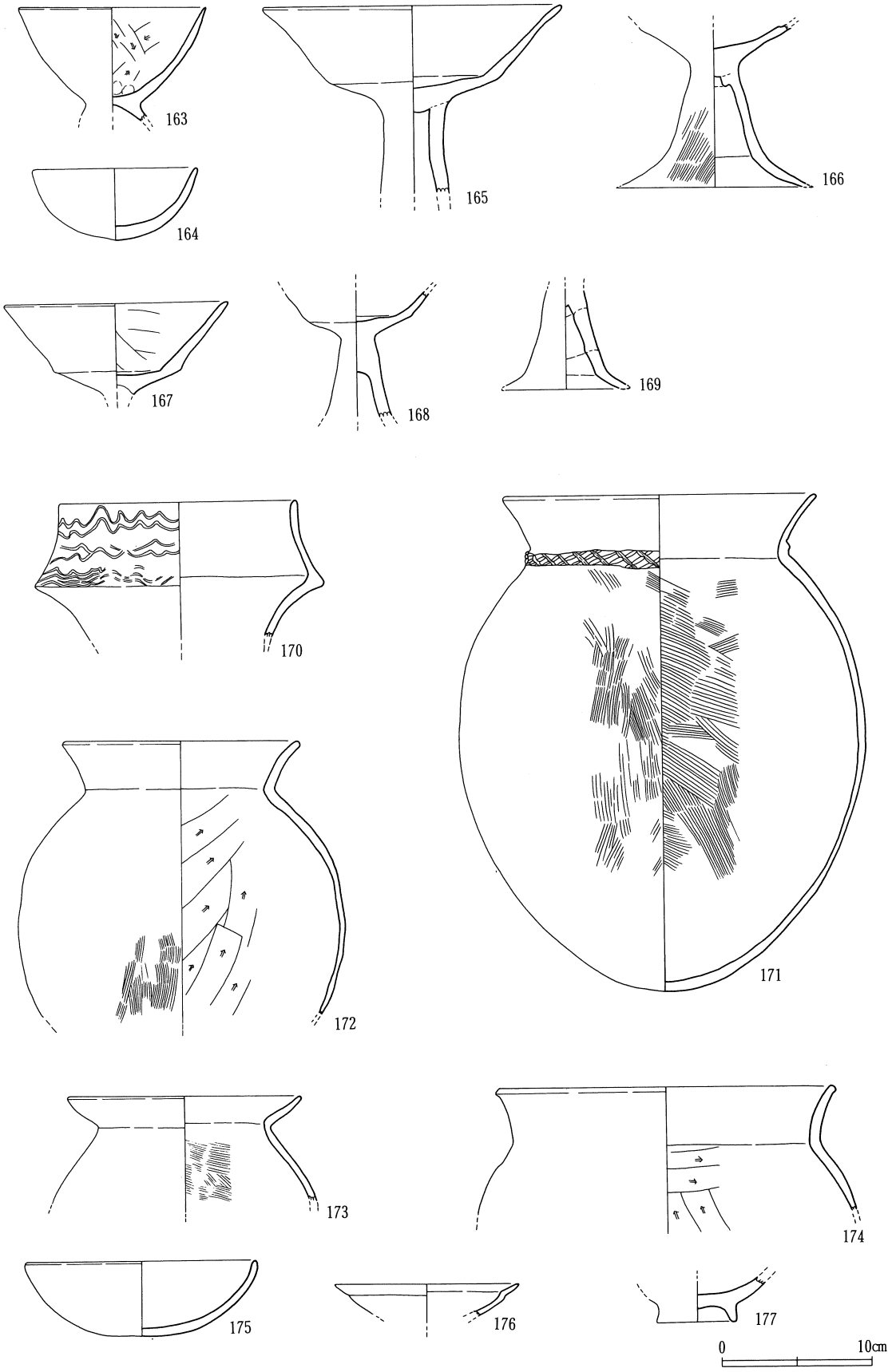
第58図　D区　溝１出土土器実測図 (8)



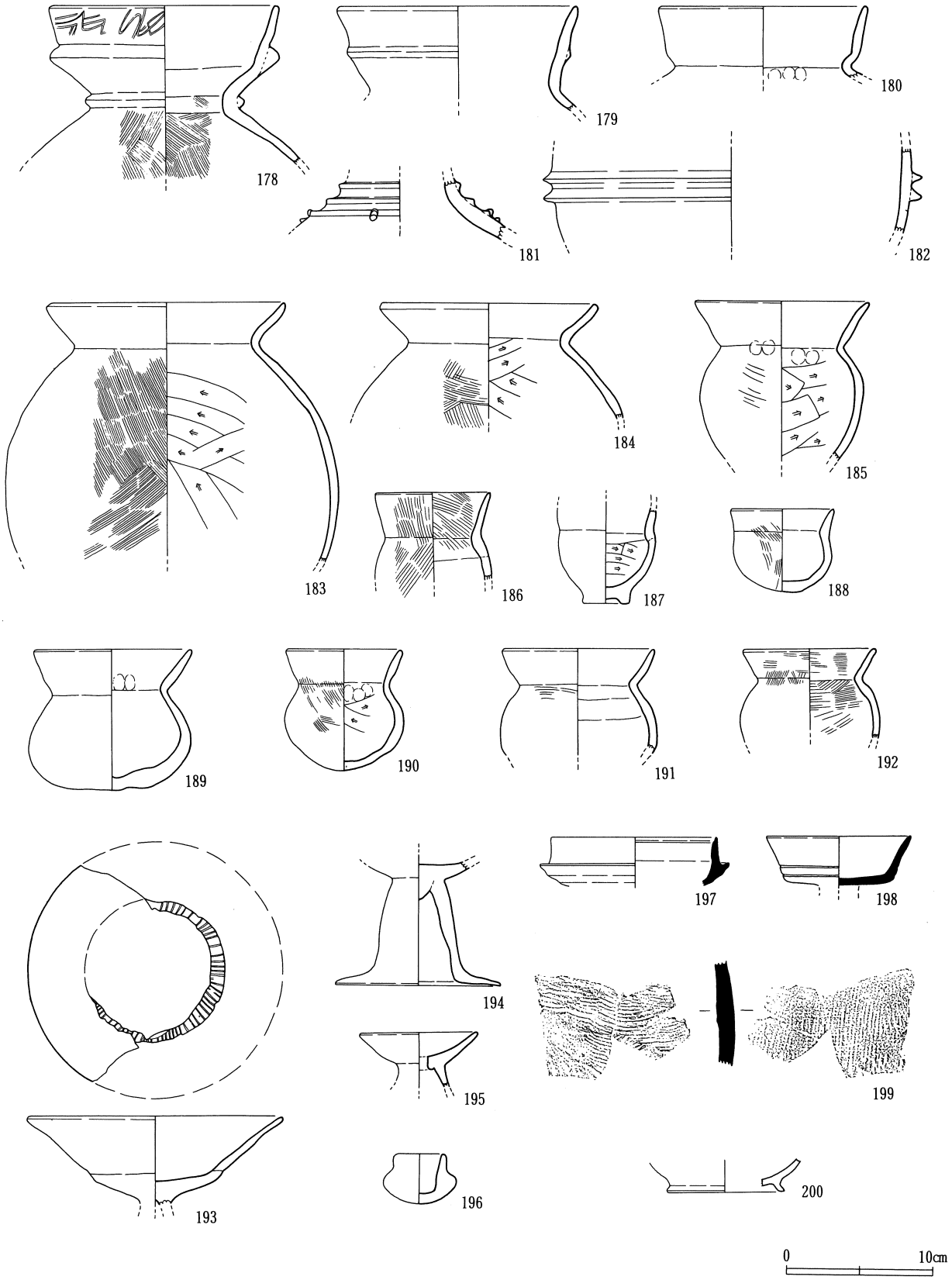
第59図　D区　溝１出土石器、鉄器



第60図　D区溝２、４出土土器実測図（1）



第61図　D区溝２、４出土土器実測図 (2)



第62図　D区長方形土坑出土土器実測図

係は不明である。しかし、土層を観察すると、当然確認できるはずの位置に溝４は確認できないので、溝２につながっていた可能性が高い。

出土遺物は170から177で、溝１から３のものと比べて時期に差は認められない。177は高台付の土師器で、混入物と考えられる。

（長方形土坑）

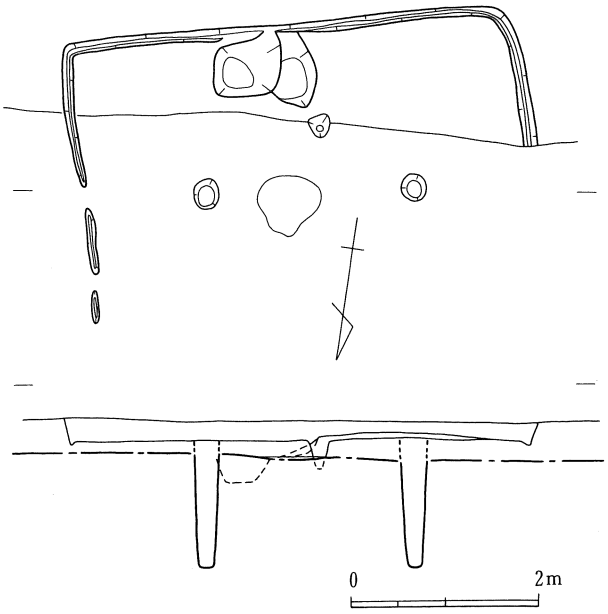
溝１、溝２を切る遺構であるが、溝４との切り合い関係は確認できなかった。また、調査区外に伸びるため、全形が確認できない。深さは15㌢程度と浅い。

出土遺物は第62図で、178から196は古墳時代前期、197から199は６世紀の須恵器、200は高台を持つ土師器椀で古代まで下る。200は後世の攪乱による混入と考えられる。

（第１号住居跡）

検出された４基の住居跡の中で、最も東側に位置する。北側の３分の１程は後世の削平を受けており、僅かに一部分の壁溝が残っているに過ぎない。南北3.0㍍、東西は4.9㍍の長方形に復元できる。最も残存している部分で、深さは10㌢程度に過ぎない。主柱穴は２本で、その間に地焼炉がある。壁溝は全周していたと考えられる。また、南側の壁際には切り合いの認められる土坑が２つある。一般的な貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は201と202である。



第63図　Ｄ区第１号住居跡実測図

（第２号住居跡）

１号住居跡の西側にある住居跡で、大半は「古井路」によって壊されている。コーナー部分も後世の削平で壊されており全形は不明であるが、コーナーの明確な方形（長方形）になると考えられる。深さは約25㌢である。主柱穴は１カ所のみ検出できたが、位置関係から通例の４本であろう。壁溝が巡る。

出土遺物は203から213である。212は石皿、213は磨石である。

（第３号住居跡）

４号住居跡に西側の一部を切られる。平面プランは楕円形で、長軸5.5㍍、短軸4.3㍍に復元できる。残存する深さは約５㌢程である。中央部に地焼炉があり、南側壁際にはごく浅い皿状の土坑がある。主柱穴は２本確認されたが、やや北側に寄っている。壁溝は確認できなかった。

出土遺物は214から218である。

（第４号住居跡）

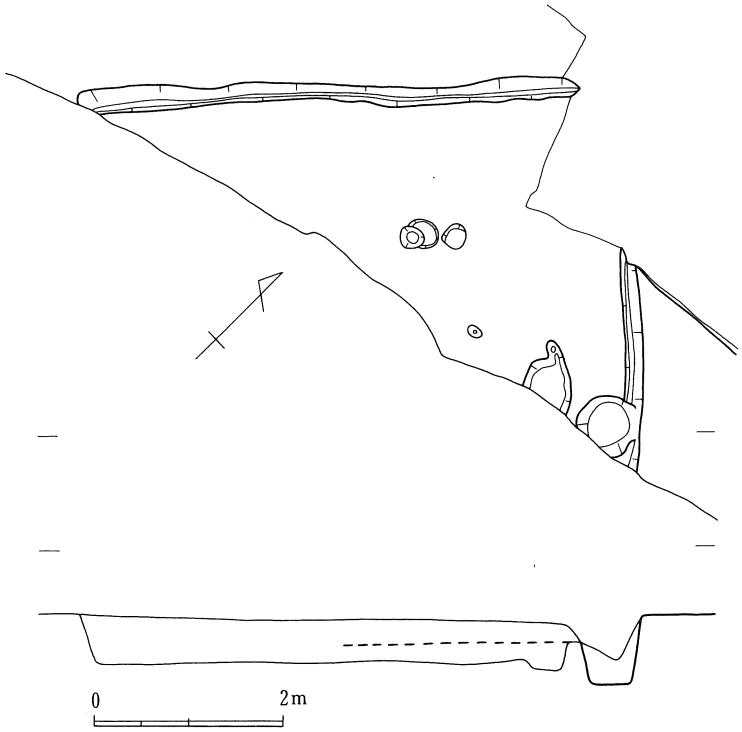
最も西側で検出された住居跡で、３号住居跡を切っている。南側は「古井路」により破壊されており全形は不明であるが、一辺約5.6㍍の方形に復元できる。残存する深さは10㌢ほどである。主柱穴は３カ所確認できたが、調査区外に１本が想定できるため、４本主柱となる。炉、壁溝、土坑などは認められなかった。

出土遺物は細片のみで図示できるものはない。

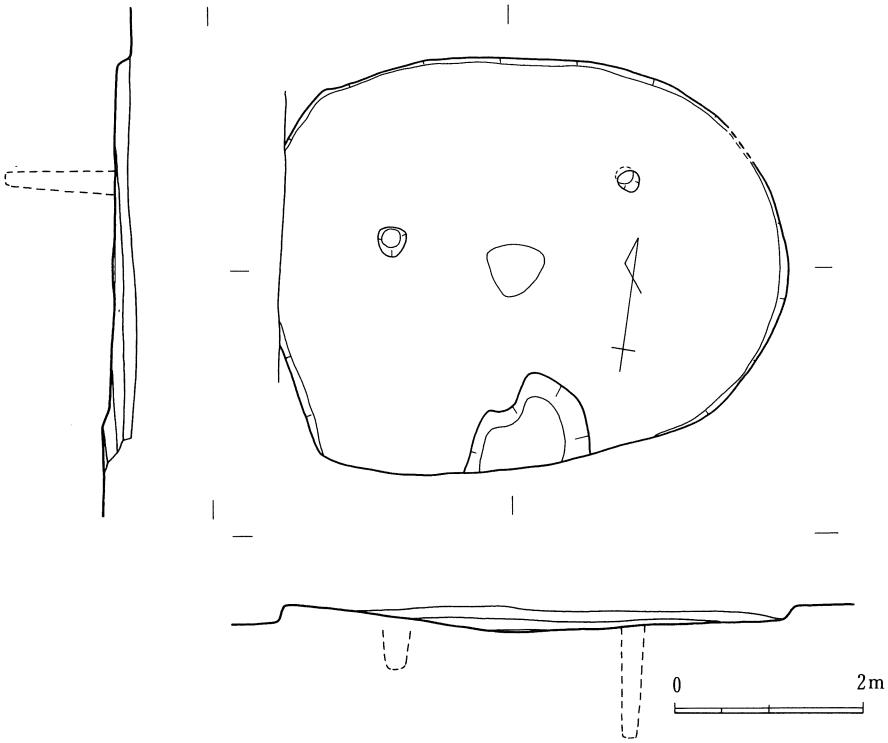
（その他の出土遺物）

219は第48図の「埋甕」の地点から出土したもので、口縁部を下向きにして倒立して埋められていた。下城式の甕である。

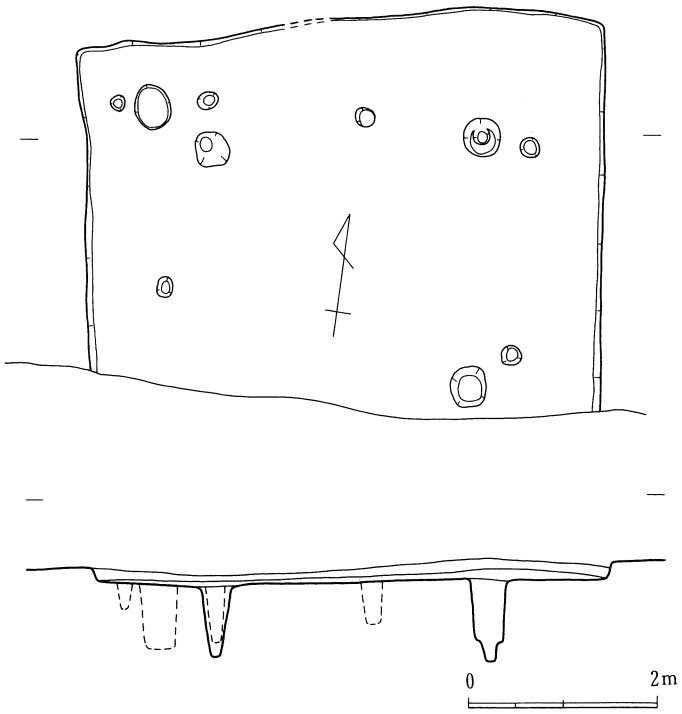
222は水田層から出土したものである。



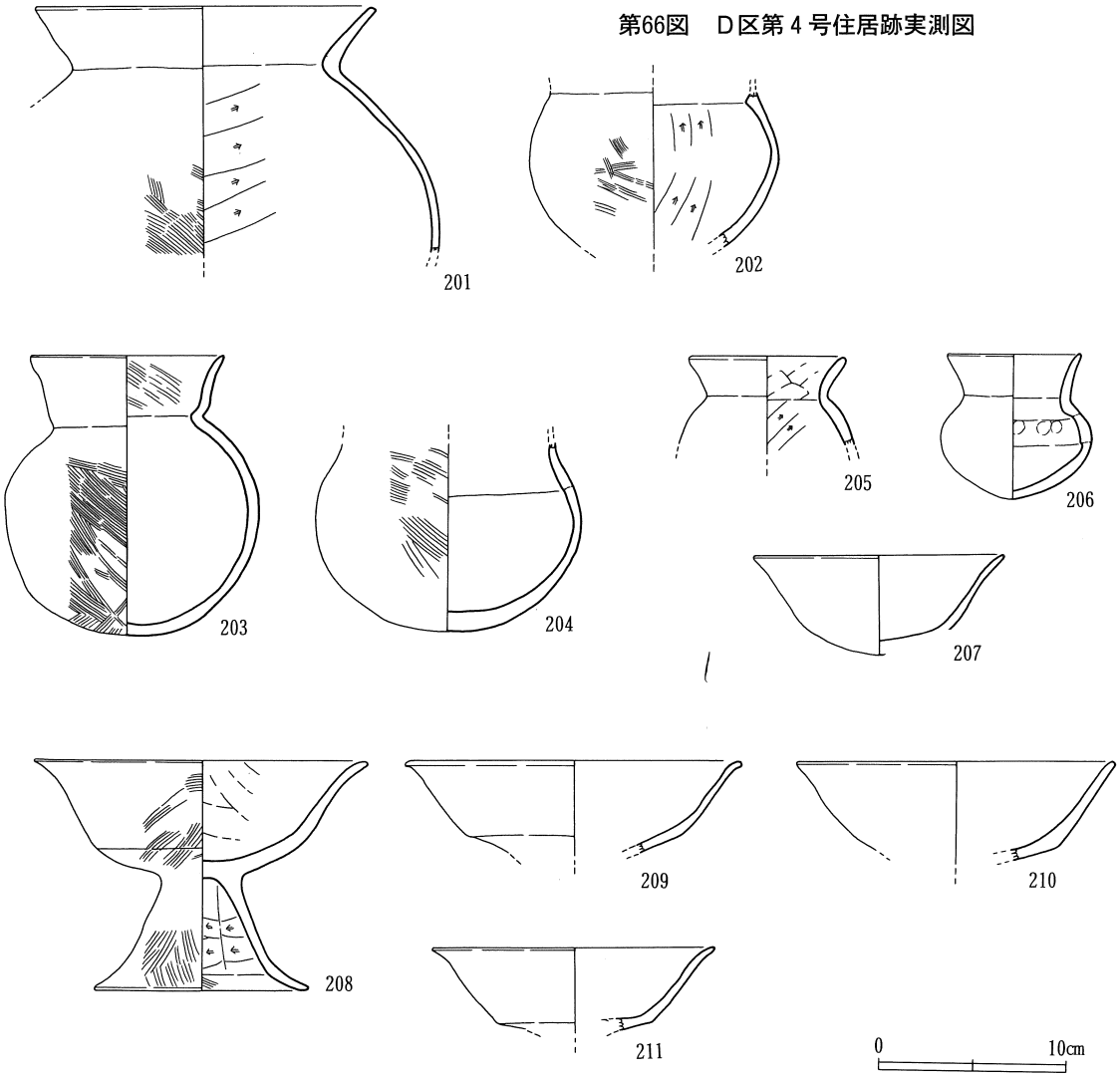
第64図　Ｄ区第２号住居跡実測図



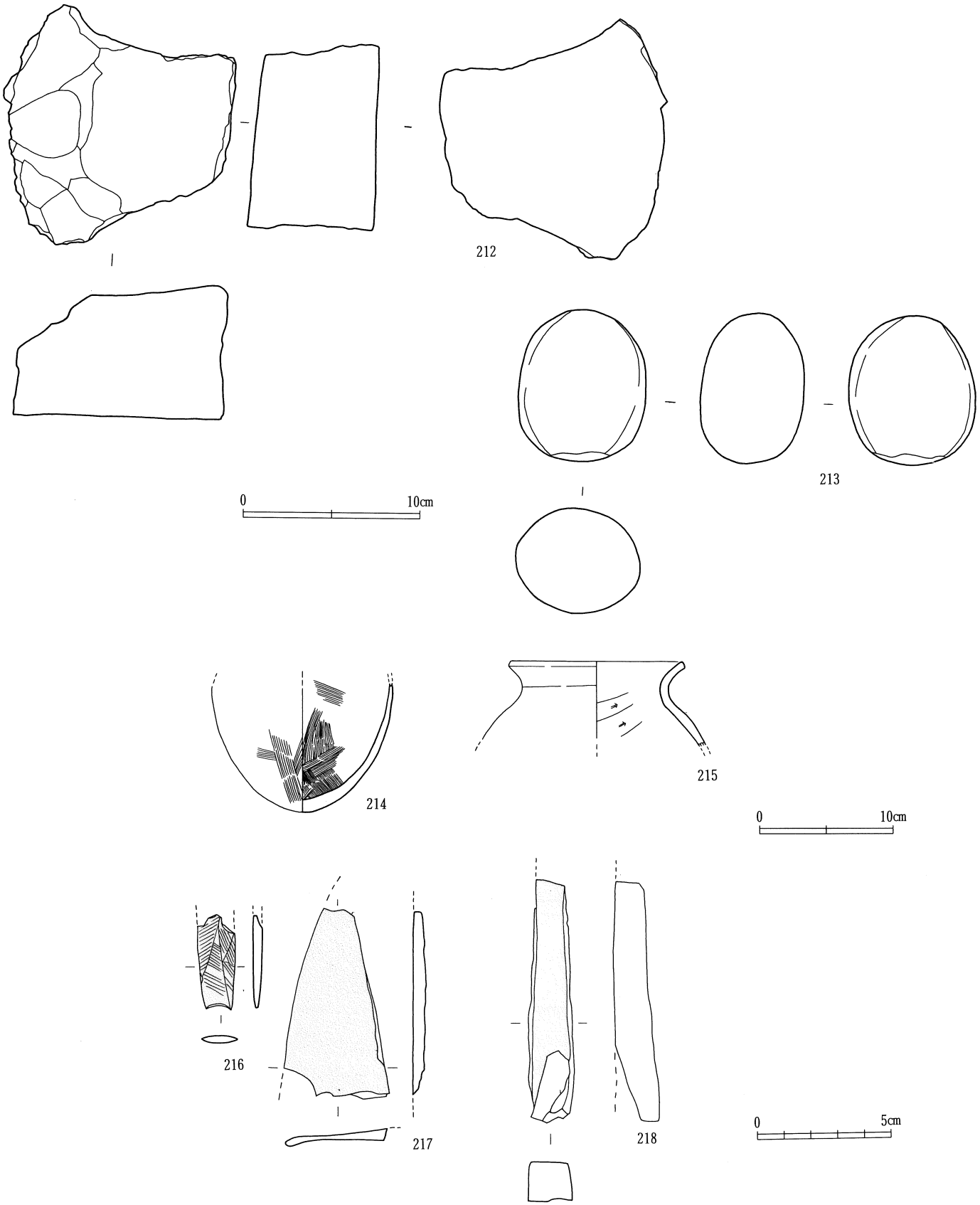
第65図　Ｄ区第３号住居跡実測図



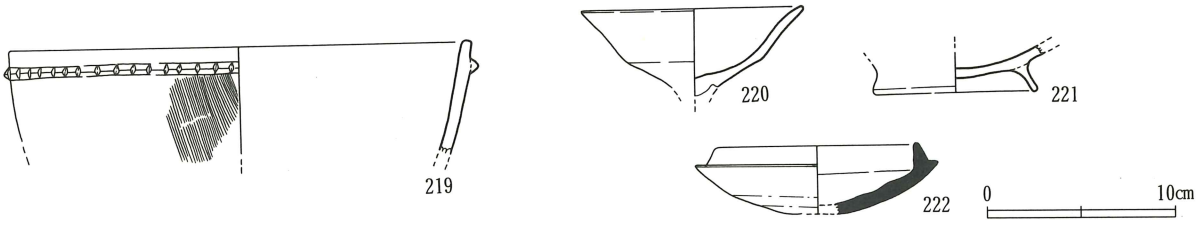
第66図　D区第４号住居跡実測図



第67図　D区住居跡出土遺物実測図(1)



第68図　D区住居跡出土遺物実測図（2）



第69図　D区出土土器

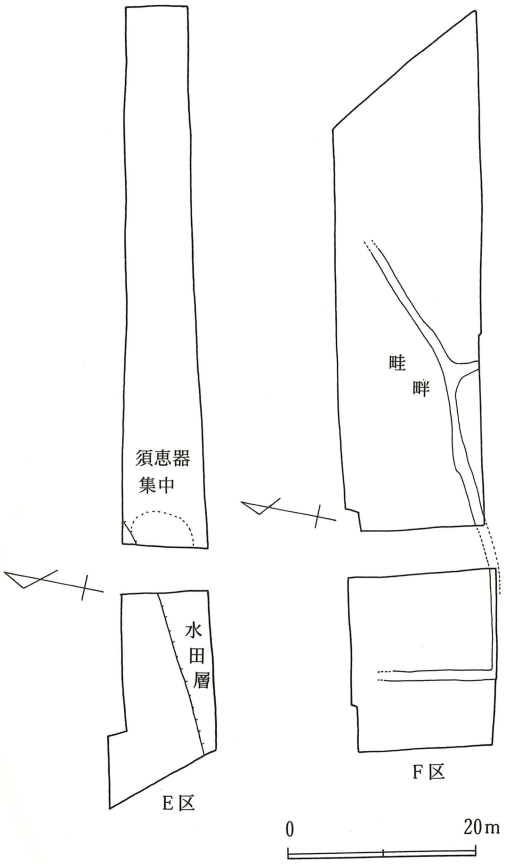
E区

E区はほぼ全面に水田層が広がっていた。僅かにE－Ⅱ区において水田層の境界が認められた。出土遺物は古墳時代後期のものであり、水田層も古墳時代後期と考えられる。

水田耕作土中より223～233の土器が出土している。

F区

畦畔をともなう水田遺構が検出された。その畦畔で大きく区切られた水田面は4面あるが、いずれも調査区内で完結せず面積は不明である。耕作土の上面には砂層はなく、小畦畔はすでに削平されている可能性が高い。検出された畦畔は、土層断面図からわかる通り、耕作土下の土層の掘り残しである可能性が高い。すなわち、耕作土を寄せ集めて盛り上げた小畦畔ではなく、当初から計画的に設定された大区画を示す畦畔であったと考えられる。その畦畔で区画された水田面は4面となる。



第70図　E、F区遺構配置図

（土層）

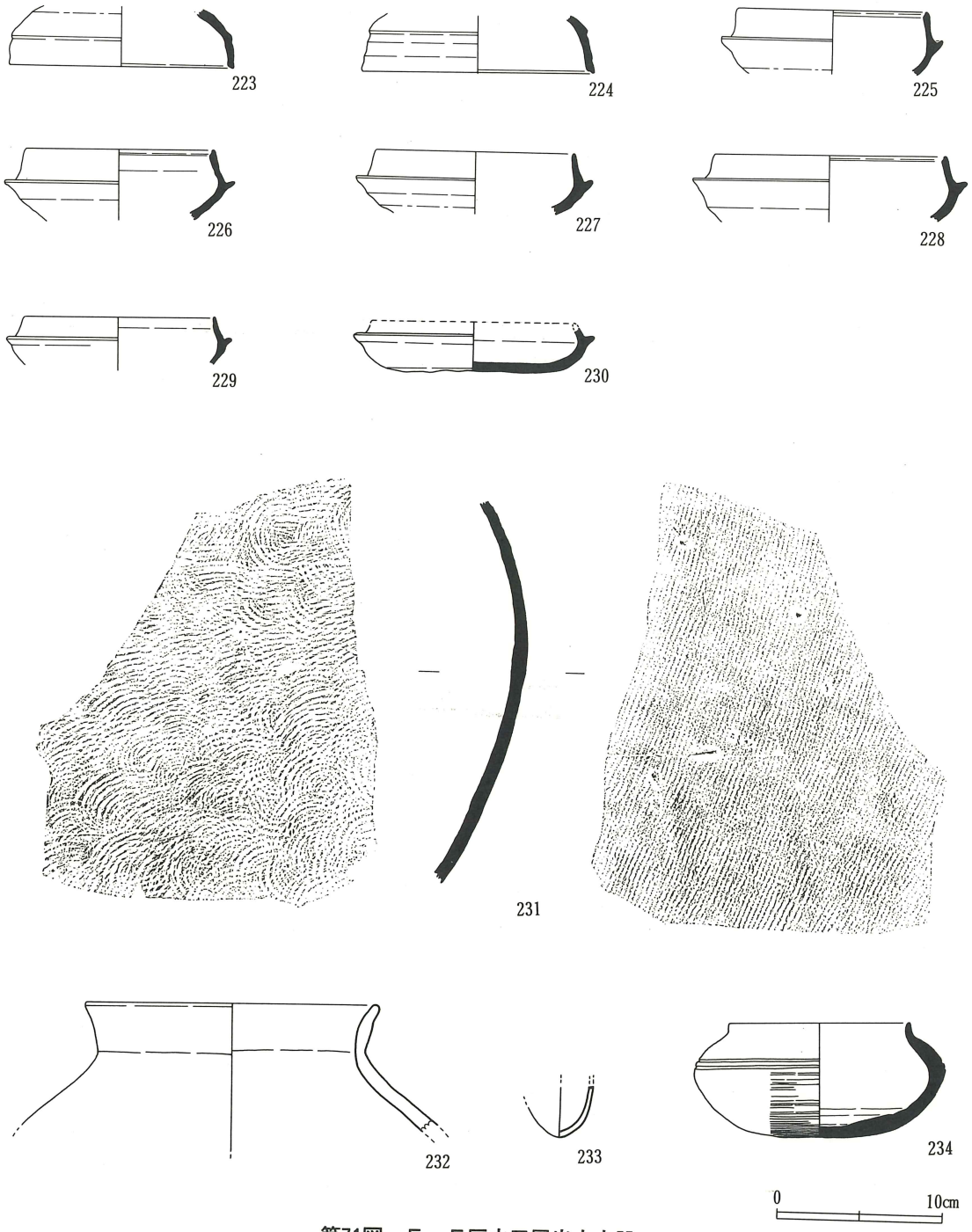
調査区南壁土層によると、現水田耕作土を除くと砂層の上部までに明確なものでは2層の水田耕作土が認められる。いずれも下層に鉄とマンガンの酸化層が認められ、乾田であることがわかる。下位の水田耕作土の下約60㌢で砂層となるが、その間には人為的な土層は認められない。畦畔と考えられる部分は土層断面図に3カ所認められる。A地点は、東西に伸びる畦畔から南側に枝分かれしたもので、基底部で幅1.5㍍、高さ20㌢である。全体に鉄の酸化した赤褐色を呈している。B地点は東西方向の畦畔から北側に枝分かれする畦畔の部分である。A地点と同様、暗灰黄色の水田耕作土中に赤褐色の盛り上がりが認められた。基底部の幅70㌢で、高さは10㌢程度である。C地点はB地点と同様に明橙褐色の高まりが認められたが、調査区内では平面的に畦畔が確認されなかったので、調査区外、すなわち南側に枝分かれするものと考えられる。丁度このあたりは、東西に伸びる畦畔が土層断面に縦にかかっており、水田耕作土が薄く、かつ耕作土下の層の酸化が強い。

なお、調査区東側では主な２枚の水田耕作土が徐々に傾斜しているが、これは地盤の沈下によるものと考えられる。

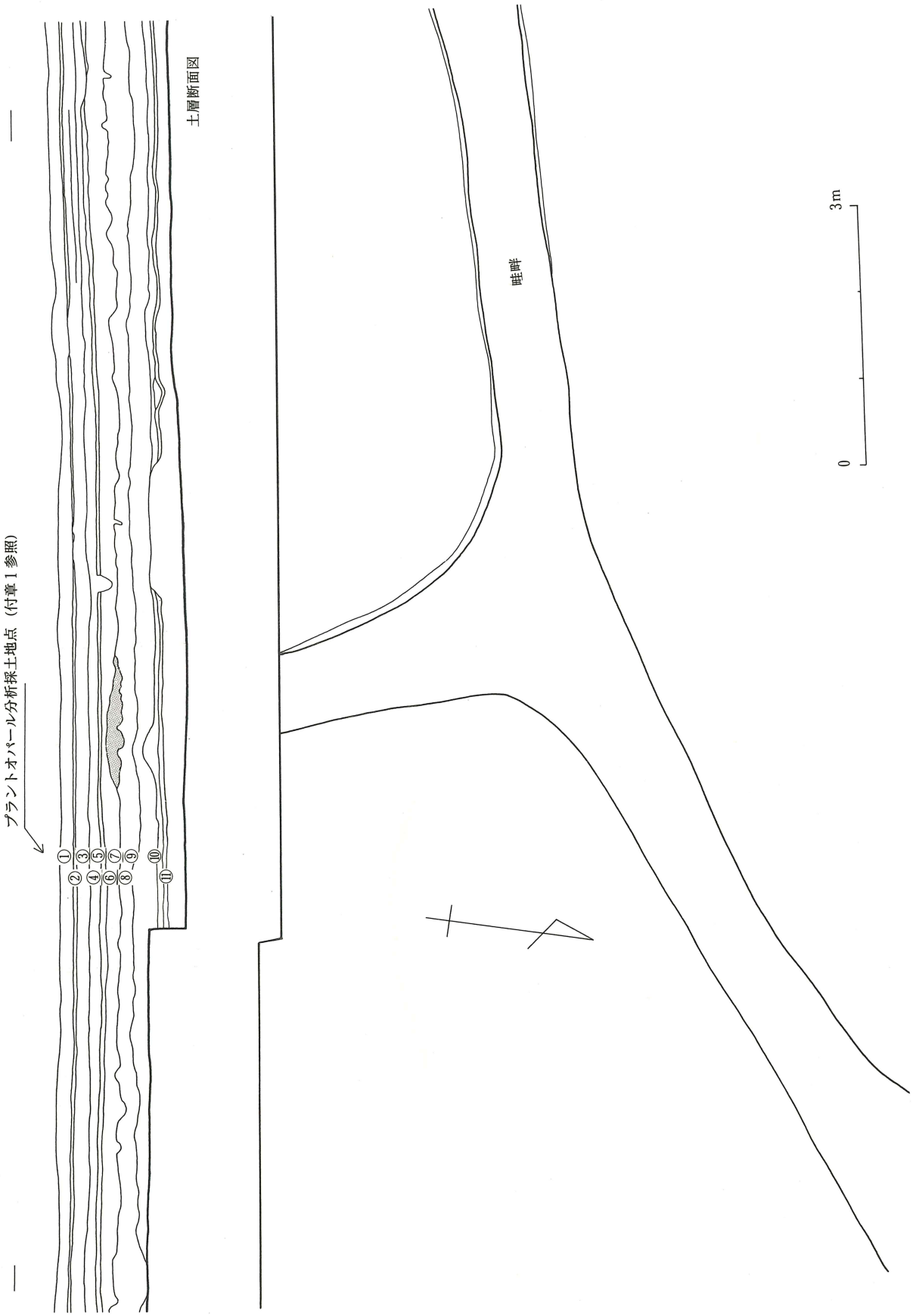
（水田）

前述した畦畔によって最低４カ所の水田面が想定できた。仮に図の様にａからｄ面とし、それぞれの耕作土下の標高差を出すと、ａ面と比べｂ面は５㌢程度低い。ｃ、ｄ面については僅かに低い程度で、ほとんど差がない。

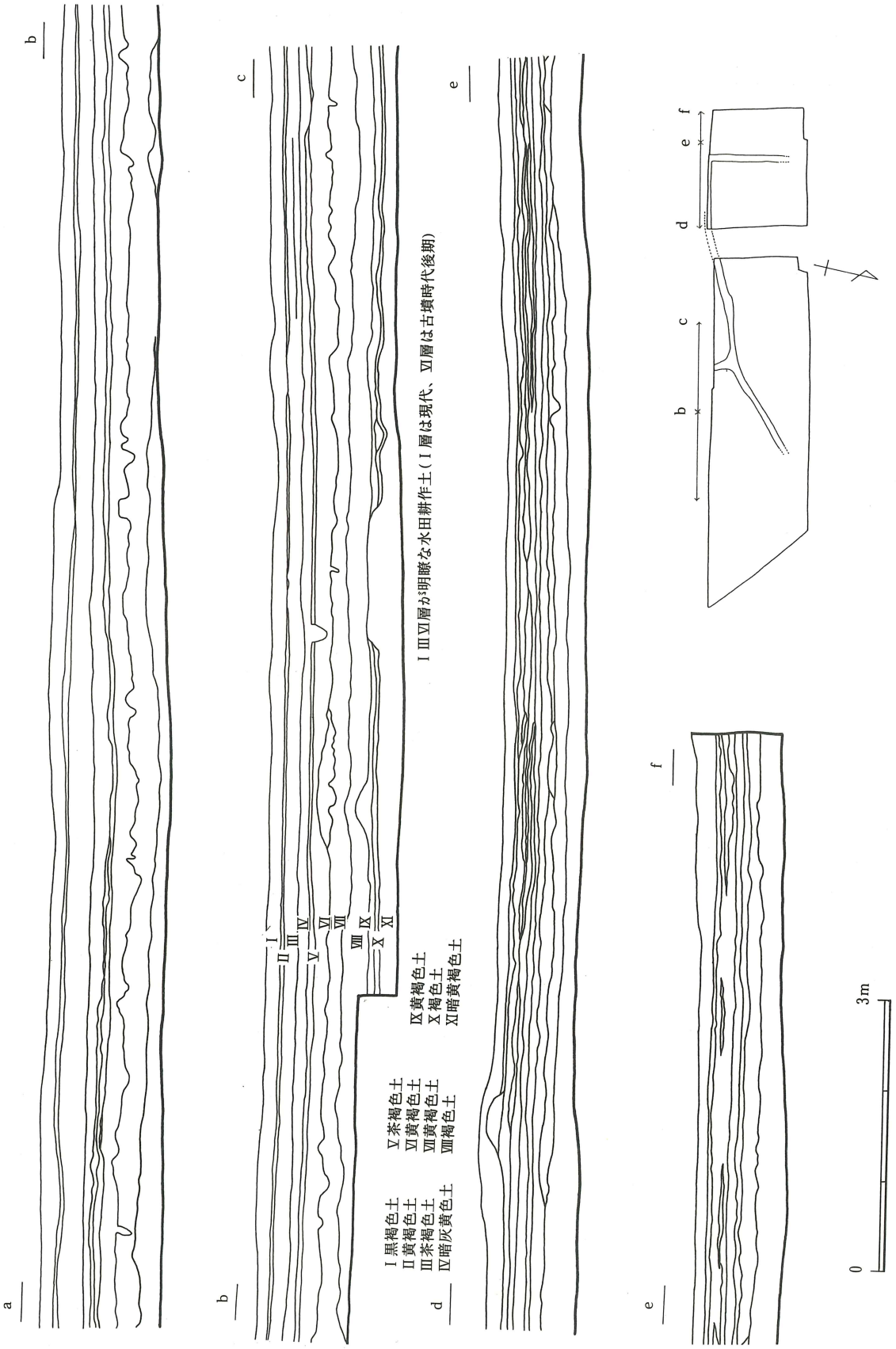
出土遺物には、下位水田耕作土中より234が出土している。



第71図　Ｅ、Ｆ区水田層出土土器



第72図　F 区 畦 畔 の 状 況



第73図　F区南壁土層断面図

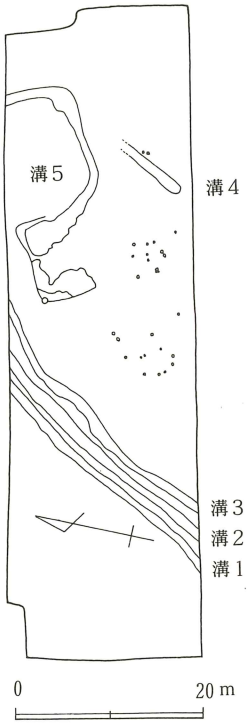
H区

H区は、調査区の中で最も東側に位置する部分で、溝が5条とピット、それと水田跡が検出された。溝は第1号溝から第3号溝は、50㌢ほどの間隔を開けてほぼ並行しており、D区の溝の状況と類似している。この3本の溝は調査区南壁の土層でみると、弥生時代後期の遺物を若干含む幅約7㍍（ただし、斜めになっている可能性が高いので、本来の幅はさらに狭かったものと考えられる。）で、深さ50㌢ほどの皿状の落ち込みの上面に掘られているのがわかる。この皿状の落ち込みは、残念ながら平面的に追うことはできなかったので溝になるのかどうかわからないが、下底面にやや粘質の強い土層があり、上層には砂層があることから、溝（あるいは旧河道）の可能性が高い。(註)

第4号溝との時期的な関係が窺われるが不明とせざるを得ない。第4号溝は、「コ」字状に屈曲する溝であるが、性格は不明である。

水田は、調査区全面に広がらずに第2号溝付近から西側に広がる。水田の時期は明確な遺物が出土しておらず不明であるが、中・近世の遺物はまったく出土しておらず、それ以前である可能性が高い。

<註>地形図を見ると、この皿状の「溝」の北側延長線上には湾曲する旧河道と思われる水田が伸びている。逆に南側は、「カワタ（川田？）」と呼ばれる旧河道が認められる。つまり、ある時期、七瀬川がやや北側を流れていたときの河川の1本が、この旧河道と考えられるのである。

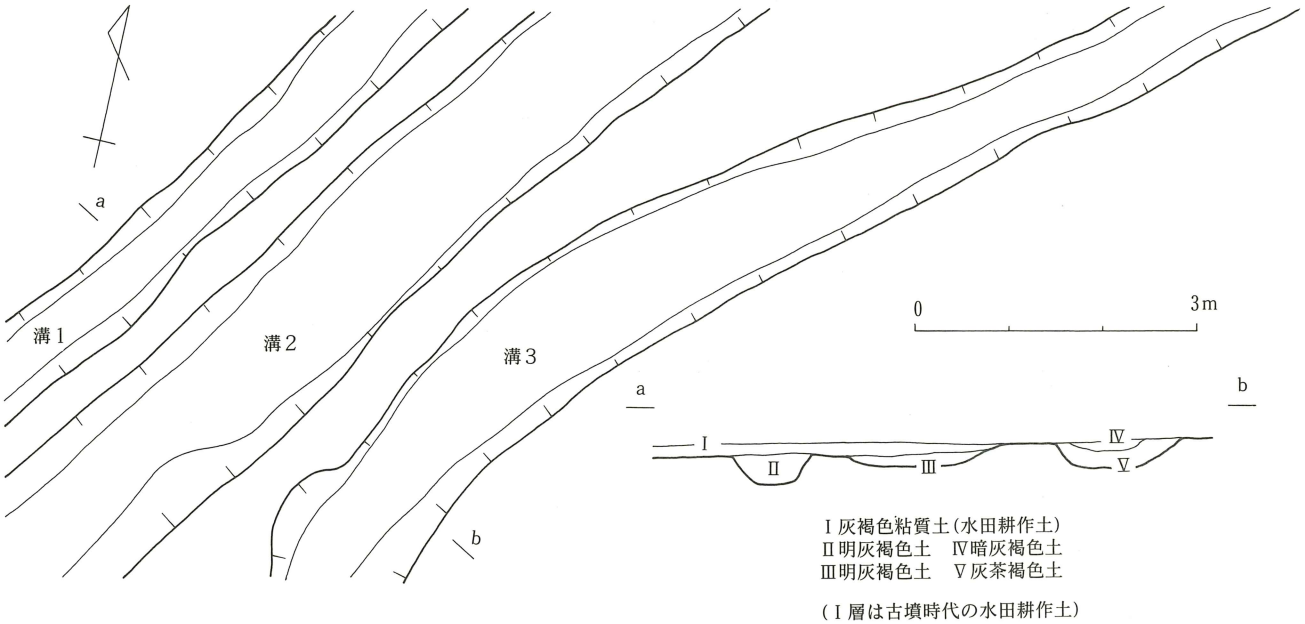


第74図　H区遺構配置図

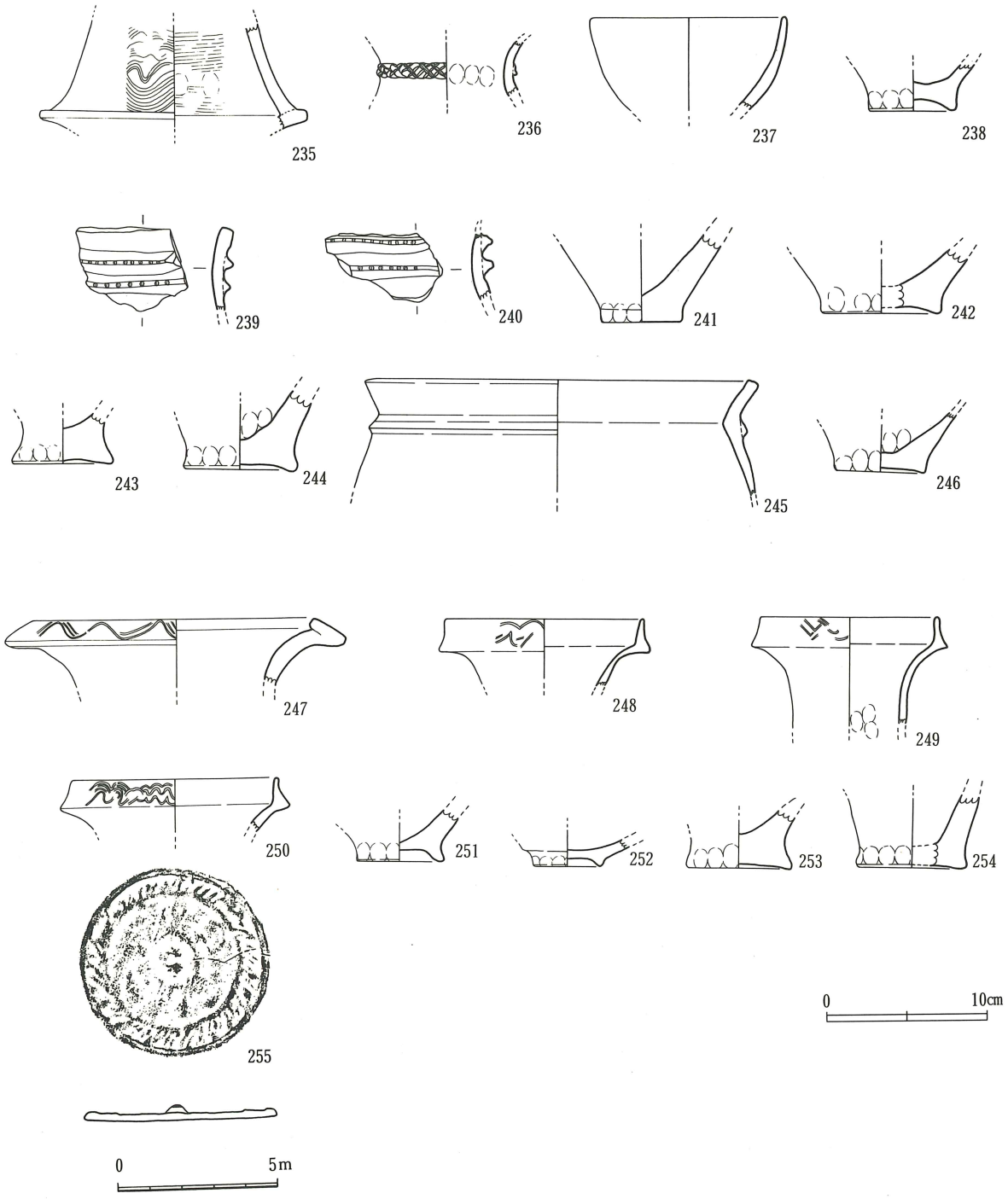
（第1号、2号、3号溝）

第1号溝から第3号溝は、ほぼ並行して南西方向から北東方向に伸びている。第1号溝は幅0.9㍍で深さ25㌢、第2号溝は幅1.4㍍で深さ15㍍、第3号溝は幅1.3㍍で深さ30㌢であり、いずれも浅い逆台形を呈する。内部の堆積状況はいずれも明灰褐色土である。

遺物は、235から246で、第1号溝内からは仿製鏡が出土した。鏡は狭縁で、斜行櫛歯文帯－文様帯－圏線－鈕となる。文様は不鮮明。鏡厚は2㎜程と厚い。



第75図　H区溝1、2、3実測図



第76図　H区溝１、２、３、４出土遺物実測、拓本図

（第４号溝）

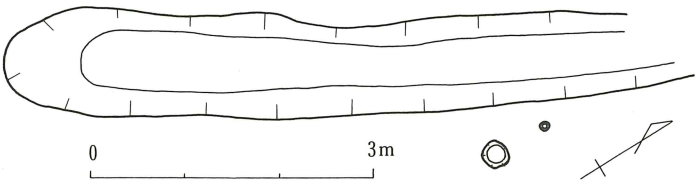
明確な掘り込みを持たないが、「コ」の字状に折れ曲がる浅い溝状遺構。幅は、広いところで３㍍、深さは深いところで30㌢で、おおむね10㌢程度である。流水などの痕跡はなく、また「コ」の字形に囲まれた内部にも何ら遺構は認められなかった。

遺物は、比較的大きな破片が出土している。247から254で、時期は弥生時代後期中葉である。

第77図　Ｈ区第４号溝実測図

（第５号溝）

第４号溝の南側にあり、幅約１㍍、深さ25㌢程度の規模でほぼ直線的に伸びている。出土遺物はなく時期、性格ともに不明である。



第78図　Ｈ区第５号溝実測図

（水田）

水田層は図の網かけ部分に広がっていた。上面には砂層の堆積が認められず、良好な状態ではなかった。また、出土遺物も細片のみであり、時期や構造を明確にできるものではなかった。しかし、土層の色調や混入物などは、Ｅ区などで確認された古墳時代後期の水田耕作土と酷似しており、状況から同時期と考えることができよう。

３．小結

遺構・遺物の内容については今まで述べてきた通りである。ここでは、この地区の土地利用の変遷についてまとめておきたい。まず、調査で出土した最も古い遺物はＨ区で出土した弥生時代後期の土器である。出土遺構は

溝であるが、どのような性格のものであったのかは不明である。しかし、古墳時代前期と考えられる3条の溝の下層に確認された溝が想定したように旧河道（弥生時代後期の土器を含む）であれば、それとの関連も考えられよう。

その後古墳時代前期にはD区において住居が築かれる。この場所は周辺部に比べてやや高く、沖積微高地にあたる。さらにこの微高地の周辺部に3本の溝が掘られる。この溝がどのような性格のものであったのかは、調査範囲の関係で明確には判らなかったが、水路か集落を巡る環濠の一部であったのかのいずれかであろう。

前者であった可能性は、溝の堆積状況から窺える。ただし、それが集落を画する意味も合わせもっていたものかもしれず、後者の可能性も残しておきたい。同様の溝はD区とH区で検出されており、仮に環濠であればこれを結び、さらに調査区北側への微高地の広がりなども考慮すると、東西200m以上の楕円形となる。(註)

水田はE区からH区にかけて検出された。時期は水田耕作土から出土した須恵器によって比定を行った。良好な出土状態ではないが、まったく後世のものを含まず、純粋な遺物包含であったことから時期は間違いないと考えてよい。

<註>D区の溝底とH区の溝底の標高差は約20センチある。

第79図　植田条里遺跡の古墳時代水田の広がり